論語と算盤

論語と算盤

VELUT ARBOR ÆVO

Presented to the

LIBRARY *of the*

UNIVERSITY OF TORONTO

by

Mr. E. Tamaki

LIBRARY

AUG 3 0 1996

UNIVERSITY OF TORONTO

凡例

一、本書題して『論語と算盤』とせしは、毫も奇を衒ひ異を好みて世人に迎合せんが爲にあらずして、其の命名は全く次項の理由に基くものなり。

一、本書收むる所は、我邦實業界の一大權威たると共に、特に財界の恩惠者たる澁澤男爵が、明治の初年大に慨する所あり、輙ち印綬を解きて野に下り、飄然として實業界に投ぜらるるに方り、信條を孔子教に執り、爾來四十有餘年の久しき、『論語と算盤』とは必ず合致すべきもの、又合致せしめざる可からざるもの、換言すれば、『仁義と殖利』とは、其の根柢に於て必ずしも捍挌するものにあらざることを創唱し實踐し、身を以て範を垂れ、且つ筆に舌に鼓吹せられつゝあるの精髓なり。

一、簡冊を成すが如きは、素より男爵の志にあらざるは敢て再言するの要なしと雖も、世上今尙ほ『道義と金錢』とは枘鑿相容れざるものゝ如き謬想に囚はるゝもの尠少にあらざるを

以て、玆に偉人の活教訓を提供して、之が迷夢を警醒せんが爲め、特に快諾を得て蒐集編纂せるものなり。

一、書中に蒐輯せるものは、男爵が時處に關はらず、物に應じ事に接して訓話せられたるものなれば、固より一の著述に於けるが如く、秩序的の系統をなさゞるは言を須ゐざるのみならず、往々重複するもの尠からざれども、重複は卽ち丁寧反覆の意にして、特に其の事項に對して注意を促すものと謂ふべきのみ。

一、書中、篇を設け章を別ちたりと雖も、是れ固より每訓話の全璧に亙るものにあらずして、中に就て崑山の片玉を摭摭し、讀書子の繙閲に便ぜんが爲め、特に編者が推類區分したるに過ぎざるなり。

一、本書を編纂するに方りては、之が資料は悉く龍門雜誌に仰ぎたるものなれば、爰に明記して責任を明かにす。

一、本書の刊行に際しては、男爵門下の龍門社幹事八十島親德氏は、常に公私の要務多端なるにも拘はらず、一再ならず貴重の時間を割愛し、以て懇篤なる幇助と便宜とを與へられたり、仍つて茲に特記し、謹んで感謝の意を表す。

大正五年九月　　　　編　者　識

格言七則

一賞不レ可ニ以不レ信也、一罰不レ可ニ以不レ明也。　新論

一馬之奔、無ニ一毛而不レ動、一舟之覆、無ニ一物而不レ沈。　孔叢子

一夫不レ耕、天下必受ニ其饑一、一婦不レ織、天下必受ニ其寒一。　潛夫論

一葉レ蔽目、不レ見ニ太山一、兩豆塞レ耳、不レ聞ニ雷霆一。　鶡冠子

一言而有レ益ニ於仁一、莫レ如レ起。　家語

一人之治亂在ニ其心一、一國存亡在ニ其主一。　管子

一心可ニ以事ニ百君一、百心不レ可ニ以事ニ一君一。　說苑

目次

處世と信條

◎論語と算盤とは甚だ遠くして甚だ近いもの……一
◎士魂商才……三
◎天は人を罰せず……一〇
◎人物の觀察法……一三
◎論語は萬人共通の實用的教訓……一七
◎時期を待つの要あり……二三
◎人は平等なるべし……二六
◎爭ひの可否……三〇

◎大丈夫の試金石……三五
◎蠻穴主義が肝要……三九
◎得意時代と失意時代……四三

立志と學問

◎精神老衰の豫防法……五〇
◎現在に働け……五八
◎大正維新の覺悟……六二
◎秀吉の長所と短所……六五
◎自ら箸を取れ……六九
◎大立志と小立志との調和……七四

◎君子の爭ひたれ……七九
◎社會と學問との關係……八五
◎勇猛心の養成法……八九
◎一生涯に歩むべき道……九二

常識と習慣

◎常識とは如何なるものか……九六
◎口は禍福の門なり……一〇二
◎惡んで其の美を知れ……一〇五
◎習慣の感染性と傳播力……一一〇
◎偉き人と完き人……一一五

◎親切らしき不親切……………………………………一一七
◎何なか眞才眞智と謂ふ……………………………一二三
◎動機と結果……………………………………………一二八
◎人生は努力にあり……………………………………一三一
◎正に就き邪に遠ざかるの道…………………………一三五

仁義と富貴

◎眞正の利殖法…………………………………………一三九
◎効力の有無は其人に在り……………………………一四四
◎孔夫子の貨殖富貴觀…………………………………一四八
◎防貧の第一要義………………………………………一五二

◎罪は金錢にあらず……一五七
◎金力悪用の實例……一六三
◎義理合一の信念を確立せよ……一六八
◎富豪と德義上の義務……一七三
◎能く集め能く散ぜよ……一七八

理想と迷信

◎道理ある希望を持て……一八三
◎この熱誠を要す……一八六
◎道德は進化すべきか……一八九
◎斯の如き矛盾を根絶すべし……一九三

◎人生觀の兩面……一九七
◎これは果して絕望か……二〇一
◎日新なるを要す……二〇五
◎修驗者の失敗……二〇九
◎眞正なる文明……二一四
◎發展の一大要素……二二〇
◎廓清の急務なる所以……二二三

人格と修養

◎樂翁公の幼時……二二八
◎人格の標準は如何……二三五

◎誤解され易き元氣……二四〇
◎二宮尊徳と西郷隆盛……二四三
◎修養は理論ではない……二四九
◎平生の心掛が大切……二五四
◎須らく其の原因を究むべし……二五九
◎東照公の修養……二六五
◎誤解されたる修養説を駁す……二七〇
◎權威ある人格養成法……二七三
◎商業に國境なし……二七七

算盤と權利

◎仁に當つては師に讓らず……二八二
◎金門公園の掛札……二八八
◎唯王道あるのみ……二九二
◎競爭の善意と惡意……二九七
◎合理的の經營……三〇二

実業と士道

◎武士道は卽ち實業道なり……三〇八
◎文明人の貪戾……三一二
◎相愛忠恕の道を以て交はるべし……三一八
◎天然の抵抗を征服せよ……三二三

◎摸倣時代に別れよ……………………………三二六
◎此にも能率増進法あり……………………三三〇
◎果して誰の責任ぞ…………………………三三六
◎功利學の弊を芟除すべし…………………三四〇
◎此の如き誤解あり…………………………三四五

教育と情誼

◎孝は強ふべきものにあらず………………三四九
◎現代敎育の得失……………………………三五三
◎偉人と其の母………………………………三六〇
◎其の罪果して孰れに在りや………………三六四

◎理論より實際……三六八
◎孝らしからぬ孝……三七二
◎人物過剩の一大原因……三七八

成敗と運命

◎それ唯忠恕のみ……三八三
◎失敗らしき成功……三八七
◎人事を盡して天命を待て……三九二
◎湖畔の感慨……三九五
◎順逆の二境は何れより來るか……三九七
◎細心にして大膽なれ……四〇二

○成敗は身に殘る糟粕……………………………………四〇五

目　次　終

格言五則

言行君子之樞機、樞機之發、榮辱之主。　易經

發レ言盈レ庭、誰敢執ニ其咎一。　詩經

言不レ務レ多、而務レ審ニ其所レ謂。　大戴記

聲無ニ細而不レ聞、行無ニ隱而不レ明。　說苑

志意修則驕ニ富貴一、道義重則輕ニ王公一。　荀子

論語と算盤

男爵　澁澤榮一述

處世と信條

◎論語と算盤は甚だ遠くして甚だ近いもの

今の道德に依つて最も重なるものとも言ふべきものは、孔子のことに就て門人達の書いた論語といふ書物がある、是は誰でも大抵讀むと云ふ事は知つて居るが、此の論語といふものと、算盤といふものがある、是は甚だ不釣合で、大變に懸隔したものであるけれども、私は不斷に此の算盤は論語に依つて出來て居る、論語は又算盤に依つて本當の

富が活動されるものである、故に論語と算盤は、甚だ遠くして甚だ近いものであると始終論じて居るのである、或時私の友人が、私が七十になつた時に、一の畫帖を造つて吳れた、其の畫帖の中に論語の本と算盤と、一方には「シルクハット」と朱鞘の大小の繪が描いてあつた、一日學者の三島毅先生が私の宅へござつて、其の繪を見られて甚だ面白い、私は論語讀みの方だ、お前は算盤を攻究して居る人で、其の算盤を持つ人が斯くの如き本を充分に論ずる以上は、自分も亦論語讀みだが算盤を大に講究せねばならぬから、お前と共に論語と算盤を成るべく密著するやうに努めやうと言はれて、論語と算盤のことに就て一の文章を書いて、道理と事實と利益と必ず一致するものであると云ふことを、種々なる例證を添へて一大文章を書いて吳れられた、私が常に此の物の進みは、是非共大なる慾望を以て利殖を圖ることに充分でないものは、決して進むものではない、

只空理に馳り虚榮に赴く國民は、決して眞理の發達をなすものではない、故に自分等は成るべく政治界軍事界などが唯跋扈せずに、實業界が成るべく力を張るやうに希望する、これは即ち物を増殖する務めである、是が完全で無ければ國の富は成さぬ、其の富を成す根源は何かと云へば、仁義道德、正しい道理の富でなければ、其の富は完全に永續することが出來ぬ、玆に於て論語と算盤といふ懸け離れたものを一致せしめる事が、今日の緊要の務と自分は考へて居るのである。

◎士魂商才

昔、菅原道眞は和魂漢才といふことを言つた、これは面白いことゝ思ふ、これに對して私は常に士魂商才といふことを唱道するのである、和魂漢才とは、日本人は日本の特

有なる日本魂といふものを根柢としなければ爲らぬが、併し支那は國も古し、文化も夙く開けて孔子、孟子の如き聖人賢者を出して居る位であるから、政治方面、文學方面その他に於て日本より一日の長がある、それゆゑ漢土の文物學問をも修得して才藝を養はなければ爲らぬといふ意味であつて、その漢土の文物學問は、書物も澤山あるけれども、孔子の言行を記した論語が中心となつて居るのである、それは尙書、詩經、周禮儀禮などの、禹湯文武周公の事を書いた書物もあるけれども、それとても矢張孔子の編纂したものと傳へられてあるから、漢學といへば孔子の學、孔子が中心となつて居るのである、其の孔子の言行を書いた論語であるから、菅公も大に之を愛誦し、應神天皇の朝に百濟の王仁が獻上した論語千字文の朝廷に傳へられたのを筆寫して伊勢の大廟に獻じたのが、世に菅本論語といつて現存して居るのである。

士魂商才といふのも同樣の意義で、人間の世の中に立つには武士的精神の必要であることは無論であるが、併し武士的精神のみに偏して商才といふものが無ければ、經濟の上から自滅を招くやうになる、故に士魂にして商才が無ければならぬ、其の士魂を養ふには、書物といふ上からは澤山あるけれども、矢張論語は最も士魂養成の根柢となるものと思ふ、それならば商才はどうかと云ふに、商才も論語に於て充分養へるといふのである、道德上の書物と商才とは何の關係が無いやうであるけれども、その商才といふものも、もと〳〵道德を以て根柢としたものであつて、道德と離れた不道德、詐瞞、浮華輕佻の商才は、謂ゆる小才子小悧口であつて、決して眞の商才ではない、故に商才は道德と離るべからざるものとすれば、道德の書たる論語に依つて養へる譯である、また人の世に處するの道は、なか〳〵至難のものである、けれども論語を熟讀翫味して往けば

大に覺る所があるのである、故に私は平生孔子の教を尊信すると同時に、論語を處世の金科玉條として、常に座右から離したことは無い。

我邦でも賢人豪傑は澤山に居る、其中でも最も戰爭が上手であり、處世の道が巧であつたのは德川家康公である、處世の道が巧なればこそ、多くの英雄豪傑を威服して十五代の覇業を開くを得たので、二百餘年間人々が安眠高枕することの出來たのは實に偉とすべきである、それゆゑ處世の巧みな家康公であるから、種々の訓言を遺されて居る、彼の『神君遺訓』なども、我々處世の道を實に能く說かれて居る、而して其の『神君遺訓』を私が論語と照し合せて見たのに、實に符節を合するが如くであつて、矢張大部分は論語から出たものだと云ふことが分つた、例へば『人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し』とあるのは、論語の『士不ㇾ可㆔以不㆓弘毅㆒、任重而道遠、仁以爲㆓己任㆒、不㆓

亦重乎、死而後已、不亦遠乎』とある、この曾子の言葉と實によく合つて居る。

また『己れを責めて人を責むるな』は、『己欲立而立人、己欲達而達人』といふ句の意を採られたのである、また『及ばざるは過ぎたるより勝れり』といふのは、例の『過猶不及』と孔子が教へられたのと一致して居る、『堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ』は『克己復禮』の意である、『人は唯身の程を知れ草の葉の、露も重きは落つるものかな』は分に安んずることである、『不自由を常と思へば不足なし、心に望み起らば困窮したる時を思ひ出すべし』『勝つことを知りて負くることを知らざれば、害その身に至る』とある、この意味の言葉は論語の各章に屢次繰返して説いてある。

次に公が處世に巧みであつたこと、二百餘年の大偉業を開かれたことは、大抵論語から來て居るのである。

世の人は漢學の敎ふる所は禪讓討伐を是認して居るから、我が國體に合しないといふが、そは一を知つて二を知らざる説である、孔子の『謂レ韶、盡レ善矣、又盡レ美也、謂レ武、盡レ美矣、未レ盡レ善也』とあるのを見ても明かであつて、韶といふ音樂は堯舜のことを述べたので、兎に角堯は舜の德を悅んで位を讓つたのである、故に其事を歌つた音樂は實に善美を盡して居る、然るに武といふ樂は武王の事を歌つたので、たとへ武王は德があつたにせよ、兵力を以て革命を起し位に登つたのであるから、從つて其の音樂も善を盡さないと言つて居られる、孔子の意では、革命といふことは望ましいものでないと云ふことが充分に看ることが出來る、何でも人を論ずるには其の時代といふものを考へなければならぬ、孔子は周の代の人であるから、充分に露骨に周代の惡き事を論ぜられないから、美を盡せり未だ善を盡さずと云ふやうに婉曲に言つて居るのである、不幸に

して孔子は日本のやうな萬世一系の國體を見もせず知りもしなかつたからであるが、若し日本に生れ又は日本に來て萬世一系の我が國體を見聞したならば、どの位讃歎したか知れない、韶を聞いて美を盡くし善を盡せりと譽めた所では無い、それ以上の賞讃尊敬の意を表したに違ひない、世人が孔子の學を論ずるには、能く孔子の精神を探り、謂ゆる眼光紙背に徹する底の大活眼を以て之を觀なければ、皮相に流れる虞れがある。

故に私は人の世に處せんとして道を誤まらざらんとするには、先づ論語を熟讀せよと云ふのである、現今世の進歩に從つて歐米各國から新しい學說が入つて來るが、其新しいといふは我々から見れば矢張古いもので、既に東洋で數千年前に言つて居る事と同一の者を、唯言葉の言ひ廻しを旨くして居るに過ぎぬと思はれるものが多い、歐米諸國の日進月歩の新しい者を研究するのも必要であるが、東洋古來の古い者の中にも棄て難い

者のあることを忘れてはならぬ。

◎天は人を罰せず

孔夫子が『罪を天に獲れば、禱る所なし』と曰はれた言葉のうちにある天とは、果して何であらうか、私は天とは天命の意味で、孔夫子も亦この意味に於て天なる語を用ゐられたものと信ずるのである。

人間が世の中に活き働いてるのは天命である、草木には草木の天命あり、鳥獸には鳥獸の天命がある、此の天命が卽ち天の配劑となつて顯はれ、同じ人間のうちにも、酒を賣るものがあつたり、餅を賣つたりする者があつたりするのである、天命には如何なる聖人賢者とても、必ず服從を餘儀なくせられるもので、堯と雖も吾が子の丹朱をして帝

位を繼がしむること能はず、舜と雖も亦太子の商均をして位に卽かしむるわけには行かなかつたのである、これ皆天命の然らしむる所で、人力の如何ともすべからざる所である、草木はどうしても草木で終らねばならぬもので、鳥獸に成らうとして成り得られるものでない、鳥獸とても亦如何に成らうとしたからとても、草木には成り得られぬものである、畢竟みな天命である、之によつて稽へて見ても、人間は天命に從つて行動せねばならぬものであることが頗る明かになる。

されば孔子が曰はれた『罪を天に獲る』とは、無理な眞似をして不自然の行動に出づるといふ意味であらうかと思ふ、無理な眞似をしたり不自然な行動をすれば、必ず惡い結果を身の上に受けねばならぬに極つて居る、その時になつて、その尻を何處かへ持つてゆかうとしたところで、元來が無理や不自然なことをして自ら招いだ應報であるから、

何處へも持つて行き所がないと云ふことになる。これが卽ち『禱る所なし』との意味である。

孔夫子は論語陽貨篇に於て、『天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉』と仰せられまた孟子も萬章章句上に於て、『天不言、以行與事示之而已』と曰はれて居る通り、人間が無理な眞似をしたり不自然な行動をしたりなぞして罪を天に獲たからとて、天が別に物を言つて其人に罰を加へるわけでも何でもない、周圍の事情によつて其人が苦痛を感ずるやうになるだけである、之が卽ち天罰といふものである、人間が如何に此の天罰から免れやうとしても、決して免れ得べきものでは無い、自然に四時の季節が行はれ、天地萬物の生育する如くに、天命は人の身の上に行はれてゆくものである、故に孔夫子も中庸の冒頭に於て、『天命之謂性』と言はれて居る。如何に人が神に禱ればとて、佛に

お頼み申したからとて、無理な眞似をしたり不自然な行爲をすれば、必ず因果應報は其人の身の上に廻り來るもので、到底之を逃れる譯に行くもので無い、是に於てか自然の大道を歩んで毫も無理な眞似をせず、内に省みて疚しからざる者にして、初めて孔夫子の言の如く、『天生徳於予、桓魋其如予何』との自信を生じ、玆に眞正の安心立命を得られることになるのである。

◎人物の觀察法

佐藤一齋先生は、人と初めて會つた時に得た印象によつて其人の如何なるかを判斷するのが、最も間違ひのない正確な人物觀察法なりとせられ、先生の著述になつた『言志錄』のうちには、『初見の時に相すれば人多く違はじ』といふ句さへある、初めて會つた

時に能く其人を觀れば、一齋先生の言の如く多くは誤たぬもので、度々會ふやうになつてからする觀察は考へ過ぎて、却つて過誤に陷り易いものである。初めてお會ひした其の時に、この方は大抵斯んな方だなと思ふた感じには、いろ〳〵の理窟や情實が混ぜぬから、至極純な所のあるもので、その方が若し僞り飾つて居らるれば、その僞り飾つて居らるゝ所が、初見の時にはチヤンと當方の胸の鏡に映つてあり〳〵と見えることになる、併し度々お會ひするやうになると、あゝでない斯うであらう抔と、他人の噂を聞いたり、理窟をつけたり、事情に囚はれたりして考へ過ぎることになるから、却つて人物の觀察を過まるものである。

また孟子は『存二乎人一者、莫レ良二於眸子一、眸子不レ能レ掩二其惡一、胸中正、則眸子瞭焉、胸中不レ正、則眸子眊焉』と、孟子一家の人物觀察法を說かれて居る、卽ち孟子の人物觀

察法は、人の眼によつて其の人物の如何を鑑別するもので、心情の正しからざるものは何となく眼に曇りがあるが、心情の正しいものは、眼が瞭然として淀みがないから、之によつて其人の如何なる人格であるやを判斷せよといふにある、この人物觀察法もなかなか的確の方法で、人の眼を能く觀て置きさへすれば、その人の善惡正邪は大抵知れるものである。

論語に『子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉』、初見の時に人を相する佐藤一齋先生の觀察法や、人の眸子を觀て其人を知る孟子の觀察法は、共に頗る簡易な手ッ取り早い方法で、是によつて大抵は大過なく、人物を正當に識別し得らるゝものであるが、人を眞に知らうとするには、斯る觀察法では到らぬ所があるから、茲に擧げた論語爲政篇の章句の如く、視、觀、察の三つを以て人を識別せねばなら

ぬものだと云ふのが、孔夫子の遺訓である。

視も觀も共に「ミル」と讀むが、視は單に外形を肉眼によつて見るだけの事で、觀は外形よりも更に立ち入つて其奥に進み、肉眼のみならず心眼を開いて見ることである、即ち孔夫子の論語に說かれた人物觀察法は、先づ第一に其人の外部に顯はれた行爲の善惡正邪を相し、それより其人の行爲は何を動機にして居るものなるやを篤と觀、更に一步を進めて、其人の安心は何れにあるや、其人は何に滿足して暮してるや等を知ることにすれば、必ず其人の眞人物が明瞭になるもので、如何に其人が隱さうとしても、隱し得られるものでないといふにある、如何に外部に顯はれる行爲が正しく見えても、その行爲の動機になる精神が正しくなければ、其人は決して正しい人であるとは言へぬ、時には惡を敢てすること無しとせずである、また外部に現はれた行爲も正しく、これが動機と

なる精神も亦正しいからとて、若しその安んずるところが飽食暖衣逸居するに在りといふやうでは、時に誘惑に陷つて意外の惡を爲すやうにもなるものである、故に行爲と動機と、滿足する點との三拍子が揃つて正しくなければ、其人は徹頭徹尾永遠まで正しい人であるとは言ひかねるのである。

◎論語は萬人共通の實用的敎訓

明治六年官を辭して、年來の希望なる實業に入ることに爲つてから、論語に對して特別の關係が出來た、其れは始めて商賣人になるといふ時、不圖心に感じたのは、是からは愈々錙銖の利もて世渡りをしなければならぬが、志を如何に持つべきかに就て考へた、その時前に習つた論語のことを思ひ出したのである。論語には己を修め人に交はる

日常の教が說いてある、論語は最も缺點の少い教訓であるが、此の論語で商賣は能まいかと考へた、そして私は論語の教訓に從つて商賣し、利殖を圖ることが能ると考へたのである。

そこへ恰度玉乃（世履）といふ岩國の人で、後に大審院長になり、書も達者、文も上手至つて眞面目な人で、役人中では玉乃と私とはマー循吏と謂はれて居た、二人は官で非常に懇親にし、官も相並んで進み、勅任官になつた、二人は共に將來は國務大臣にならうといふ希望を懷いて進んで居たのだから、私が突然官を辭して商人になるといふを聞き、痛く惜まれ、是非にと言つて引止めて呉れた、私は其時井上さんの次官をして居たので、井上さんは官制の事に就て內閣と意見を異にし、殆んど喧嘩腰で退いた、そして私も井上さんと共に辭したから、私も內閣と喧嘩して辭したやうに見えたのである、

勿論私も井上さんと同じく內閣と意見は違つて居たけれども、私の辭したは喧嘩ではない、主旨が違ふ、私の辭職の原因は、當時の我國は政治でも敎育でも著々改善すべき必要がある、併し我が日本は、商賣が最も振はぬ、之が振はねば日本の國富を增進することが出來ぬ、これは如何にもして他の方面と同時に、商賣を振興せねばならぬと考へた其時までは商賣に學問は不要である、學問を覺えれば却つて害がある、『貸家札唐樣で書く三代目』といつて、三代目は危險であるといふ時代であつた、そこで不肖ながら學問を以て利殖を圖らねばならぬといふ決心で、商賣人に變つたのであるけれども、併しそこまでは幾ら友人でも分らなかつたのだから、私の辭職を喧嘩だと合點し、酷く私を誤つて居るとして責めた、君も遠からず長官になれる、大臣になれる、お互に官にあつて國家の爲に盡すべき身だ、然るに賤しむべき金錢に眼が眩み、官を去つて商人になる

とは實に呆れる、今まで君をさういふ人間だとは思はなかつた、と言ふて忠告して呉れた、其時私は大に玉乃を辯駁し說得したが、私は論語を引合に出したのである、趙普が論語の半ばで宰相を助け、半ばで吾身を修めると言つた事などを引き、私は論語で一生を貫いて見せる、金錢を取扱ふが何故賤しいか、君のやうに金錢を卑しむやうでは國家は立たぬ、官が高いとか、人爵が高いとかいふことは、さう尊いものでない、人間の勤むべき尊い仕事は到る處にある、官だけが尊いのではないと色々論語などを援いて辯駁し說きつけたのである、そして私は論語を最も瑕瑾のないものと思ふたから、論語の教訓を標準として、一生商賣を遣つて見ようと決心した、其れは明治六年の五月のことであつた。

其れからといふものは、勢ひ論語を讀まなければならぬ事になり、中村敬宇先生や、

信夫恕軒先生に講義を聽いた、何れも多忙なものだから、終りまでは成し遂げなんだが、最近からは大學の宇野さんに願つて復た始めた、主として子供の爲に遣つて居るが、私も必ず出席して聽き、そして種々と質問し、又解釋に就て意見が出たりして、中々面白く有益である、一章々々講義し、皆で考へて本當に分つて後進むのだから中々進まないが、その代り意味は善く判つて、子供なども大變に面白がつて居る。

私は今までに五人の手で論語を講究して居るが、學問的でないから、時には深い意味を知らずに居ることがある、例へば、泰伯第八の『邦有レ道、貧且賤焉、恥也、邦無レ道、富且貴焉、恥也』の語の如きも、今となつて深い意味を含んで居ることを知つた、此度は論語を委しく攻究して居るので、色々な點に氣がついて悟るところが多い、併し論語は決して六ケ敷い學理ではない、六ケ敷いものを讀む學者でなければ解らぬといふやう

なものでない、論語の教は廣く世間に効能があるので、元來解り易いものであるのを、學者が六ケ敷くして了ひ、農工商などの與かり知るべきもので無いといふやうにして了つた、商人や農人は論語を手にすべきもので無いといふやうにして了つた、之は大なる間違である。

此の如き學者は、喩へば八ケましき玄關番のやうな者で、孔夫子には邪魔物である、斯んな玄關番を頼んでは孔夫子に面會することは出來ぬ、孔夫子は決して六ケ敷屋でなく、案外捌けた方で、商人でも農人でも誰にでも會つて教へて吳れる方で、孔夫子の教は實用的の卑近の教である。

◎時期を待つの要あり

苟くも人と生れ――殊に青年時代に於て、絶對に爭を避けやうとする如き卑屈の根性では、到底進歩する見込も發達する見込もなく、また社會進運の上にも爭の必要であることは、言ふまでもないのであるが、爭を強て避けぬと同時に、時期の到來を氣長に待つといふことも、處世の上には必要缺くべからざるものである。

私は今日とても勿論、爭はざるべからざる所は爭ひもするが、半生以上の長い間の經驗によつて、些か悟つた所があるので、若い時に於けるが如くに、爭ふことを餘り多く致さぬやうになつたかの如くに自分ながら思はれる、これは世の中のことは、斯くすれば必ず斯くなるものである、といふ因果の關係を能く呑込んで了つて、既に或る事情が因をなして或る結果を生じてしまつてる所に、突然横から現はれて形勢を轉換しやうとし、如何に爭つて見た所が、因果の關係は俄に之を斷ち得るものでなく、或る一定の時

期に達するまでは、人力で到底形勢を動かし得ざるものであることに想ひ到つたからである、人が世の中に處して行くのには、形勢を觀望して氣長に時期の到來を待つといふことも、決して忘れてはならぬ心懸である、正しきを曲げんとするもの、信ずる所を屈せしめんとする者あらば、斷じて之と爭はねばならぬ、青年子弟諸君に勸める傍ら、私はまた氣長に時期の到來を待つの忍耐もなければならぬことを、是非青年子弟諸君に考へて置いて貰ひたいのである。

私は日本今日の現狀に對しても、極力爭つて見たいと思ふことがないでも無い、幾干もある、就中日本の現狀で私の最も遺憾に思ふのは官尊民卑の弊が尙だ止まぬことである、官にある者ならば、如何に不都合なことを働いても、大抵は看過せられてしまふ、偶々世間物議の種を作つて、裁判沙汰となつたり、或は隱居をせねばならぬやうな羽目

に遇ふ如き場合もないでは無いが、官にあつて不都合を働いて居る全體の者に比較すれば、實に九牛の一毛、大海の一滴にも當らず、官にある者の不都合の所爲は、或る程度までは默許の姿であると云つても、敢て過言ではないほどである。

之に反し、民間にある者は、少しでも不都合の所爲があれば、直ちに摘發されて、忽ち縲紲の憂き目に遇はねば爲らなくなる、不都合の所爲あるものは總て罰せねばならぬとならば、その間に朝にあると野にあるとの差別を設け、一方は寛に一方は酷であるやうなとがあつてはならぬ、若し大目に看過すべきものならば、民間にある人々に對しても官にある人々に對すると同樣に、之を看過して然るべきものである、然るに日本の現狀は、今以て官民の別により寛嚴の手心を異にして居る。

また民間にある者が如何に國家の進運に貢獻するやうな功績を擧げても、その功が容

易に天朝に認められぬに反し、官にあるものは寸功があつたのみでも、直ぐに其れが認められて恩賞に與かるやうになる、是等の點は、私が今日に於て極力爭つて見たいと思ふところだが、たとひ如何に私が爭つたからとて、或る時期の到來するまでは、到底大勢を一變するわけにゆかぬものと考へて居るので、目下のところ私は、折に觸れ不平を洩すぐらゐに止め、敢て爭はず、時期を待つてるのである。

◎人は平等なるべし

材能の適不適を察し、適材を適所に置くといふことは、多少なりとも人を使ふ者の、常に口に是を言ふ所であつて、而して又常に心に是を難ずる所である。更に又惟ふに、適材を適所に置くといふことの蔭には、往々にして權謀の加味されて居る場合がある、

自己の權勢を張らうとするには、何よりも適材を適所に配備し、一步は一步より、一段は一段より、漸次に自己の勢力を扶植し、漸次に自己の立脚地を蹈固めて行かなければならぬ、斯樣に工夫するものは、遂に能く一派の權勢を築き上げて、政治界に處しても、事業界に處しても、乃至何等の社會に處しても、儼然として覇者の威を振ふことが出來るのである、併し左樣な行き方は、斷じて私の學ぶ所では無い。

我國の古今を通じて、德川家康といふ人ほど巧みに適材を適所に配備して、自家の權勢を張るに便じた權謀家は見當らない。居城江戸の警備として、關東は大方譜代恩顧の郞黨を以て取固め、箱根の關所を控へて大久保相模守を小田原に備へ、謂ゆる三家は、水戸家を以て東國の門戸を抑へ、尾州家を以て東海の要衝を扼し、紀州家を以て畿內の背後を警め、井伊掃部頭を彥根に置いて平安王城を壓したなんど、人物の配備は實に其

妙を極めたのである、其他越後の榊原、會津の保科、出羽の酒井、伊賀の藤堂にしても、且は中國九州は勿論、日本國中到らぬ隈なく、要所には必ず自家恩顧の郎黨を配備し、これはと思ふ大名は、手も足も出ぬやうに取詰め、見事に徳川三百年の社稷を築き上げたのである、斯くして得たる家康の覇道は、我が國體に適ふものであつたか否かは、私が更めて批評するまでもないが、兎も角も適材を適所に置くといふ手腕に於ては、古今家康に企及し得るもの、我が國史には其の匹儔を覓め難いのである。

私は適材を適所に配備する工夫に於て家康の故智にあやかりたいものと、斷えず苦心して居るのであるが、其の目的に於ては全く家康に倣ふ所がない、澁澤は何所までも澁澤の心を以て、我と相共にする人物に對するのである、是を道具に使つて自家の勢力を築かうの、何うのといふ私心は毛頭も蓄はへて居らぬ、唯私の素志は適所に適材を得る

ことに存するのである、適材の適所に處して、而して何等かの成績を擧げるとは、これ其人の國家社會に貢獻する本來の道であつて、やがて又それが澁澤の國家社會に貢獻する道となるのである、私は此の信念の下に人物を待つのである、權謀的色彩を以て其人を汚辱し、自家薬籠の丸子として、其人を封じこめて了ふやうな、罪な業は決して致さぬ、活動の天地は自由なものでなければならぬ、澁澤の下に居りて舞臺か狹いのならば、卽座に澁澤と袂を分ち、自由自在に海濶な大舞臺に乘り出して、思ふさま手一杯の働き振を見せて下さることを私は衷心から希ふて居る、我に一日の長あるが爲に、人の自ら卑うして私の許に働いて吳れるにしても、人の一日の及ばざるの故を以て、私は其人を卑しめたくない、人は平等でなければならぬ、節制あり禮讓ある平等でなければならぬ、私を德とする人もあらうが、私も人を德として居る、畢竟世の中は相持ちと極めて

居るから、我も驕らず、彼も侮らず、互に相許して毫末も乖離する所のなきやうに私は勤めて居る。

◎爭ひの可否

世間には、爭ひを絕對に排斥し、如何なる場合に於ても爭ひをするといふことは宜しくない、『人若し爾の右の頰を打たば、左の頰をも向けよ』などと說く者もある、斯んな次第で他人と爭ひをするといふことは、處世上に果して利益になるものだらうか、將た不利益を與へるものだらうか、この實際問題になれば、隨分人によつて意見が異なることだらうと思ふ、爭ひは決して排斥すべきで無いと言ふものがあるかと思へば、又絕對に排斥すべきものだと考へて居る人もある。

私一己の意見としては、爭ひは決して絶對に排斥すべきものでなく、處世の上にも甚だ必要のものであらうかと信ずるのである、私に對し、世間では餘りに圓滿過ぎる、などとの非難もあるらしく聞き及んで居るが、私は謾りに爭ふ如き事こそせざれ、世間の皆樣達がお考へになつて居る如く、爭ひを絶對に避けるのを處世唯一の方針と心得て居るほどに、さう圓滿な人間でも無い。

孟子も告子章句下に於て『無二敵國外患一者、國恒亡』と申されて居るが、如何にも其の通りで、國家が健全なる發達を遂げて參らうとするには、商工業に於ても、學術技藝に於ても、外交に於ても、常に外國と爭つて必ず之に勝つて見せる、といふ意氣込みが無ければならぬものである、啻に國家のみならず、一個人におきましても、常に四圍に敵があつて之に苦められ、その敵と爭つて必ず勝つて見せうとの氣が無くては、決し

て發達進歩するもので無い。

後進を誘掖輔導せらるゝ先輩にも、大觀した所で、二種類の人物があるかの如くに思はれる、その一は、何事も後進に對して優しく親切に當る人で、決して後進を責めるとか、苛めるとかいふやうな事をせず、飽くまで懇篤と親切とを以て後進を引立て、決して後進の敵になる如き擧動に出でず、如何なる缺點失策があつても、猶ほ其の後進の味方となるを辭せず、何所々々までも後進を庇護して行かうとするのを持前とせられて居る、斯ういふ風な先輩は、後進より非常の信頼を受け、慈母の如くに懐かれ慕はるゝものであるが、斯る先輩が果して後進の爲に眞の利益になるか如何かは、些か疑問である。

他の種類は恰度これの正反對で、何時でも後進に對するに敵國の態度を以てし、後進の揚足を取ることばかりを敢てして悦び、何か少しの缺點が後進にあれば、直ぐガミガ

こと怒鳴りつけて、之を叱り飛ばして完膚なきまでに罵り責め、失策でもすると、もう一切かまひつけぬといふ程に、つらく後進に當る人である、斯く一見殘酷なる態度に出づる先輩は、往々後進の怨恨を受けるやうな事もあるほどのもので、後進の間には甚だ人望の乏しいものであるが、斯る先輩は果して後進の利益にならぬものだらうか、この點は篤と青年子弟諸君に於て熟考せられて然るべきものだらうと思ふ。

如何に缺點があつても、又失策しても、飽くまで庇護して吳れる先輩の懇篤なる親切心は、誠に有難いものであるに相違ないが、かゝる先輩しかないといふ事になれば、後進の奮發心を甚しく沮喪さするものである、假令失策しても先輩が恕して吳れる、甚しきに至つては、如何なる失策をしても、失策すれば失策したで先輩が救つて吳れるから、豫め心配する必要は無いなど、至極暢氣に構へて、事業に當るにも綿密なる注意を缺

いたり、輕躁な事をしたりするやうな後進を生ずるに至り、どうしても後進の奮發心を鈍らす事になるものである。

之に反し、後進をガミ〳〵責めつけて、常に後進の揚足を取つてやらう〳〵といふ氣の先輩が上にあれば、その下にある後進は、寸時も油斷がならず、一擧一動にも隙を作らぬやうにと心懸け、あの人に揚足を取られる樣な事があつてはならぬから、と自然身持にも注意して不身持なことをせず、怠るやうなことも愼み、一體に後進の身が締るやうになるものである、殊に後進の揚足を取るに得意な先輩は、後進の缺點失策を責めつけ、之を罵り嘲るのみで滿足せず、その親の名までも引き出して、之を惡ざまに言ひ罵り「一體貴公の親からして宜しく無い」なぞとの語を能く口にしたがるものである、隨つて斯る先輩の下にある後進は、若し一旦失敗失策があれば、單に自分が再び世に立て

なくなるのみならず、親の名までも辱しめ、一家の恥辱になると思ふから、どうしても奮發する氣になるものである。

◎大丈夫の試金石

眞の逆境とは如何なる場合をいふか、實例に徴して一應の說明を試みたいと思ふ、凡そ世の中は順調を保つて平穩無事にゆくのが普通であるべき筈ではあるが、水に波動のある如く、空中に風の起るが如く、平靜なる國家社會すらも、時としては革命とか變亂とかいふことが起つて來ないとも斷言されない、而してこれを平靜無事な時に比すれば明かに逆であるが、人も亦此の如き變亂の時代に生れ合ひ、心ならずも其の渦中に捲き込まれるは不幸の者で、斯ういふのが眞の逆境に立つといふのではあるまいか、果

して然らば余も亦逆境に處して來た一人である、余は維新前後世の中が最も騷々しかつた時代に生れ合ひ、樣々の變化に遭遇して今日に及んだ、顧みるに維新の際に於けるが如き世の變化に際しては、如何に智能ある者でも、また勉強家でも、意外な逆境に立つたり、或は順境に向ふたりしないとは言はれない、現に余は最初尊王討幕、攘夷鎖港を論じて東西に奔走して居たものであつたが、後には一橋家の家來となり、幕府の臣下となり、それより民部公子に隨行して佛國に渡航したのであるが、歸朝して見れば幕府は既に亡びて世は王政に變つて居た、此間の變化の如き、或は自分に智能の足らぬことはあつたであらうが、勉強の點に付ては自己の力一杯にやつた積りで、不足はなかつたと思ふ、併しながら社會の遷轉、政體の革新に遇うては、之を奈何ともする能はず、余は實に逆境の人となつて仕舞つたのである、其頃逆境に居つて最も困難したことと

は今も尚ほ記憶して居る、當時困難したものは余一人だけでなく、相當の人材中に余と境遇を同じうした者は澤山にあつたに相違ないが、斯の如きは畢竟大變化に際して免れ難い結果であらう、但しこんな大波瀾は少いとしても、時代の推移に伴れて、常に人生に小波瀾あることは止むを得ない、從つて其の渦中に投ぜられて逆境に立つ人も常にあることであらうから、世の中に逆境は絶對に無いと言ひ切ることは出來ないのである、只順逆を立つる人は、宜しく其の由つて來る所以を講究し、それが人爲的逆境であるか、但しは自然的逆境であるかを區別し、然る後之に應ずるの策を立てねばならぬ。

併し自然的逆境は大丈夫の試金石であるが、さて其の逆境に立つた場合は如何に其間に處すべきか、神ならぬ身の余は別にそれに對する特別の祕訣を持つものではない、

又恐らく社會にも左樣いふ祕訣を知つた人はなからうと思ふ、併しながら余が逆境に立つた時、自ら實驗した所、及び道理上から考へて見るに、若し何人でも自然的逆境に立つた場合には、第一に其の場合に自己の本分であると覺悟するのが唯一の策であらうと思ふ、足るを知りて分を守り、これは如何に焦慮すればとて、天命であるから仕方がないとあきらめるならば、如何に處し難き逆境に居ても、心は平かなるを得るに相違ない、然るに若し此の場合を總て人爲的に解釋し、人間の力で如何にかなるものであると考へるならば、徒らに苦勞の種を增すばかりか、勞して功のない結果となり、遂には逆境に疲れさせられて、後日の策を講ずることも出來なくなつて仕舞ふであらう、故に自然的の逆境に處するに當つては、先づ天命に安んじ、徐ろに來るべき運命を待ちつゝ撓まず屈せず勉强するが可い。

それに反して、人爲的の逆境に陷つた場合は如何にすべきかといふに、之は多く自働的なれば、何でも自分に省みて惡い點を改めるより外はない、世の中の事は多く自働的のもので、自分から斯う仕度いあゝ仕度いと奮勵さへすれば、大概は其の意の如くになるものである、然るに多くの人は自ら幸福なる運命を招かうとはせず、却つて手前の方から殆んと故意に佞けた人となつて逆境を招くやうな事をして仕舞ふ、それでは順境に立ちたい、幸福な生涯を送りたいとて、其れを得られる筈が無いではないか。

◎蟹穴主義が肝要

私の處世の方針としては、今日まで忠恕一貫の思想でやり通した、古來宗教家道德家といふやうな人に碩學鴻儒が澤山輩出して、道を教へ法を立てたけれども、畢竟それは

修身——即ち身を修めるといふ一事に盡きて居るだらうと思ふ、其の修身も廻りくどく言へば六ケ敷いが、解り易く云へば、箸の上げ下しの間の注意にも、十分その意義が含まれて居るだらうと思はれる、私は其の意味に於て、家族に對しても、客に對しても、其他手紙を見るにも何を見るにも誠意を以てして居る、孔子は此の意味を『入公門、鞠躬如也、如不容、立不中門、行不履閾、過位、色勃如也、足躩如也、其言似不足者、攝齊升堂、鞠躬如也、屏氣、似不息者、出降一等、逞顏色、怡々如也、沒階趨進、翼如也、復其位、踧踖如也』の中に遺憾なく說いて居られる、又、享禮、聘招、衣服、起臥に就ても諄々と說かれ、食物の段に至つて、『食不厭精、膾不厭細、食饐而餲、魚餒而肉敗不食、色惡不食、臭惡不食、失飪不食、不時不食、割不正不食、不得其醬不食』云々と言つて居られる、是等は極く卑近な例だが、道德や

倫理は是等卑近の裡に籠つて居るのであらうと思ふ。

箸の上げ下しの注意が出來れば、次に心掛くべきは自分を知るといふことである、世の中には隨分自分の力を過信して非望を起す人もあるが、餘り進むことばかり知つて、分を守ることを知らぬと、飛んだ間違を惹き起すことがある、私は蟹は甲羅に似せて穴を掘るといふ主義で、澁澤の分を守るといふことを心掛けて居る、是でも今から十年ばかり前に、是非大藏大臣になつて吳れだの、また日本銀行の總裁になつて吳れだのといふ交渉を受けたこともあるが、自分は明治六年に感ずる所があつて實業界に穴を掘つて這入つたのであるから、今更その穴を這出すことも出來ないと思つて固く辭して了つた、孔子は、『以て進むべくんば進み、以て止まるべくんば止まり、以て退くべくんば退く』と言つて居られるが、實際人は其の出處進退が大切である、併しながら分に安んずるか

らといつても、進取の氣象を忘れて了つては何にもならぬ、業若し成らずんば死すとも還ずとか、大功は細瑾を顧みずとか、男子一度意を決す、須からく乾坤一擲、快擧を試むべしなどいふが、其間にも必ず己が分を忘れてはならぬ、孔子は『心の欲する所に従つて矩を踰えず』と曰はれたが、つまり分に安んじて進むのが可からうと思ふ。

次に青年の最も注意すべきことは、喜怒哀樂である、特に青年のみならず、凡そ人間が處世の道を誤るのは、主として七情の發作宜しきを得ざるが爲で、孔子も『關雎は樂んで淫せず、哀んで傷らず』といつて、深く喜怒哀樂の調節の必要なることを述べて居られる、私共も酒も飲めば遊びもしたが、淫せず傷らずといふことを常に限度として居た、之を要するに、私の主義は誠意誠心、何事も誠を以て律すると言ふより外何物もないのである。

◎得意時代と失意時代

凡そ人の禍は多くは得意時代に萌すもので、得意の時は誰しも調子に乗るといふ傾向があるから、禍害は此の缺陷に喰ひ入るのである、されば人の世に處するには此點に注意し、得意時代だからとて氣を緩さず、失意の時だからとて落膽せず、常操を以て道理を踏み通すやうに心掛けて出ることが肝要である、其れと共に考へねばならぬことは大事と小事とに就てゞある、失意時代なら小事も尙ほ能く心するものであるが、多くの人の得意時代に於ける思慮は全く其れと反し、『なにこれしきのこと』と云つたやうに、小事に對しては殊に輕侮的の態度を取り勝ちである、併しながら得意時代と失意時代とに拘はらず、常に大事と小事とに就ての心掛を緻密にせぬと、思はざる過失に陷り易い

ことを忘れはならぬ。

誰でも目前に大事を控へた場合には、之を如何にして處置すべきかと、精神を注いで周密に思案するけれども、小事に對すると之に反し、頭から馬鹿にして不注意の中に之をやり過して了ふのが世間の常態である。但し箸の上げ下しにも心を勞する程小事に拘泥するは、限りある精神を徒勞するといふもので、何も夫程心を用ふる必要の無いこともある、また大事だからとて、左まで心配せずとも濟まされることもある、故に事の大小といふたとて、表面から觀察して直ちに決する譯にはゆかぬ、小事却つて大事となり、大事案外小事となる場合もあるから、大小に拘はらず、その性質をよく考慮して、然る後に相當の處置に出るやうに心掛くるのが宜いのである。

然らば大事に處するには如何にすれば宜いかといふに、先づ事に當つて能く之を處理

することが出來やうかと云ふことを考へて見なければならぬ、けれども其れとて人々の思慮に因るので、或人は自己の損得は第二に置き、專ら其事に就て最善の方法を考へる、又或人は自己の得失を先にして考へる、或は何物をも犧牲として其事の成就を一念に思ふ者もあれば、之と反對に自家を主とし、社會の如きは寧ろ眼中に置かぬ打算もあらう、蓋し人は銘々その面貌の變つて居る如く、心も異つて居るものであるから、一様に言ふ譯には行かぬが、若し余にどう考へるかと問はるれば、次の如く答へる、即ち事柄に對し如何にせば道理に契ふかを先づ考へ、而して其の道理に契つた遣方をすれば國家社會の利益となるかを考へ、更に此くすれば自己の爲にもなるかと考へる、さう考へて見た時、若しそれが自己の爲にはならぬが、道理にも契ひ、國家社會をも利益するといふことなら、余は斷然自己を捨て、道理のある所に從ふ積りである。

斯く事に對して是非得失、道理不道理を考査探究して、然る後に手を下すのが事を處理するに於て宜しきを得た方法であらうと思ふ、併し考へるといふ點から見れば、孰れにしても精細に思慮しなくてはならぬ、一見して之は道理に契ふから從ふがよいとか、之は公益に悖るから棄てるが宜いとかいふが如き早飲込はいけない、道理に合ひさうに見えることでも、非道理の點はなからうかと右からも左からも考へるが可い、また公益に反するやうに見えても、後々には矢張世の爲になるものではなからうかと、穿ち入つて考へなくてはならぬ　一言にして是非曲直、道理非道理と速斷しても、適切でなければ折角の苦心も何にもならぬ結果となる。

小事の方になると、惡くすると熟慮せずに決定して了ふことがある、それが甚だ宜しくない、小事といふ位であるから、目前に現はれた所だけでは極めて些細なことに見え

るので、誰も之も馬鹿にして念を入れることを忘れるものであるが、此の馬鹿にして掛る小事も、積んでは大事となることを忘れてはならぬ、また小事にも其の場限りで濟むものもあるが、時としては小事が大事の端緒となり、一些事と思つたことが後日大問題を惹起するに至ることがある、或は些細なことから次第に惡事に進みて、遂には惡人となるやうなこともある、それと反對に小事から進んで次第に善に向ひつゝ行くこともある、始めは些細な事業であると思つたことが、一歩々々に進んで大弊害を釀すに至ることもあれば、之が爲め一身一家の幸福となるに至ることもある、是等は總て小が積んで大となるのである、人の不親切とか我儘とかいふことも、小が積んで次第に大となるもので、積り積れば政治家は政治界に惡影響を及ぼし、實業家は實業上に不成績を來し、教育家はその子弟を誤るやうになる、されば小事必ずしも小でない、世の中に大事とか

小事とかいふものはない道理、大事小事の別を立てゝ兎や角といふのは、畢竟君子の道であるまいと余は判斷するのである、故に大事たると小事たるとの別なく、凡そ事に當つては同一の態度、同一の思慮を以て之を處理するやうにしたいものである。

之に添へて一言して置きたいとは、人は調子に乘るは宜くないといふことである、『名を成すは常に窮苦の日にあり、事を敗るは多く得意の時に因す』と古人も云つて居るがこの言葉は眞理である、困難に處する時は丁度大事に當つたと同一の覺悟を以て之に臨むから、名を成すはさういふ場合に多い、世に成功者と目せらるゝ人には、必ず『あの困難をよく遣り遂げた』、『あの若痛をよく遣り拔いた』といふやうなことがある、これ卽ち心を締めて掛つたといふ證據である、然るに失敗は多く得意の日に其の兆をなして居る、人は得意時代に處しては恰も彼の小事の前に臨んだ時の如く、天下何事か成らざら

んやの槩を以て、如何なることをも頭から呑んで掛るので、動もすれば目算が外れて飛んでもなき失敗に落ちて了ふ、それは小事から大事を釀すと同一義である、だから人は得意時代にも調子に乗るといふこと無く、大事小事に對して同一の思慮分別を以て之に臨むが可い、水戸黄門光圀公の壁書中に『小なる事は分別せよ、大なることに驚くべからず』とあるは、眞に知言と謂ふべきである。

材有レ分而用有レ當、所レ貴善因レ時而已耳。　亢倉子

衆人之智、可ニ以測レ天、兼聽獨斷、惟在ニ一人。　說苑

立志と學問

◎精神老衰の豫防法

嘗て交換教授として米國より來朝せられたメービー博士が、任滿ちて歸國せらるゝに際し、赤誠を傾けて私に語られた種々なる談話の中に、下の如き評語がある、即ちメービー氏の言ふには、私は初めて貴國に來たのであるから、總てのものが珍らしく感じた、如何にも新進の國と見受け得る所は、上級の人も下層の人も、總て勉強して居ると云ふことは、著しく眼に著く、惰けて居る者が甚だ少ない、而して其の勉強が、さも希望を持ちつゝ愉快に勉強するやうに見受けられる、希望を持つといふは、何所までも到達せ

しむるといふ敢爲の氣象が盡く備はつて居る、殆んど總ての人が喜びを以て、彼岸に達するといふ念慮を持つて居られるやうに見受けるのは、更に進むべき資質を持つた國民と申上げて宜からうと思ふ、それらは善い方を賞讃し上げるけれども、唯善いことのみを申して、惡い批評を言はねば、或は諛言を呈する嫌があるから、極く腹藏のない所を無遠慮に申すとて、私の接觸したのが、官邊とか會社とか又は學校などであつたから、餘計にさういふ事が眼に着いたのかも知れぬけれども、兎角形式を重んずるといふ弊があつて、事實よりは形式に重きを置くと云ふことが強く見える、亞米利加は最も形式を構はぬ流儀であるから、其の眼から特に際立つて見えるのかも知れぬけれども、少しく形式に拘泥する弊害が強くなつて居りはせぬか、一體の國民性が其れであるとすれば、是は餘程御注意せねばならぬことゝ思ふ、又何所の國でも、同じ説が一般に傳はるとい

ふ譯にはいかぬ、一人が右といへば一人は左といふ、進歩黨があれば保守黨がある、政黨でも時として相反目する者が生ずるけれども、それが歐羅巴或は亞米利加であれば、餘程淡泊で且つ高尙だ、然るに日本のは淡泊でもなければ高尙でもない、惡く申すと甚だ下品で且つ執拗である、何でもない事柄までも極く口穢く言ひ募るやうに見える、是は自分の見た時節の惡かつた爲に、政治界に於て、殊にさういふ現象が見えたのでありませう、――而して彼は之を解釋して、日本は封建制度が長く繼續して、小さい藩々まで相反目して、右が強くなれば左から打ち倒さうとする、左が盛になれば右が攻撃する、之が終に習慣性となつたであらうと、彼はさうまでは言ひませぬけれども、元龜天正以來の有樣が遂に三百諸侯となつたのだから、相凌ぎ相惡むといふ弊が兎角に殘つて居つて、溫和の性質が乏しいのではないが、之が段々長じて行くと、勢ひ黨派の軋轢が激し

くなりはしないかといふ意味であつた、——私も、此の封建制度の餘弊といふことは或は然らんと思ふ、既に近い例が、水戸などが大人物の出た藩でありながら、却つて其の爲に軋轢を生じて衰微した、若し藤田東湖、戸田銀次郎の如き、或は會澤恒藏の如き、又其の藩主に烈公の如き偉人が無かつたならば、斯ばかり爭もなく衰微もせなんだであらう、と論ぜねばならぬから、私はメービー氏の說に大に耳を傾けたのである。

それから又我が國民性の感情の強いといふことに付ても、餘り讃辭を呈さなかつた、日本人は細事にも忽ちに激する、而して又直ちに忘れる、詰り感情が急激であつて、反對に又健忘性である、是は一等國だ大國民だと自慢なさる人柄としては、頗る不適當である、もう少し堪忍の心を持つやうに修養せねば可けますまい、と云ふ意味であつた。

更に畏れ多いことであるけれども、國體論にまで立入つて、彼は其の忠言を進めて、

實に日本は聞きしに勝つたる忠君の心の深きことは、亞米利加人などには迚も夢想も出來ない、實に羨ましいことゝ敬服する、斯る國は決して他に看ることは出來ぬであらう、豫てさう思つては居たが、實地を目擊して眞に感佩に堪へぬ、去りながら私として無遠慮に言はしむるならば、此の有樣を永久に持續するには、將來君權をして成るべく民政に接觸せしめぬやうにするのが肝要ではあるまいかと言はれた、是等は我々が其の當否を言ふべきことではない、併し此の抽象的の評言は、一概に斥くべきものでは無からうと思ふので、如何にも親切のお言葉は私だけに承つた、と斯う答へて置いた、此他にも尙ほ談話の廉々はあつたが、最終に其の滯在中の優遇を謝して、此の半年の間眞率に自分の思ふことを述べて、各學校で學生若くは其他の人々に、親切にせられたことを深く喜ぶと言つて居られた。

亞米利加の學者の一人が、日本を斯く觀察したからと言うて、それが大に我國を益するものでも無からうけれども、前にも申す如く、公平なる外國人の批評に鑑みて能くこれに注意し、謂ゆる大國民たる襟度を進めて行かねばならぬ、さう云ふ批評によりて段段に反省し、終に眞正なる大國民となる、それと反對に困つた人民だ、斯る不都合がある、といふ批評が重なれば、人が交際せぬ相手にならぬと云ふことになるかも知れぬ、されば一人の評語がどうでも宜いと云うては居られぬ、恰も『君子の道は妄語せざるより始まる』と司馬溫公が誡められた如くに、假初にも無意識に妄語を發するやうになつたならば、君子として人に尊敬されるやうにならぬ、して見ると一回の行爲が一生の毀譽をなすと同じやうに、一人の感想が一國の名聲に關すると考へる、メーピー氏が左樣に感じて歸國したといふことは、些細なことであるけれども、やはり小事と見ぬ方が宜

からうと思ふのである。

是に付て考へて見ても、お互に平素飽くまで刻苦勵精して、今日までに進んだ國運をして、どうぞ彌増に擴張させたいと思ふが、それに付て一言したいことは、近頃は青年青年と云つて、青年說が大變に多い、青年が大事だ、青年に注意しなければならぬと云ふは、私も同意するが、私は自分の位置から言ふと、青年も大事であるけれども、老年も亦大切であると思ふ、青年とばかり言うて、老人はどうでも宜いと言ふのは考へ違ではないか、會て他の會合の時にも言つたが、自分は文明の老人たるを希望する、果して自分が文明の老人か野蠻の老人か、世評はどうであるか知らぬが、自分では文明の老人の積りであるが、諸君が見たら或は野蠻の老人かも知れぬ、併し能々考察すると、私の青年の時分に比較して見ると、青年の事務に就く年齡が頗る遲いと思ふ、例へば朝の

日の出方が餘程遲くなつて居る、さうして早く老衰して引込むと、其の活動の時間が大層少くなつてしまふ、試みに一人の學生が三十歲まで學問のために時を費すならば、少くも七十位までは働かねばならぬ、若し五十や五十五で老衰するとすれば、僅に二十年か二十五年しか働く時はない、但し非凡なる人は、百年の仕事を十年の間に爲るかも知れぬが、多數の人に望むには、さういふ例外を以てする譯にはいかない、況んや社會の事物が益々複雜して來る場合に於てをや、但し各種の學藝技術が追々進化して來るから、幸に博士方の新發明で、年取つても一向に衰弱せぬとか、或は若い間にも滿足なる智惠を持つといふやうな馬車より自働車、自働車より飛行機で世界を狹くするやうに、人間の活動を今日よりも大に强めて、生れ兒が直ちに用立つ人となつて、さうして死ぬまで活動するといふ工夫が付けば、是は何よりである、どうぞ田中館先生などに其の御發

明を願ひたいものである、其れまでの間は年寄がやはり十分に働くことを心懸ける外なからうと思ふのである、而して文明の老人たるには、身體は縱ひ衰弱するとしても、精神が衰弱せぬやうにしたい、精神を衰弱せぬやうにするは學問に依る外はない、常に學問を進めて時代に後れぬ人であつたならば、私は何時までも精神に老衰といふことは無からうと思ふ、是の故に私は單に肉塊の存在たるは人として甚だ嫌ふので、身體の世に在る限りは、どうぞ精神をも存在せしめたいと思ふのである。

◎現在に働け

德川時代の末路でも、因襲の然らしむる所、一般の商工業者に對する教育と武士教育とは全く區別されて居つたのである、而して武士は皆修身齊家を本として、唯自己一身

を修めるのみでは無く、他をも治めるといふ主義で、凡て經世濟民を主眼として居つた。
農工の教育は、他人を治め國家を如何するかといふやうな考を持たせる教育ではなく、至つて卑近な教育であつた、當時の人は武士的教育を受ける人は洵に少いので、總て教育は謂ゆる寺子屋式のもので、寺の和尚さんか、又は富豪の老人などが教育して呉れたものである、農工商は殆んど國内だけのもので、海外などには毫も關係がなかつたものであるから、農工商の人には低級な教育で足りたのである、而して主なる商品は幕府及び藩が運送、販賣等の樞軸を握つて居つたので、農工商民の關係する所は實に狹いものであつた、當時の謂ゆる平民は一種の道具であつた、甚しいのは武士は無禮打、切捨御免といふ慘酷な野蠻極まる行爲を平氣でやつて居つたものである。
此の有樣が追々嘉永安政頃には、自然に一般の空氣に變遷を起して、經世濟民の學問

を受けた武士は、尊王攘夷を唱へて遂に維新の大改革を成したのである。

私は維新後、間もなく大藏省の役人となつたが、此の當時は日本には物質的科學的教育は殆んど無いと云つても可い位であつた、武士的教育には種々高尚なものがあつたが、農工商には殆んど學問はなかつた、のみならず、普通の教育のことを論じても低級で、多くは政治教育といふ風で、海外交通が開けても、それに對する智識といふものが無かつたのである、如何に國を富まさうと思つても、それに對する智識などは更にない、一つ橋の高等商業學校は明治七年に出來たものであるが、幾度か廢校せられんとしたのである、これは乃ち當時の人が、商人などに高い智識などは要らないと思つて居つた爲である、私などは海外に交通するには、何うしても科學的智識が必要であるといふことを、聲を嗄らして叫んだが、幸にも追々その機運が起つて、明治十七八年には斯うした傾向

が盛んになつて、間もなく才學倶に備はつた人が輩出するに至つたのである、それから以後今日まで僅か三四十年の短い年月に、日本も外國には劣らないくらゐ物質的文明が進步したが、その間にまた大なる弊害を生じたのである、德川三百年間を太平ならしめた武斷政治も、弊害を他に及ぼしたことは明かであるが、又この時代に教育された武士の中には、高尚遠大な性行の人も少くはなかつたのであるが、今日の人には其れがない、富は積み重なつても、哀しいかな武士道とか、或は仁義道德といふものが、地を拂つて居るといつて可いと思ふ、卽ち精神教育が全く衰へて來ると思ふのである。

我々も明治六年頃から物質的文明に微弱ながらも全力を注ぎ、今日では幸にも有力な實業家を全國到る處に見るやうになり、國の富も非常に增したけれども、安んぞ知らん、人格は維新前よりは退步したと云ふ、否、退步どころではない、消滅せぬかと心配して

居るのである、故に物質的文明が進んだ結果は、精神の進歩を害したと思ふのである。

私は常に精神の向上を富と共に進めることが必要であると信じて居る。人は此點から考へ〳〵強い信仰を持たねばならぬ、私は農家に生れたから教育も低くかつたが、幸にも漢學を修めることが出來たので、これより一種の信仰を得たのである、私は極樂も地獄も心に掛けない、たゞ現在に於て正しいことを行つたならば、人として立派なものであると信じて居るのである。

◎大正維新の覺悟

維新といふことは、湯の盤の銘に曰ふ『苟に日に新なり、日に日に新にして、又日に新なり』といふ意味であるから、潑剌たる氣力を發揮するときは、自然に生れたる新氣

力を生じ、進鋭の活動が出來るのである、大正維新といふも畢竟この意味で、大に覺悟を定めて、上下一致の活動を現はしたいものであるが、一般が保守退嬰の風に傾いて居る際であるから、一層の奮勵努力を要するので、是を明治維新の人物の活動に比較して大に猛省せねばならぬ、明治維新以來の事業中には、失敗に歸したものも有つたが、多數の事業は非常なる元氣と精力とを以て、駸々として發展し來つたので、他に種々な原因があつたにしろ、元氣と精力の偉大なるものである。

青年時代は血氣時代であるから、其の血氣を善用して後日の幸福の基となることであれば、飽くまで之を發揮して、兎角保守に流れ、因循に陷り易い老人をして、危險を感ぜしむる位に活動して貰ひたいのである、青年時代に正義の爲め失敗を恐れて居るやうでは、到底見込のない者で、自分が正義と信ずる限りは、飽くまで進取的に剛健なる行

爲を取つて貰ひたい、正義の觀念を以て進み、岩をも徹す鐵石心を傾倒すれば、成らざる事なしといふ意氣込で進まねばならぬ、この志さへあれば、如何なる困難をも排し得るので、縱ひ失敗することがあつても、其れは自己の注意の足らぬので、衷心毫も疚しい所がなければ、却つて多大の教訓を與へられ、一層剛健なる志を養ひ、倍々自信を生じ、勇氣を生じて猛進することが出來、次第に壯年に進むにつれて有爲なる人物となり、個人としても將た國家の一柱石としても信頼し得る人物となるのである。

他日國家を雙肩に荷うて立つべき青年に於ては、此際大に覺悟をなして、將來は日に月に激甚となるべき競爭場裏に飛込まねばならず、今日の狀態で經過すれば、國家の前途に對し、大に憂ふべき結果を生ぜぬとも限らぬのであることを思ひ、後來悔ゆるが如き愚をせぬやうに望むのである、明治維新の頃、萬事創造の時代とも言ふべき不秩序を

極めた時よりは、今日の狀態は著しく發達して其の面影を一變し、社會百般の秩序も整備し、學問も普及して、事を爲すに便宜も多いのであるから、周到なる細心と大膽なる行動とを以て活力を發揮したならば、大事業を經營するに極めて愉快を感ずるであらう、只かゝる秩序立ち、一般に教育が普及した時代ゆゑ、普通より少しぐらゐ進歩し、僅かに卓越した意氣込を以て事に當つては、とても大勢を動かすことは出來ない、多少教育の弊害も生じ易い事情もあるのであるから、大勇猛心を發揮して活氣を縱横に溢れしめ、區々たる情弊を打破して、向上の道を猛進せねばならぬ。

◎秀吉の長所と短所

亂世の豪傑が禮に嫻はず、兎角家道の齊はぬ例は、單に明治維新の際に於ける今日の

謂ゆる元老ばかりでは無い、何れの時代に於ても、亂世には皆爾うしたものである、私なぞも家道が齊つてると口はばつたく申上げて誇り得ぬ一人であるが、かの稀世の英雄豐太閤などが、矢張禮に嫺はず、家道の齊はなかつた隨一人である、素より賞むべきではないが、亂世に生ひ立つたものには、どうも斯んな事も致し方のない次第で、餘り酷には責むべきでも無からうと思ふ。然し豐太閤に若し最も大きな短所があつたとすれば、それは家道の齊はなかつた事と、機略があつても經略が無かつた事とである、若し夫れ豐太閤の長所はと云へば、申すまでもなく、その勉強、その勇氣、その機智、その氣槩である。

此く列擧した秀吉の長所の中でも、長所中の長所とも目すべきものは、その勉強である、私は秀吉の此の勉強に衷心より敬服し、青年子弟諸君にも、是非秀吉の此の勉強を

學んで貰ひたく思ふのである、事の成るは成るの日に成るに非ずして、その由來する所や必ず遠く、秀吉が稀世の英雄に仕上がつたのは、一にその勉强にある。

秀吉が木下藤吉と稱して信長に仕へ、草履取をして居つた頃、冬になれば藤吉の持つてた草履は、常に之を懐中に入れて暖めて置いたので、何時でも溫かつたといふが、斯んな細かな事にまで亙る注意は餘程の勉强でないと、到底行屆かぬものである、また信長が朝早く外出でもしやうとする時に、まだ供揃ひの衆が揃ふ時刻で無くつても、藤吉ばかりは何時でも信長の聲に應じて御供をするのが例であつたと傳へられて居るが、これなぞも秀吉の非凡なる勉强家たりしを語るものである。

天正十年織田信長が明智光秀に弑せられた時に、秀吉は備中にあつて毛利輝元を攻めて居つたのであるが、變を聞くや直ちに毛利氏と和し、弓銃各五百、旗三十と一隊の騎

士とを輝元の手許より借り受け、兵を率ゐて中國より引返し、京都を去る僅に數里の山崎で光秀の軍と戰ひ、遂に之を破つて光秀を誅し、其首を本能寺に梟すまでに、秀吉の費した日數は、信長が本能寺に弑せられてより僅に十三日、只今の言葉で申せば二週間以内のことである、鐵道も無く車も無い、交通の不便この上なき其頃の世の中に、京都に事變のあつたのが、一旦中國に傳へられた上で和議を纏め、兵器から兵卒まで借入れて京都へ引返すまでに、事變後僅に二週間を出でなかつたと云ふのは、全く秀吉が尋常ならぬ勉強家であつた證據である、勉強がなければ如何に機智があつても、如何に主君の仇を報ずる熱心があつても、斯くまで萬事を手早く運んで行けるものでは無い、備中から攝津の尼ケ崎まで、晝夜兼行で進んで來たのであると云ふが、定めし爾うであつたらうと思ふ。

天正の十三年に秀吉も目出度關白の位を拜するやうになつたのであるが、秀吉が斯く天下を一統するまでに要した時間は、本能寺の變あつて以來、僅に滿三年である、秀吉には素より天稟の勝れた他に異るところもあつたに相違ないが、秀吉の勉强が全く之を然らしめたものである。

是より先き、秀吉が信長に仕へてから間もなく、淸洲の城壁を僅に二日間に修築して信長を驚かしたといふ事も傳へられて居るが、是れとても一概に稗史小說の無稽譚として觀るべきでない、秀吉ほどの勉强を以てすれば、これぐらゐの事は必ず出來たと思ふ。

◎自ら箸を取れ

青年のうちには、大に仕事したいが賴みに行く人がないとか、援て呉れる人がないとか、見て呉れる人がないとか嘆つ者がある、なるほど如何なる俊傑でも、其の才氣膽略を見出す先輩なり世間なりがなかつたら、其の手腕を施すによしないことだ、そこで有力な先輩に知己を持つとか、親類に有力な人があるとかいふ青年は、その器量を認められる機會が多いから、比較的僥倖かも知れぬけれども、其れは普通以下の人の話で、若しその人に手腕があり、優れたる頭腦があれば、假令早くから有力な知己親類がなくても、世間が閑却しては居ない、由來現今の世の中には人が多い、官途にも會社にも乃至銀行にも、頗る人が餘つてる位だ、併し先輩が是ならといふて安心して任せられる人物は少ない、だから何所でも優良なる人物なら幾らでも欲しがつて居る、此くお膳立をして待つてるのだが、之を食べるか否かは箸を取る人の如何にあるので、御馳走の獻立を

した上に、それを養つてやるほど先輩や世の中といふものは暇でない、彼の木下藤吉郎は匹夫から起つて、關白といふ大きな御馳走を食べた、けれど彼は信長に養つて貰つたのでは無い、自分で箸を取つて食べたのである、何か一と仕事しやうとする者は、自分で箸を取らなければ駄目である。

誰が仕事を與へるにしても、經驗のない若い人に、初めから重い仕事を授けるものでは無い、藤吉郎の大人物を以てしても、初めて信長に仕へた時は、草履取といふ詰らぬ仕事をさせられた、乃公は高等の教育を受けたのに、小僧同樣に算盤を彈かせたり、帳面をつけさせたりするのは馬鹿々々しい、先輩なんていふものは人物經濟を知らぬものだ抔と、不平をいふ人もあるが、是は頗る尤ものやうだが而かも尤もでない、成程一廉の人物に詰らぬ仕事をさせるのは、人物經濟上から見て頗る不利益の話だが、先輩が此

の不利益を敢てする意思には、其所に大なる理由がある、決して馬鹿にした仕向けではない、その理由は暫らく先輩の意中に任せて、青年は唯その與へられた仕事を專念に行つて往かなければならぬ。

其の與へられた仕事に不平を鳴らして、往つて了ふ人は勿論駄目だが、つまらぬ仕事だと輕蔑して、力を入れぬ人も亦駄目だ、凡そどんな些細な仕事でも、其れは大きな仕事の一小部分で、是が滿足に出來なければ、遂に結末がつかぬ事になる、時計の小さい針や、小さい輪が怠けて働かなかつたら、大きな針が止まらなければ爲らぬやうに、何百萬圓の銀行でも、厘錢の計算が違ふと、其日の帳尻がつかぬものだ、若い中には氣が大きくて、小さい事を見ると、何のこれしきなと輕蔑する癖があるが、それが其時限りで濟むものならまだしも、後日の大問題を惹起することが無いとも限られぬ、よし後

日の大問題にならぬまでも、小事を粗末にするやうな粗大な人では、所詮大事を成功させることは出來ない、水戸の光圀公が壁書の中に『小なることは分別せよ、大なることは驚くべからず』と認めて置かれたが、獨り商業といはず軍略といはず、何事にも此の考へでなくてはならぬ。

古語に『千里の道も跬歩よりす』と云つてある、假令自分はモツと大きな事をする人間だと自信して居ても、其の大きな事は片々たる小さな事の集積したものであるから、何んな場合をも輕蔑することなく、勤勉に忠實に誠意を籠めて其の一事を完全に仕遂げやうと仕なければならぬ、秀吉が信長から重用された經驗も正に是であつた、草履取の仕事を大切に勤め、一部の兵を托された時は一部將の任を完全にして居たから、其所に信長が感心して、遂に破格の拔擢を受け、柴田や丹羽と肩を並べる身分に成つたのであ

る、故に受附なり帳附なり、與へられた仕事に其時の全生命をかけて眞面目にやり得ぬ者は、謂ゆる功名利達の運を開くことは出來ない。

◎大立志と小立志との調和

生れながらの聖人なら知らぬこと、我々凡人は志を立てるに當つても、兎角迷ひ易いのが常である、或は眼前社會の風潮に動かされ、或は一時周圍の事情に制せられて、自分の本領でもない方面へ浮々と乘出す者が多いやうであるけれども、これでは眞に志を立てた者とは謂はれない、殊に今日の如く世の中が秩序立つて來ては、一度立てた志を中途から他に轉ずる抔のことがあつては非常の不利益が伴ふから、立志の當初最も愼重に意を用ふるの必要がある、其の工夫としては先づ自己の頭腦を冷靜にし、然る後自

分の長所とするところ、短所とするところを精細に比較考察し、其の最も長ずる所に向うて志を定めるが可い、又それと同時に、自分の境遇が其の志を遂ぐることを許すや否やを深く考慮することも必要で、例へば、身體も强壯、頭腦も明晰であるから、學問で一生を送りたいとの志を立てゝも、これに資力が伴はなければ、思ふやうに遣り遂げることは困難であると云ふやうなこともあるから、是ならば孰れから見ても、一生を貫いて遣ることが出來るといふ確かな見込みの立つた所で、初めて其の方針を確定するが可い、然るに左程までの熟慮考察を經ずして、一寸した世間の景氣に乘じ、浮と志を立てゝ駈出すやうな者もよくあるけれども、これでは到底末の遂げられるものではないと思ふ。

既に根幹となるべき志が立つたならば、今度は其の枝葉となるべき小さな立志に就

て、日々工夫することが必要である、何人でも時々事物に接して起る希望があらうが、それに對し何うかして其の希望を遂げたいといふ觀念を抱くのも一種の立志で、余が謂ゆる小さな立志とは卽ちそれである、一例を擧げて說明すれば、某氏は或る行によつて世間から尊敬されるやうになつたが、自分もどうかしてあういふ風になりたいとの希望を起すが如き、是も亦一の小立志である、然らば此の小立志に對しては如何なる工夫を廻らすべきかと云ふに、先づ其の要件は、何所までも一生を通じての大なる立志に戻らぬ範圍に於て工夫することが肝要である、又小なる立志は其の性質上常に變動遷移するものであるから、此の變動や遷移に因つて大なる立志を動かすことのないやうにするだけの用意が必要である、詰り大なる立志と小さい立志と矛盾するやうなことがあつてはならぬ、此の兩者は常に調和し一致するを要するものである。

以上述る所は主として立志の工夫であるが、古人は如何に立志をしたものであるか、参考として孔子の立志に就て研究して見よう。

自分が平素處世上の規矩として居る論語を通じて孔子の立志を窺ふに、『十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知る云々』とある所より推測すれば、孔子は十五歳の時既に志を立てられたものと思はれる、併しながら其の『學に志す』と曰はれたのは、學問を以て一生を過す積りであるといふ志を固く定めたものか如何か、これば稍疑問とする所で、唯是から大に學問しなければならぬといふ位に考へたものではなからうか、更に進んで『三十にして立つ』と曰はれたのは、此時既に世に立つて行けるだけの人物となり、修身齊家治國平天下の技倆ありと自信する境地に達せられたのであらう、尚ほ『四十にして惑はず』とあるより想像すれば、

一度立てた志を持ちて世に處するに方り、外界の刺戟位では決して其の志は動かされぬといふ境域に入つて、何所までも自信ある行動が執れるやうになつたと謂ふのであらうから、茲に到つて立志が漸く實を結び、且つ固まつて仕舞つたと謂ふことが出來るだらう、して見れば孔子の立志は十五歳から三十歳の間にあつたやうに思はれる、學に志すと曰はれた頃は、未だ幾分志が動搖して居たらしいが、三十歳に至つて稍決心の程が見え、四十歳に及んで始めて立志が完成されたやうである。

是を要するに、立志は人生てふ建築の骨子で、小立志は其の修飾であるから、最初に夫等の組合せを確と考へてかゝらなければ、後日に至つて折角の建築が半途で毀れるやうなことにならぬとも限らぬ、斯の如く立志は人生に取つて大切の出發點であるから、何人も輕々に看過することは出來ぬのである、立志の要は能く己を知り、身の程を考へ

それに應じて適當なる方針を決定する以外にないのである、誰も能く其の程を計つて進むやうに心掛くるならば、人生の行路に於て間違の起る筈は萬々ないことゝ信ずる。

◎君子の爭ひたれ

私も絶對に爭ひをせぬ人間であるかのやうに解せらるゝ人も、世間に少なからぬやうに見受けるが、私は勿論、好んで他人と爭ふことこそせざれ、全く爭ひをせぬといふではない、苟くも正しい道を飽くまで進んで行かうとすれば、絶對に爭ひを避けることは出來ぬものである、絶對に爭ひを避けて世の中を渡らうとすれば、善が惡に勝たれるやうなことになり、正義が行はれぬやうになつて了ふ、私は不肖ながら、正しい道に立つて尚ほ惡と爭はず、之に道を讓るほどに、謂ゆる圓滿な腑甲斐のない人間でない積りで

ある、人間には如何に圓くとも、何所かに角が無ければならぬもので、古歌にもある如く、餘り圓いと却つて轉び易いことになる。

私は世間で覽らるゝ程に、決して謂ゆる圓滿の人間ではない、一見謂ゆる圓滿のやうでも、實際は何所かに謂ゆる圓滿でない所があらうと思ふ、若い時分には固より爾うであつたが、七十の坂を越した今日と雖も、私の信ずる所を動かし之を覆へさうとする者が現はるれば、私は斷々乎として其人と爭ふことを辭せぬのである、私が信じて自ら正しいとする所は、如何なる場合に於ても決して他に讓ることをせぬ、此所が私の謂ゆる圓滿でない所だと思ふ、人には老いたると若いとの別なく、誰にでも是れだけの不圓滿な所が是非あつて欲しいものである、然らざれば人の一生も全く生甲斐のない無意味なものになつて了ふ、如何に人の品性は圓滿に發達せねばならぬものであるからとて、餘

りに圓滿になり過ぎると、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しと、論語の先進篇にも孔夫子が說かれて居る通りで、人として全く品位のないものになる。

私は絕對に謂ゆる圓滿な人間でない、相應に角もあり、圓滿ならざる甚だ不圓滿な所もある人物たることを證明するに足る……證明といふ語を用ゐるも少し異樣だが……實際を一寸談して見やうかと思ふ、私は勿論、少壯の頃より腕力に訴へて他人と爭ふ如きことをした覺えはない、併し若い時分には今日と違つて、容貌などにも餘程強情らしい所もあつたもので、隨つて他人の眼からは今日よりも容易に爭ひをしさうに見えたものかも知れぬ、尤も私の爭は、若い時分から、總て議論の上、權利の上での爭ひで腕力に流れた經驗は未だ曾て一度もない。

明治四年私が恰度三十三歳で大藏省に奉職し、總務局長を勤めて居た頃であつたが、

大藏省の出納制度に一大改革を施し改正法なるものを布いて、西洋式の簿記法を採用し傳票によつて金錢を出納することにした、所が、當時の出納局長であつた人が……その姓名は且らく預り置くが……この改正法に反對の意見を持つて居たのである、傳票制度の實施に當つて偶ゝ過失のあることを私が發見したので、當事者に對して之を責めてやると、元來私が發案實施した改正法に反對の意見を持つて居た出納局長といふ男が、傲岸な權幕で、一日私の執務して居た總務局長室に押しかけて來たのである。

て出納局長が怒氣を含んだ權幕で私に詰め寄るのを見て、私は靜に其男の曰はんとする所を聽きとる積りで居ると、その男は傳票制度の實施に當つて手違ひをしたことに就ては、一言の謝罪もせず、切りに私が改正法を布いて歐洲式の簿記法を採用した事に就てのみ、彼是と不平を並べるのであつた、一體貴公が亞米利加に心醉して、一

から十まで彼國の眞似ばかりしたがり、改正法なんかといふものを發案して簿記法によつて出納を行はせやうとするから、斯んな過失が出來るのである、責任は過失をした當事者よりも、改正法を發案した貴公の方にある、簿記法などを採用して呉れさへせねば、我儕も斯んな過失をして、貴公などに責付けられずに濟んだのである、などと言語道斷の暴言を恣にし、些かたりとも自分等の非を省みる樣な模樣がないので、私も其の非理屈には稍驚いたが尚ほ憤らず、出納の正確を期せんとするには、是非とも歐洲式簿記法により、傳票を使用する必要あることを諄々と說いて聞かせたのである、併しその出納局長なる男は、毫も私の言に耳を假さぬのみか、二言三言言ひ爭つた末、滿面は恰かも朱を注げる如く紅くなつて、直ちに拳固を揮上げ、私を目蒐けて打つて掛つて來たのである。

その男は小背の私に比べれば、身長の高い方であつたが、怒氣心頭に發し、足がふらついて居た上に餘り強さうにも見えず、私は兎に角、青年時代に於て相當に武藝も仕込まれ身を鍛へて居つたことでもあるから、強ち膂力が無いといふ譯でもなかつた、苟めにも暴行に訴へて無禮をしたら、一ト捻りに捻つてやるのは何でもないことだとは思つたが、その男が椅子から立ち上つて、拳を握り腕をあげ、阿修羅の如くになつて猛けり狂ひ私に詰めかけて來るのを見るや、私も直ぐ椅子を離れてヒラリ身を換はし、全く神色自若として二三歩ばかり椅子を前に控へて後部に退き、その男が拳の持つて行き所に困り、マゴ〱して隙を生じたのを見て取るや、隙さず泰然たる態度で『此所は御役所でござるぞ、何んと心得召さる、車夫馬丁の眞似をすることは許しませんぞ、御愼みなさい』と一喝したものだから、その出納局長もハット惡いことをした、田夫野人の眞

似をしたといふことに氣がついたものか、折角握り擧げた拳を引つ込めて、そのまゝスゴスゴと私の居つた總務局長室を出て行つて仕舞つたのである。

其後その男の進退に關し種々と申出る者もあり、又官廳內で上官に對し暴力を揮はんとしたは怪しからん抔と騷ぎ立てる者もあつたが、私は當人さへ非を覺り悔悟したなら、依然在職させて置く積りの所が、當の私より省中の者が憤慨して、右の事情を詳細太政官に內申に及んだので、太政官でも打放つて置く譯に行かず、その男を免職せらるるに至つたのは、私が今猶ほ甚だ氣の毒に思ふのである。

◎社會と學問との關係

學問と社會とは左程大なる相違のあるものではないが、學生時代の豫想が餘りに過大

であるから、面倒なる活社會の狀態を實見して、意外の感を催すものである、今日の社會は昔とは異なりて、種々複雜となつて居るから、學問に於ても多くの科目に分れて政治、經濟、法律、文學、又は農とか商とか工とかいふが如く區別され、而かも其の各分科の中に於ても、工科の中に電氣、蒸氣、造船、建築、採鑛、冶金などの各分科があり、比較的單純に見える文學でも、哲學とか歷史とか種々に分かれて、敎育に從事するもの、小說を作るもの、各々其の希望に從つて甚だ複雜多岐である、故に實際の社會に於て各自の活動する筋道も、學校に在りし時、机上に於て見た如く分明でないから、兎もすれば迷ひ易く誤り勝になる、學生は常に是等の點に注意して、大體に眼を著け大局を誤らずして、自己の立脚地を見定めねばならぬ、卽ち自己の立場と他人の立場とを、相對的に見ることを忘れてはならぬ。

元來人情の通弊として、兎角に功を急ぎ大局を忘れて、勢ひ事物に拘泥し、僅かな成功に滿足するかと思へば、左程でもない失敗に落膽する者が多い、學校卒業生が社會の實務を輕視し、實際上の問題を誤解するのも、多くは此の爲である、是非とも此の誤れる考は改めねばならぬが、其の參考として學問と社會との關係を考察すべき例を擧げると、恰かも地圖を見る時と實地を歩行する時との如きものである、地圖を披いて眼を注げば、世界も只一目の下に在る、一國一郷は指顧の間にある如くに見える、參謀本部の製圖は隨分詳密なもので、小川小邱から土地の高低傾斜までも明かに分るやうに出來て居るが、其れでも實際と比較して見ると、豫想外のことが多い、其れを深く考慮せず、充分に熟知した積りで、愈々實地に踏み出して見ると、茫漠として大に迷ふ、山は高く谷は深し、森林は連なり、河は廣く流るゝといふ間に、道を尋ねて進むと、高岳に出會

ひ、何程登つても頂上に達し得ぬ、或は大河に遮られて途方に暮れることもあらうし、道路が迂回して容易に進まれぬこともある、或は深い谷に入つて何時出ることが出來るかと思ふこともある、到る處に困難なる場所を發見する、若し此際十分の信念がなく、大局を觀るの明がないなら、失望落膽して勇氣は出です、自暴自棄に陷つて、野山の差別なく狂ひ廻る如き事となつて、遂には不幸なる終りを見るであらう。

此の一例は、學問と社會との關係の上に應用して考へて見ると、直ちに了解し得る事と思ふが、兎に角、社會の事物の複雜なることを、前以て充分に會得して、如何に用意して居ても、實際には意外なことが多いものであるから、學生は平常一層の注意を拂つて研究して置かねばならぬのである。

◎勇猛心の養成法

活力旺盛となつて心身潑溂となれば、自然に大活動を生ずる、大活動をなすに就て其の方法を誤れば、甚しい過失を生ずる人となる、そこで平生注意を拂つて、如何に猛進すべきかを考へて置かねばならぬ、猛進する力が正義の觀念を以て鼓舞されると、非常に勢を助長するものであるが、其の正義を斷行する勇氣は如何にして養ふかと言へば、平生より注意して、先づ臍下の鍛鍊をせねばならぬ、卽ち武術の練磨、下腹部の鍛鍊は自然身體を健康にすると共に、著しく精神を陶冶し、心身の一致したる行動に熟し、自信を生じ、自ら勇猛心を向上せしむるものである、下腹部の鍛錬は、今日腹式呼吸法とか、靜座法とか、息心調和法とか稱して盛んに流行して居るが、總て人の常として腦

へ充血し易く、自然神經過敏となつて、物事に動じ易くなるものであるが、下腹部に力を籠める習慣を生ずれば、心寛く體胖かなる人となりて、沈着の風を生じ、勇氣ある人となるのである、故に古來の武術家の性格が一般に沈着にして、而かも敏活であるのは、武術の試合が下腹部を鍛錬するものであると共に、一方全力を傾倒して活動する習慣より、自在に一身を動かすやうに爲つたからであると思ふ。

勇氣の修養には肉體上の修養と共に、内省的の修養に注意せねばならぬ、讀書の上に於て、古來勇者の言行に私淑して感化を受くるもよし、また長上の感化を受け、說話を聽いて、深く身に體し行ふ習慣を養成し、一歩々々剛健なる精神を向上せしめ、正義に關する趣味と自信とを養つて、欣び望んで義に進むまでに到れば、勇氣は自ら生じて來るであらう、唯注意すべきことは、呉れ〲も青年時代の血氣に逸り、前後の分別を

誤つて血氣を惡用し、勇氣を誤り用ゐて暴慢なる行動を執るやうなことがあつてはならぬ、品性の劣等なるものは勇氣にあらずして、自然野卑狂暴となり、却つて社會に害毒を流し、遂には一身を滅亡するに到るものであるから、此點はよく〳〵注意し、平生の修養を怠つてはならぬ。

要するに、我國今日の狀態は、姑息なる考を以て、從來の事業を謹直に繼承して足れりとすべき時代ではない、尙だ創設の時代であつて、先進國の發展に企及し、更に凌駕せねばならぬのであるから、一般に一大覺悟を以て、萬難を排し勇往猛進すべき時であ る、其れには不斷心身の健全なる發達を促し、潑剌たる活動をなし得る活力を旺盛ならしむる心掛を忘れてはならぬ、青年に對して殊に此の點を望んで止まぬ次第である。

◎一生涯に歩むべき道

余は十七歳の時武士になりたいとの志を立てた、と言ふものは其頃の實業家は一途に百姓町人と卑下されて、世の中からは殆んど人間以下の取扱を受け、謂ゆる齒牙にも掛けられぬといふ有樣であつた、而して家柄といふものが無闇に重んぜられ、武門に生れさへすれば智能のない人間でも、社會の上位を占めて恣に權勢を張ることが出來たのであるが、余は抑もこれが甚だ癪に障り、同く人間と生れ出た甲斐には、何が何でも武士にならなくては駄目であると考へた、其頃余は少しく漢學を修めて居たのであつたが、日本外史などを讀むにつけ、政權が朝廷から武門に移つた徑路を審かにするやうになつてからは、其所に慷慨の氣といふやうな分子も生じて、百姓町人として終るの

が如何にも情なく感ぜられ、愈よ武士にならうといふ念を一層強めた、而して其の目的も武士になつて見たいといふ位の單純のものでは無かつた、武士となると同時に、當時の政體を何うにか動かすことは出來ないものであらうか、今日の言葉を借りて云へば、政治家として國政に參與して見たいといふ大望を抱いたのであつたが、抑もこれが鄕里を離れて四方を流浪するといふ間違を仕出來した原因であつた、斯くて後年大藏省に出仕するまでの十數年間といふものは、余が今日の位置から見れば、殆んど無意味に空費したやうなものであつたから、今この事を追憶するだに尙ほ痛恨に堪へぬ次第である。

自白すれば、余の志は靑年期に於て屢次動いた、最後に實業界に身を立てやうと志したのが漸く明治四五年の頃のことで、今日より追想すれば此時が余に取つて眞の立志であつたと思ふ、元來自己の性質才能から考へて見ても、政界に身を投じやう抔とは、

寧ろ短所に向つて突進するやうなものだと、此時漸く氣がついたのであつたが、それと同時に感じたことは、歐米諸邦が當時の如き隆昌を致したのは、全く商工業の發達して居る所以である、日本も現狀のまゝを維持するだけでは、何時の世か彼等と比肩し得るの時代が來やう、國家の爲に商工業の發達を圖りたい、といふ考が起つて、爰に始めて實業界の人とならうとの決心が着いたのであつた、而して此時の立志が後の四十餘年を一貫して變ぜずに來たのであるから、余に取つての眞の立志は此時であつたのだ。

蓋ふにそれ以前の立志は、自分の才能に不相應な、身の程を知らぬ立志であつたから、屢〻變動を餘儀なくされたに相違ない、それと同時に其後の立志が、四十餘年を通じて不變のものであつた所から見れば、是れこそ眞に自分の素質にも協ひ、才能にも應じた立志であつたことが窺ひ知られるのである、併しながら若し自分に己を知るの明があつ

て、十五六歳の頃から本當の志が立ち、初めから商工業に向つて行つて居たならば、後年實業界に踏込んだ三十歳頃までには、十四五年の長日月があつたのであるから、その間には商工業に關する素養も十分に積むことが出來たに相違なからう、假りに爾うであつたとすれば、或は實業界に於ける現在の澁澤以上の澁澤を見出されるやうになつたかも知れない、けれども惜いかな、青年時代の客氣に誤られて、肝腎の修養期を全く方角違ひの仕事に徒費して了つた、これにつけても將に志を立てんとする青年は、宜しく前車の覆轍を以て後車の戒めとするが宜いと思ふ。

窮則獨善其身、達則兼善天下。　　孟子

常識と習慣

◎常識とは如何なるものか

凡そ人として世に處するに際し、常識は何れの地位にも必要で、又何れの場合にも缺けてはならぬことである、然らば常識とは如何なるものであらうか、余は次の如く解釋する。

即ち事に當りて奇矯に馳せず、頑固に陷らず、是非善惡を見別け、利害得失を識別し、言語擧動すべて中庸に適ふものがそれである、これを學理的に解釋すれば『智、情、意』の三者が各〻權衡を保ち、平等に發達したものが完全の常識だらうと考へる、更に換言

すれば、普通一般の人情に通じ、能く通俗の事理を解し、適宜の處置を取り得る能力が即ちそれである、人間の心を解剖して『智、情、意』の三つに分解したものは心理學者の唱道に基く所であるが、何人と雖も此の三者の調和が不必要と認めるものは無からうと思ふ、智惠と情愛と意志との三者があつてこそ、人間社會の活動も出來、物に接觸して効能を現はしてゆけるものである、故に常識の根本原則たる『智、情、意』の三者に就て少しく述べて見やうと思ふ。

さて『智』は人に取つて如何なる働きをするものであらうか、人として智惠が十分に進んで居らねば、物を識別する能力に不足を來すのであるが、此の物の善惡是非の識別が出來ぬ人や、利害得失の鑑定に缺けた人であるとすれば、其人に如何ほど學識があつても、善いことを善いと認めたり、利あることを利ありと見分けをして、それに就くわ

けに行かぬから、さういふ人の學問は寶の持ち腐れに終つてしまふ、此所を思へば智惠が如何に人生に大切であるかゞ知らるゝであらう、所が、彼の宋の大儒程朱の如きは痛く此の智を嫌つた、それは智の弊として、動もすれば術數に陷り、欺瞞詐僞の生ずる場合がある、また功利を主とすれば智惠の働きが多くなり、仁義道德の方面には遠くなるとの理由で之を疎外した、それが爲め折角多方面に活用せしむべき學問が死物になり、唯己れ一身をさへ修めて惡事が無ければ宜いといふことになつて仕舞つた、是は大なる誤思謬見で、假りに一身だけ惡事が無いから宜いと手を束ねて居る人のみとなつたら如何なものであらうか、左樣いふ人は世に處し社會に立つて何等の貢獻する所もない、それでは人生の目的が那邊に存するかを知るに苦しまねばならぬ、とは云へ、素より惡行があつては勿論不可ぬけれども、人は總て惡事に陷らずに、多くの世務を果すやうで無

ければ、眞の人間とは謂はれぬのである、若し智の働きに強い檢束を加へたら、その結果は如何であらう、惡事を働かぬことにはなりもしようが、人心が次第に消極的に傾き、眞に善事の爲にも活動する者が少くなつて仕舞はねば宜いがと、甚だ心配に堪へぬ譯である、朱子は謂ゆる『虛靈不昧』とか『寂然不動』とかいふやうな說を主張して、仁義忠孝を說き、智は詐術に奔るものであるというて絕對に之を嫌つたから、それが爲に孔孟の教は偏狹に陷り、儒教の大精神を世人に誤解さるるやうになつた點が少くないと思ふ、智は實に人心に取つて缺くべからざる大切の一要件である、故に余は智は決して輕視すべからざるものとして居る。

智の尊ぶべきものなることは實に前述の如くであるが、併し智ばかりで活動が出來るかといふに、決して左樣いふものでない、そこに『情』といふものを巧みに案排しなければ

ば、智の能力をして充分に發揮せしむることが出來ないのである、例を擧げて說明すれば、徒らに智ばかり勝つて情愛の薄い人間はどんなものであらうか、自己の利益を圖らんとする爲には、他人を突き飛ばしても蹴倒しても一向頓著しない、由來智惠が十分に働く人は、何事に對しても一見して其の原因結果の理を明かに知ることが出來、事物の見透しが付くのであるが、斯る人物にして若し情愛が無かつたら堪つたものでない、其の見透した終局までの事理を害用し、自己本位を以て何所までもやり通す、此の場合他人の迷惑や難儀なぞが如何に來ようとも、何とも思はぬほど極端になつて仕舞ふ、其所の不權衡を調和してゆくものが卽ち情である、情は一の緩和劑で、何事も此の一味の調合によつて平均を保ち、人生のことに總て圓滿なる解決を告げてゆくものである、假りに人間界から情の分子を除却したらどういふ事にならうか、何も彼も極端から極端に走

り、遂には如何ともすべからざる結果に逢着しなければなるまい、此故に人間に取つては『情』は缺くべからざる一機能である、併しながら情の缺點は最も感動の早いものであるから、惡くすると動き易いやうになる、人の喜怒哀樂愛惡慾の七情によりて生ずる事柄は變化の強いもので、心の他の部面に於てこれを制裁するものが無ければ、感情に走り過ぐるの弊が起る、是に於てか始めて『意志』なるもの〻必要が生じて來るのである。

動き易い情を控制するものは鞏固なる意志より外はない、然り矣、意は精神作用中の本源である、鞏固なる意志があれば人生に於ては最も強味ある者となる、けれども徒らに意志ばかり強くて、之に他の情も智も伴はなければ、唯頑固者とか強情者とかいふ人物となり、不撓屈に自信ばかり強くて、而して主張が間違つてゐてもこれを矯正しようとはせず、何所迄も我を押通すやうになる、勿論 いふ風の人も、或る意味から見

れば尊ぶべき習慣がないでも無いが、それでは一般社會に處すべき資格に於て缺けて居る謂はゞ精神的の片輪で完全な人とは言はれない、意志の鞏固なるが上に聰明なる智惠を加へ、しかも之を調節するに情愛を以てし、此の三者を適度に調合したものを大きく發達せしめて行つたのが、始めて完全なる常識となるのである、現代の人は能く口癖のやうに意志を強く持てといふが、意志ばかり強くても矢張困り者で、俗にいふ『猪武者』のやうな者になつては、如何に意志が強くても社會に餘り有用の人物とは云へないのである。

◎口は禍福の門なり

余は平素多辯の方で、能く種々の場合に口を出し、或は演説なぞも處嫌はず頼まれゝばやるので、知らず識らず言ひ過ぎることなぞあつて、人から屢々揚足を取られたり、

笑はれたりすることがある、併し如何に揚足を取られやうが笑はれやうが、余は一度口にして言ふ以上は、必ず心にもないことは言はぬといふ主義である、従つて自分自身では妄語したとは思つて居らない、或は世人には妄語と聞える場合がないでもなからうが、少くとも自分は確信のある所を口にした積りで居る、口舌は禍の門であるだらうが、唯禍の門であるといふことを恐れて、一切口を閉ぢたら其の結果は如何であらう、有要な場合に有要な言を吐くのは、出來るだけ意思の通ずるやうに言語を用ゐなければ、折角のことも有邪無邪中に葬られねばならぬことになる、それでは禍の方は防げるとしても、福の方は如何にして招くべきか、口舌の利用に依つて福も來るものではないか、固より多辯は感心せぬが、無言も亦珍重すべきものではない、唖は此の世の中に於て如何なる用を辯じ得るか。

余の如きは多辯の爲に禍もあるが、是に由つて、また福も來るのである、例へば、沈默して居ては解らぬのであるけれども、寸口があつた爲に、困難な場合を救うてやることが出來たとか、或はよく喋ることが好きだから、何かのことにあの人を頼んで口を利いて貰つたら宜しからうと頼まれて、物事の調停をしてやつたとか、或は口舌のある爲めに種々の仕事を見出すことが出來たとかいふやうに、總て口舌が無かつたら、それらの福は來るものでないと思ふ、して見れば、これらは誠に口舌より得る利益である、口は禍の門であると共に福の門でもある、芭蕉の句に『ものいへは唇寒し秋の風』といふのがある、これも要するに口は禍の門といふことを文學化したものであらうけれども、斯ういふ具合に禍の方ばかり見ては消極的になり過ぎる、極端に解釋すれば、ものを言ふことが出來ないことになる、それでは餘り範圍が狹過ぎるのである。

口舌は實に禍の起る門でもあるが、また福祉の生ずる門でもある、故に福祉の來る爲には多辯敢て惡いとは言はれぬが、禍の起る所に向つては言語を愼まねばならぬ、片言隻語と雖も、決して之を妄りにせず、禍福の分るゝ所を考へてするといふことは、何人に取つても忘れてはならぬ心得であらうと思ふ。

◎惡んで其の美を知れ

余は動もすれば世人より誤解されて、澁澤は清濁併せ呑むの主義であるとか、正邪善惡の差別を構はぬ男であるとか評される、先頃も或者が來て眞向から余に詰問し、「足下は日頃論語を以て處世上の根本主義とせられ、又論語主義を以て自ら行はれつゝあるにも拘はらず、足下が世話される人の中には、全く足下の主義と反し、寧ろ非論語主義し

者もあり、社會より指彈さるゝ人物をも、足下は平然として之を近づけ、虛然として世評に關せざるが如き態度を取らるゝが、斯の如きは足下が高潔なる人格を傷くるものではあるまいか、其の眞意が聞きたい』とのことであつた。

成るほど爾う言はれて見ると、此評も或は然らんと、自ら思ひ當ることがないでもない、併しながら余は別に自己の主義とする所があつて、凡そ世事に處するに方つては、一身を立つると同時に社會の事に勤め、能ふ限り善事を殖し、世の進歩を圖りたいとの意念を抱持して居る、從つて單に自己の富とか、地位とか、子孫の繁榮とかいふものは第二に置き、專ら國家社會の爲に盡さんことを主意とするものである、されば人の爲に謀つて善を爲すことに心掛け、卽ち人の能を助けて、其れを適所に用ゐたいとの念慮が多いのである、此の心掛が抑も世人から誤解を招くに至つた所以ではあるまいか。

余が實業界の人となつて以來、接觸する人も年々その數を增し、而して夫等の人々が余の行ふ所に見倣ひて、各々長ずる所に由りて事業を精勵すれば、假令其人自身は自己の利益のみを圖るの目的に出るとしても、從事する業務が正しくありさへすれば、其の結果は國家社會の爲になるから、余は常に之に同情し、其の目的を達しさせてやりたいと思うて居る、是は單に直接利益を計る商工業者に對しての場合のみならず、文筆に携はる人に對しても、矢張り同一主義の下に接して來た、例へば新聞雜誌等に從事して居る者が來て余に說を請ふ時にも、余が說を掲載して幾分なりとも其價値を高め得るものとすれば、自說は假令價あるものでないと思うても、請ふ人の眞實心より出たものならば之を斥けない、夫等の人々の希望を容れてやるのは、獨り希望する人の爲のみならず、社會の利益の一部分ともならうかと考へるので、非常に多忙の時間を割いて其の要求に應

ずる次第である、自己の懐抱する主義が斯うであるから、面會を求めて來る人には必ず會うて談話する、知人と然らざるとの別なく、自分に差支なければ、必ず面會して先方の注意と希望を聞くことにして居る、それであるから來訪者の希望が道徳に協つて居ることゝ思ふ場合ならば、相手の何人たるを問はず、其人の希望を叶へてやる。

然るに余が此の門戸開放主義につけ込んで、非理を要求して來る人があつて困る、例へば、見ず知らずの人から生活上の經費を貸して呉れと申込まれたり、或は親が身代不如意のため、自分は中途から學資を絶たれて困るから、今後何年間學資の補助を仰ぎたいとか、または斯く〳〵の新發明をしたから、此の事業を成立させるまで助勢を乞ふとか、甚しきに至つては、是れ〳〵の商賣を始めたいから資本を入れて呉れとか、殆んど此種の手紙が月々何十通となく舞ひ込んで來る、余は其の表面に自己の宛名がある以

上、必ず其れを讀むの義務があると思ふので、左樣いふ手紙の來る每に、屹度目を通すことにして居る、又自ら余が家に來りて此種の希望を述べる者もあるので、余は夫等の人々にも面會するが、併し是等の希望や要求といふものには道理のないのが多いから、手紙の方は悉く自身では斷り切れぬけれども、特に出向いて來た人に對しては、其の非理なる所以を說いて斷るやうにして居る、余が此の行爲を他人から見たならば、何もさういふ手紙を一々見たり、さういふ人に悉く會ふ必要はないと云ふであらう、けれども若し夫等に對して面會を謝絕したり、手紙を見なかつたりすることは、余が平素の主義に反する行爲となる、それゆゑ自ら雜務が多くなつて、寸暇もなくなる故困るとは知りながらも、主義の爲に餘計な手數をもかける譯である。

而して夫等の人の言つて來た事柄でも、又は知己から賴まれたことでも、道理に協つ

て居ることであれば、余は其人のため、二つには國家社會の爲に自力の及ぶ程度に於て力を假してやる、つまり道理ある所には自ら進んで世話をしてやる氣にもなるのであるが、爾ういふことも後日になつて見ると、あの人は善くなかつた、あの事柄は見違へたといふことが無いではない、併し惡人必ずしも惡に終るものでなく、善人必ずしも善を遂げるものとも限らぬから、惡人を惡人として憎まず、出來るものなら其人を善に導いてやりたいと考へ、最初より惡人たることを知りつゝ世話しやることもある。

◎習慣の感染性と傳播力

由來習慣とは人の平生に於ける所作が重なりて一つの固有性となるものであるから、それが自ら心にも働きにも影響を及ぼし、惡いことの習慣を多く持つものは惡人となり、

良いことの習慣を多くつけて居る人は善人となると言つたやうに、遂には其人の人格にも關係して來るものである、故に何人も平素心して良習慣を養ふことは、人として世に處する上に大切なことであらう。

また習慣は唯一人の身體にのみ附隨して居るもので無く、他人に感染するもので、動もすれば人は他人の習慣を摸倣したがる、此の他に廣まらんとする力は、單に善事の習慣ばかりでなく、惡事の習慣も同樣であるから、大に警戒を要する次第である、言語動作の如きは、甲の習慣が乙に傳はり、乙の習慣が丙に傳はるやうな例は決して珍らしくない、著しい例證を擧ぐれば、近來新聞紙上に折々新文字が見える、一日甲の新聞に其の文字が登載されたかと思ふと、それが忽ち乙丙丁の新聞に傳載され、遂には社會一般の言語として誰しも怪しまぬことになる、彼の『ハイカラ』とか『成金』とかいふ言葉は卽

ち其の一例である、婦女子の言葉なども矢張左様で、近頃の女學生が頻りに『よくッてよ』とか『さうだわ』とかいふ類の言語を用ゐるのも、或種の習慣が傳播したものと云つて差支ない、また昔日は無かつた『實業』といふ文字の如きも、今日は最早習慣となり、實業といへば直ちに商工業のことを思はせるやうになつて來た、彼の『壯士』といふ文字なども、字面から見れば壯年の人でなければならぬ筈であるのに、今日では老人を指しても壯士といひ、誰一人それを怪むもののなきに至つて居る、以て習慣が如何に感染性と傳播力とを持つて居るかを察知するに足るであらう、而して此の事實より推測する時は、一人の習慣は終に天下の習慣となり兼ねまじき勢であるから、習慣に對しては深い注意を拂ふと共に、亦自重して貰はねばならぬのである。

殊に習慣は少年時代が大切であらうと思ふ、記憶の方から云うても、少年時代の若い

頭脳に記憶したことは、老後に至つても多く頭脳の中に明確に存して居る、余の如きも如何なる時の事をよく記憶して居るかと云へば、矢張少年時代のことで、經書でも歴史でも、少年の時に讀んだことを最もよく覺えて居る、昨今いくら讀んでも、其の方は讀む先から皆忘れて仕舞ふ、さういふ譯であるから習慣も少年時代が最も大切で、一度習慣となつたなら、其れは固有性となつて終生變ることはない、のみならず、幼少の頃から青年期を通じては、非常に習慣の着き易い時である、それ故に此の時期を外さず良習慣をつけ、それをして固性とするやうにしたいものである、余は青年時代に家出して天下を流浪し、比較的放縱な生活をしたことが習慣となつて、後年まで惡習慣が直らなくて困つたが、日々惡い習慣を直したいとの一念から、大部分はこれを矯正することが出來た積りである、惡いと知りつゝ改められぬのは、つまり克己心の足らぬのである、余

の經驗によれば、習慣は老人になつても矢張重んぜねばならぬと考へる、それは青年時代の惡習慣も、老後の今日に至つて努力すれば改められるものであるから、今日の如く日に新なる世に處しては、尙更この心を持つて自重して行かねばならぬのである。

兎角習慣は不用意の間に出來上るものであるから、大事に際しては其れを改めることが出來るのである、例へば、朝寢をする習慣の人が、常時はどうしても早起が出來ないけれども、戰爭とか火事とかいふ場合に當りては、如何に寢坊でも必ず早起が出來るといふことから觀ても、さう思はれるのである、然らば何故にさうなるかと云ふに、習慣は些細のことであるとして輕蔑し易いもので、日常それが吾儘に伴うて居るからであるから、左れば男女となく老若となく、心を留めて良習慣を養ふやうにしなければならぬのである。

◎偉き人と完き人

史乘などに見ゆる所の英雄豪傑には、兎角智情意の三者の權衡を失した者が多いやうである、乃ち意志が非常に強かつたけれども智識が足りなかつたとか、意志と智慧とは揃うて居たが、情愛に乏しかつたとかいふが如き性格は、彼等の間に幾らもあつた、斯の如きものは如何に英雄でも豪傑でも常識的の人とは謂はれない、成る程、一面から見れば非常に偉い點がある、超凡的な所がある、普通一般人の企及すべからざる點があるには相違ないが、偉き人と完き人とは大に違ふ、偉い人は人間の具有すべき一切の性格に假令缺陷があるとしても、其の缺陷を補うて餘りあるだけ他に超絶した點のある人で、完全なる人に比すれば、謂はゞ變態である、夫に反して完き人は、智情意の三者が圓滿

に具足した者、即ち常識の人である、余は勿論偉い人の輩出を希望するのであるけれども、社會の多數人に對する希望としては、寧ろ完き人の世に隈なく充たんことを欲する、詰り常識の人の多からんことを要望する次第である、偉い人の用途は無限とは云へぬが、完き人なら幾らでも必要な世の中である、社會の諸設備が今日の如く整頓し發達して居る際には、常識に富んだ人が澤山に居て働けば、それで何等の缺乏も不足もない譯で、偉い人の必要は、或る特殊の場合を除いては、これを認むることが出來ない。

凡そ人の青年期ほど思想が一定せず、奇を好んで突飛な行動に出でんとする時代は少なからう、それも年を經るに從ひ、次第に着實になつて行くものだが、青年時代には多くの人の心は浮動して居る、然るに常識といふものは其の性質が極めて平凡なものであるから、奇矯を好み突飛を好む青年時代に、此の平凡な常識を修養せよといふは、彼等

の好奇心と相反する所があらう、偉い人になれと言はるれば進んでこれに贊成するが、完き人となれと云はるれば、其の多くは之を苦痛に感ずるのが彼等の通有性である、併しながら政治の理想的に行はるゝも國民の常識に竢ち、産業の發達進歩も實業家の常識に負ふ所が多いとすれば、否でも常識の修養に熱中しなければならぬでは無いか、況んや社會の實際に徴するに、政治界でも、實業界でも、深奥なる學識といふよりは、寧ろ健全なる常識ある人に依つて支配されて居るを見れば、常識の偉大なることは言ふまでもないのである。

◎親切らしき不親切

世間には冷酷無情にして聊かも誠意なく、其の行動の常に奇矯不眞面目なものが却つ

て社會の信用を受け、成功の榮冠を戴き居るに、之に反して至極眞面目にして誠意篤く謂ゆる忠恕の道に契つたものが却つて世に疎ぜられ落伍者となる場合が幾らもある、天道は果して是か非か、此の矛盾を硏究するのは誠に興味ある問題である。

惟ふに人の行爲の善惡は、其の志と所作と相竢つて較量せねばなるまい、志が如何に眞面目で忠恕の道に契つて居ても、其の所作が遲鈍であるとか、放僻邪肆では何にもならぬ、志に於ては飽くまで人の爲になれかしと思うて居ても、其の所作が人の害となるやうでは善行と謂はれぬ、昔の小學讀本に『親切の却つて不親切になりし話』と題して、雛が孵化せんとして卵の殼から離れずに困つて居るのを見て、親切な子供が殼を剝いてやつた所が、却つて死んで了つたといふ話があるが、孟子にも之と同じやうな例が澤山あつたやうに記憶する、文句は一々覺えて居ないが、人の爲を計ると云つても、

其の室に闖入して其の戸を破る、之をしも忍ぶかと云つたやうな意味や、それから梁の惠王が政事を問ふた時に、『庖に肥肉あり、廐に肥馬あり、民に饑色あり、野に餓莩あり、これ獸を率ゐて人を食ましむるもの也』と曰つて、刄を以て人を殺すも、政事を以て人を殺すも、同じだと斷定して居る、それから告子と不動心說を論じた所に、『心に得ずとも氣に求むること勿れとは可なれども、言に得ずも心に求むること勿れとは不可なり、夫れ志は氣の帥なり、氣は體の充てるなり、夫れ志は至れり、氣は次ぐ、故に曰く、其の志を持して其の氣を暴ふこと無かれ』とある、これは志は卽ち心の本で、氣は心の所作となつて現はれる末である、志は善で忠恕の道に契つて居ても、出來心と云つて偶と志に適はぬことをすることが往々ある、だから其の本心を持して出來心たる氣を暴はぬやう、卽ち所作に間違のないやうに不動心術の修養が肝要である、孟子自身は浩

然之氣を養うて此の修養に資したが、凡人は兎角所作に間違を來し易い、孟子は其の例として『宋人有閔其苗之不長而揠之者、芒芒然歸、謂其人曰、今日病矣、予助苗長矣、其子趨而往視之、苗則槁矣云々』と、大いに告子を罵倒して居る、苗を長ぜしめるには水の加減、肥料の加減、草を芟除するとに由らなければならぬのに、之を引き拔いて長ぜしめやうとするのは如何にも亂暴である、孟子の不動心術の可否は兎に角、世間往々苗を助けて長ぜしむるの行爲あることは爭はれぬ事實である、苗を長ぜしめたい、といふ其の志は誠に善であるが、之を拔くといふ所作が惡である、此の意味を擴充して考へると、志が如何に善良で忠恕の道に適つて居ても、其の所作が之に伴はなければ、世の信用を受けることが出來ぬ譯である。

之に反して、志が多少曲つて居ても、其の所作が機敏で忠實で、人の信用を得るに足

るものがあれば、其人は成功する、行爲の本である志が曲つて居ても所作が正しいといふ理窟は、嚴格に言へば有らう筈はないが、聖人も欺くに道を以てすれば與し易きが如く、實社會に於ても人の心の善惡よりは、其の所作の善惡に重きを措くが故に、それと同時に心の善惡よりも行爲の善惡の方が判別し易きが故に、どうしても所作の敏活にして善なる者の方が信用され易い、例へば將軍吉宗公が巡視された時、親孝行の者が老母を背負て拜觀に出て褒美を貰ふた、所が、平素不良の一無頼漢が之を聞いて、それでは俺も一つ褒美を貰うてやらうと、他人の老婆を借りて背負うて拜觀に出かけた、吉宗公が之に褒美を下さると、側役人から彼は褒美を貰はん爲の僞孝行であると故障を申立てた、すると吉宗公は、イヤ眞似は結構であると篤く勞はられたといふことである、又孟子の言に「西子も不潔を蒙らば、則ち人皆鼻を掩うて之を過ぐ」といふのがある。如

何に傾國の美人と雖も、汚穢を蒙つて居ては、誰とて側へ寄る人はなからう、それと同時に、内心如夜叉でも嫋々婀娜として居れば、知らず識らず迷ふのが人情である、だから志の善悪よりは所作の善悪が人の眼に着き易い、從つて巧言令色が世に時めき、諫言は耳に逆ひ、兎もすれば忠恕の志ある眞面目な人が貶黜せられて、天道是か非かの嘆聲を洩すに引きかへ、わるがしこい人前の上手な人が比較的成功し信用さるゝ場合のある所以である。

◎何をか眞才眞智と謂ふ

凡そ人の世に立つに就て最も肝要なるものは、智慧を增して行かねばならぬ、總て一身の發達、國家の公益を圖るにも、智識といふものが無ければ進んで行くことは出來ぬ

けれども、併しそれ以上に人は人格といふものを養つて行かなくてはならぬ、謂ゆる人格の修養、これは極めて大切なことだらうと思ふ、但し人格といふ定義は如何に論斷せらるゝか知らないが、稀には少しは非常識ともいふべき英雄豪傑に人格崇高な人があるから、果して人格と常識が必ず一致するものであらうか如何か、人が完全に役に立ち、公にも私にも、必要にして謂ゆる眞才眞智といふのは、多くは常識の發達にあるといふても誤りないと思ふのである。

而してその常識の發達に就ては、第一に必要なるは己れの境遇に注意するに在る、故に之を文字にて示さうものなら『人は自己の境遇に能く注意をせねばならぬ』といふことにならうと思ふ、此の文字は或は適當でないかも知らぬが――私は西洋の格言などは餘り知らぬから、常に東洋の經書に就てのみ例を引くが、論語に自己の境遇に就て注意

に数多く見える、故に大聖人の孔子でも、やはり自己の境遇に適することを勉めた、又他に對しても其の境遇を篤くすることを教へた例が、或は大きい場合、或は小さい場合に不適當なる時は、必ずそれに贊同を與へぬ、一例を言へば、孔子が『道が行はれぬから桴に乘つて海に浮ばう、我に從ふものは其れ由か』と子路を促した、『子路これを聞いて喜ぶ、是は孔子がチヨツと意地の惡いやうなことで、自分が問を掛けたのだから、子路が喜んだらう、自分も等しく喜びさうなものであるが、子路の喜ぶ程合が、自己の境遇を能く知悉しなかつたものと見えて、『由や勇を好む我に過ぎたり、材を取る所なし』と、却つて反對に戒めた、桴に乘つて海に浮ばうと言はれた時に、子路が喜んだのであるが、若し子路が能く吾が境遇を顧み知つたならば、『サア左樣でもございませうけれども、それに就ては海に浮ふだけの材は、どうしたら宜うございませう』と答へたら、孔

子が初めて我が意を得たりとして、それならば朝鮮へ行かうとか、日本へ行かうとか言はれたかも知れぬ、又或時孔子が二三の弟子に志を言へと促した時に、最初に子路が意見を述べた、若し自己をして國を治めしむるならば、忽ちの間に一國を治平たらしむることが出來ると、卒爾として答へた、スルト孔子は笑つた、續で銘々志を陳べて、最後に曾點といふ人が瑟を鼓して居たのを、孔子が汝も何か言はぬかと促した、然るに曾點は、私の考は他の人と違ひますと答へたら、孔子は違つても宜いから言へと求めた時に、曾點は『莫春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し舞雩に風し、詠じて而して歸らん』と言つた、そこで孔子は喟然として歎じて曰く、『吾は點に與せん』と、弟子が去つた後に曾晳といふ人が孔子に尋ねて、何故に最初子路の答をお笑になつたか、孔子曰く『國を爲むるに禮を以てす、其の言讓らず、是の故に之を哂ふ』と。一

國を治むるには第一に禮義を重んぜねばならぬ、然るに自身が勇にいさむからでもあらうが、卒爾に斯くすれば宜しうござると答へたるに依つて、其の言讓らず、故に之を哂ふと言はれた、蓋し子路が吾が位地を分別せぬ所を哂はれたやうに見える、併しながら或時は孔子は極めて自負したやうな言葉もある、例へば桓魋が孔子を殺さうとした時に、門人が恐怖したら、『天德を予に生ず、桓魋それ予を如何』と、即ち境遇に安んじて平氣で居られた、また或時孔子が宋に往つて、歸途に大勢から圍まれ、殆んど危害を受けさうになつた、此時にも門人が憂へたら、孔子が曰はれるに『天の將に斯文を喪さんとするや、後死の者斯文に與かるを得ざるなり、天の斯文を喪さゞるや、宋人それ予を如何』と云つて、泰然として一身の危害を少しも憂へなかつた、また或る場合には『大廟に入つては、事ごとに問ふ』、或人これを怪みて、鄒人の子は禮を知つてると云ふが、

大廟に入ると總ての事を煩さい程尋ねる、あれでは禮を知つてるのでは無からうと言つたら、孔子は答へて曰く『是れ禮なり』、それが卽ち禮を知つてるのだと言はれた、誠に自身の境遇位地をよく知つて、道理正しく活用するのが卽ち孔子の大聖人となり得る唯一の修養法であつたやうに見える、して見ると孔子の如き人でも、場合に依つて細事たりとも常に注意を怠らぬ、それが卽ち聖人に成り得る所以である、故にお互に皆孔子の如き大聖人になるといふことは不可能か知らぬけれども、我が境遇位地を是れ誤らぬだけのことが出來るならば、少くとも通常人以上になり得ることは難くないだらうと思ふ、然るに世間は此の反對に走るもので、チョッと調子が宜いと、直ぐに我が境遇を忘れて分量不相應の考も出す、又或る困難の事に遭遇すると、我が位地を失して打萎れて了ふ、卽ち幸に驕り災に哀むのが凡庸人の常である。

◎動機と結果

私は志の曲つた輕薄才子は嫌ひである、如何に所作が巧みでも、誠意のない人は與に伍するを懌ばないが、併し神ならぬ身には人の志まで見抜くといふことは容易でないから、自然志の良否は兎に角、所作の巧みな人間に利用されぬとも限らぬのである。彼の陽明說の如きは、知行合一とか良知良能とか云つて、志に思ふことが其れ自身行爲に現はれるのであるから、志が善ならば行爲も善、行爲が惡ならば志も惡でなければならぬが。私共素人考へでは、志が善でも所作が惡になることもあり、又所作が善でも志が惡なるともあるやうに思はれる、私は西洋の倫理學や哲學といふやうなことは少しも知らぬ、唯四書や宋儒の學說に由つて、多少性論や處世の道を硏究しただけである

が、私の如上の意見に對して、期せずしてバウルゼンの倫理說と合一するといふものがある、其人の言ふには、英國のミユアヘツドといふ倫理學者は、動機さへ善ならば、結果は惡でも可いといふ、謂ゆる動機說で、其の例として、クロムウエルが英國の危機を救はんが爲に、暗愚の君を弑し、自ら皇帝の位に上つたのは、倫理上惡でないと云つて居るが、今日最も眞理として歡迎せらるゝバウルゼンの說では、動機と結果即ち志と所作の分量性質を仔細に較量して見なければならぬといふ、例へば、均しく國の爲といふ戰の中にも、領土擴張の戰もあれば、國家存亡上止むを得ぬ戰もある、主權者としては均しく國家國民の爲に計つたとは云へ、必ずしも領土擴張の必要もないのに、其の開戰の時機を誤つたとすれば、其の主權者の行爲は惡である、けれども其の無謀の開戰も時宜に適して連戰連勝、大に國を富まし民を啓くの基をなしたといふ場合には、其の行爲

は善と言はねばならぬ、前例のクロムウエルの場合にも、幸に英國の危機を救ひ得たから善いが、若し志ばかり熱烈であつても、最後に國を危くするやうな結果を招いだとすれば、矢張り惡行爲と判斷されねばならぬ。

私はパウルゼンの說が果して眞理か何うかは解らぬが、單に志が善ならば其の所作も善だといふミユアヘッドの說よりも、其の志と所作とを較量した上に善惡を定めるといふ說の方が確かなやうに思はれる。

私が常に客を引見して質問に應へることを自分の義務として居るだけ、叮嚀にすると、又頼まれたから止むを得ぬと厭々ながらするのでは、同一の事柄でも其の志が非常に異なる、之と同時に同一の志でも、其の時と所に由つて大に事柄を異にする事もある、詰り土地に肥瘠あり時候に寒暖ある如く、吾人の思想感情も異なつて居るから、同一の

志を以て向つても對者に由つて其の結果を異にするのである、だから人の行爲の善惡を判斷するには、よく其の志と所作の分量性質を參酌して考へねばならぬのである

◎人生は努力にあり

予は本年(大正二年)最早七十四歳の老人である、それゆゑ數年來成るべく雜務を避ける方針を取つて居るが、但し全然閑散の身となることが出來ず、まだ自分の立てた銀行だけは依然、其の世話をして居るといふ次第で、老ても矢張り活動して居るのである、凡て人は老年となく青年となく、勉強の心を失つて終へば、其人は到底進步發達するものではない、同時に夫等の不勉強なる國民によつて營まるゝ國家は、到底繁榮發達するものではない、予は平生自ら勉強家の積りで居るが、實際一日と雖も職務を怠るといふ

ことをせぬ、毎朝七時少し前に起床して、來訪者に面會するやうに努めて居る、如何に多數でも時間の許す限り、大抵は面會することにして居る。

予の如き七十歳以上の老境に入つても、尚且つ此の如く怠ることをせぬのであるから、若い人々は大に勉强して貰はねばならぬ、怠惰は何所までも怠惰に終るものであつて、決して怠惰から好結果が生れることは斷じてない、乃ち坐つて居れば立ち働くより樂なやうであるが、久しきに亙ると膝が痛んで來る、それで寢轉ぶと樂であらうと思ふが、これも久しきに亙ると腰が痛み出す、怠惰の結果は矢張り怠惰で、それが益々甚しくなる位が落である、故に人は良き習慣を造らねばならぬ、卽ち勤務努力の習慣を得るやうにせねばならぬ。

世人は能く智力を進めねばならぬとか、時勢を解せねばならぬとか云ふが、成る程こ

れは必要なことで、時を知り事を擇む上には、智力を進めること、卽ち學問を修むる必要がある、とは言ふものゝ、智力如何に十分であつても、之を働らかさねば何の役にも立たない、そこで之を働かせるといふことは、卽ち勉強して之を行ふことであつて、此の勉強が伴はぬと、百千の智も何等活用をなさぬ、而して其の勉強も、只一時の勉強では十分でない、終身勉強して始めて滿足するものである、凡そ勉強心の強い國ほど國力が發展して居る、之に反して、怠惰國ほど其國は衰弱して居る、現に我が隣國支那などは、謂ゆる不勉強の好適例である、故に一人勉強して一鄕その美風に薰じ、一鄕勉強して一國その美風に化し、一國勉強して天下靡然として之に倣ふといふやうに、各自は啻に一人の爲のみでなく、一鄕一國乃至天下の爲に、十分勉強の心懸が大切である。

人の世に成功するの要素として、智の必要なること、卽ち學問の必要なるとは勿論で

あるが、それのみを以て直ちに成功し得るものと思ふは大なる誤解である、論語に『子路曰く、民人あり、社稷あり、何ぞ必ずしも書を讀みて、然る後に學ぶと爲ん』とある、これは孔子の門人の子路の言である、すると孔子は『是の故に夫の佞者を惡む』と答へられた、此意は『口ばかりで、事實行はれなくては駄目である』といふことである、予は此の子路の言を善しと思つて居る、左れば机上の讀書のみを學問と思ふのは甚だ不可のことである。

要するに、事は平生にある、之を例すると醫師と病人との關係の如きものである、平常衞生のことに注意を怠つて居て、イザ病氣といふ時に醫家の門に馳けつけるといふやうなもので、醫者は病人を治すが職務であるから、何時でも治して吳れると思うては大違ひである、醫家は必ず平常の衞生を勸めるに相違ない、故に予は凡ての人に、不斷の

勉強を望むと同時に、事物に對する平生の注意を怠らぬやうに心掛くることを說きたいと思ふのである。

◎正に就き邪に遠ざかるの道

凡そ事物に對し『斯くせよ』『斯くするな』といふが如き正邪曲直の明瞭なる者は、直ちに常識的判斷を下し得るが、場合に依つてはそれも出來かねることがある、例へば、道理を楯にして言葉巧みに勸められでもすると、思はず知らず、平生自己の主義主張とする所よりも反對の方向に踏み入らざるを得ないやうになつて行くものである、斯の如きは無意識の中に自己の本心を滅却されて仕舞ふことゝなるのであるが、左樣の場合に際會しても、頭腦を冷靜にして何所までも自己を忘れぬやうに注意することが、意志の

鍛錬の要務である、若し左樣いふ場合に遭遇したなら、先方の言葉に對し、常識に訴へて自問自答して見るが宜い、その結果、先方の言葉に從へば一時は利益に向ひ得らるゝが、後日に不利益が起つて來るとか、或は此の事柄に對して斯う處斷すれば、目前は不利でも將來の爲になるとか、明瞭に意識されるものである、若し目前の出來事に對し、斯の如き自省が出來たらば、自己の本心に立ち歸るは頗る容易なることで、從つて正に就き邪に遠ざかることが出來る、余は此の如き手段方法が即ち意志の鍛錬であると思ふのである。

一口に意志の鍛錬といふものゝ、それにも善惡の二者がある、例へば、石川五右衞門の如きは惡い意志の鍛錬を經たもので、惡事にかけては頗る意志の鞏固な男であつたと云つて差支ない、けれども意志の鍛錬が人生に必要だからとて、何も惡い意志を鍛錬す

るの必要はないので、自分も亦それに就て說を立てる譯ではないが、常識的判斷を誤つた鍛錬の仕方をやれば、惡くすると石川五右衛門を出さぬとも限らない、それゆゑ意志鍛錬の目標は、先づ常識に問うて然る後事を行ふが肝要である、斯うして鍛錬した心を以て事に臨み人に接するならば、處世上過誤なきものと謂つて宜しからうと思ふ。

斯く論じ來れば、意志の鍛錬には常識が必要であるといふ事になつて來るが、常識の養成に就ては別に詳說してあるから玆には省くとしても、矢張その根本は孝悌忠信の思想に據らなければならぬ、忠と孝と此の二者より組立てたる意志を以て、何事も順序よく進ませるやうにし、また何事によらず、沈思默考して決斷するならば、意志の鍛錬に於て間然する所はないと信ずる、併しながら事件は沈思默考の餘地ある場合にのみ起るものでない、唐突に湧起したり、左なくとも人と接した場合などに、その場で何とか應

答の辭を吐かねばならぬことが幾らもある、左樣いふ機會には餘り熟慮して居る時間がないから、即座に機宜を得た答をしなければ爲らぬが、平素鍛錬を怠つた者には、其の場に適當な決定をすることが一寸出來難い、從つて勢ひ本心に反したやうな結末を見なければならぬ、故に何事も平素に於て能く鍛錬を重ねるならば、遂には其れが其人の習慣性となりて、何事に對しても動ずる色なきを得るに至るであらう。

子曰く、德の脩めざる、學の講ぜざる、義を聞きて徙に能はざる、不善を改むる能はざる、是れ吾の憂なり。　論語

仁義と富貴

◎眞正の利殖法

實業といふものは如何に考へて宜いものか、勿論世の中の商賣、工業が利殖を圖るものに相違ない、若し商工業にして物を増殖するの効能がなかつたならば、即ち商工業は無意味になる、商工業は何たる公益もないものになる、去りながら其の利殖を圖るものも、若し悉く己れさへ利すれば、他はどうでも宜からうと云ふことを以て利殖を圖つて行つたならば、其の事物は如何に相成るか、六ケ敷いことを云ふやうであるけれども、若し果して前陳の如き有様であつたならば、彼の孟子の言ふ、『何ぞ必ずしも利を曰はん、

又仁義あるのみ』云々『上下交々利を征りて國危し』云々『苟くも義を後にして利を先にすることをせば、奪はずんば饜かず』となるのである、それ故に眞正の利殖は仁義道德に基かなければ、決して永續するものでないと私は考へる、此く言へば、兎角利殖を薄うして人慾を去るとか、普通外に立つと云ふやうな考へに惡くすると走るのである、其の思ひやりを強く、世の中の得を思ふことは宜しいが、己れ自身の利慾に依つて働くは俗である、仁義道德に缺けると、世の中の仕事といふものは、段々衰微して仕舞ふのである。

學者めいたことを言ふやうであるが、支那の學問に、殊に千年ばかり昔になるが、宋時代の學者が最も今のやうな徑路を經て居る、仁義道德といふことを唱へるに付きては、斯かる順序から此く進歩するものであると云ふ考へを打棄てゝ、總て空理空論に走るか

ら、利慾を去つたら宜しいが、其の極其の人も衰へ、從つて國家も衰弱に陷つた、其の末は遂に元に攻められ、更に禍亂が續いて、とう／＼元といふ夷に一統されて仕舞つたのは宋末の慘狀である、唯兎角は空理空論なる仁義といふものは、國の元氣を沮喪し、物の生産力を薄くし、遂に其の極國を滅亡する、故に仁義道德も惡くすると、亡國になると云ふことを考へなければならぬ、左れば利殖を主義とするか、己れさへ利すれば宜しい、人は構はぬといふ方の主義に基いて遣つて行くか、今いふ隣國の或る一部分、元の當時の有樣はそれである、人は構はぬ己れさへ宜ければ良い、國家は構はぬ、自己さへ宜ければ良い、其の極國家は如何なる權利を失ひ、如何なる名聲を落すとも、個人の發達を考へて國家を顧みる人は、殆んど稀だといふ有樣である、宋の時代には前述の道德仁義に付て國を亡ほしたし、今日は又利己主義に於て身を危うすると云はねばならぬ

のである、是は獨り吾が隣國ばかりでない、他の國々も皆同一であつて、詰り利を圖ると云ふことゝ、仁義道德たる所の道理を重んずるといふ事は、並び立つて相異ならん程度に於て始めて國家は健全に發達し、個人は各〻其の宜しきを得て富んで行くと云ふものになるのである。

試みに例へば石油であるとか、若くは製粉であるとか、或は人造肥料であると云ふやうな業務に付て考へて見ても、若し利益を進めるといふ觀念がなくて、成行き次第でどうでも宜いと云ふやうな風に遣つたならば、決して事業が發達するものでは無い、富の增進するものでないことは明かである、假りに若し其の仕事が自己の利害に關係せず、人每に儲かつても己れの仕合せにならぬ、損しても不仕合せにならぬと云ふことであつたならば、其の事業は完全に進まぬけれども、己れの仕事であれば、此の物を進めたい

此の仕事を發達せしむると云ふことは爭ふべからざる事實である、去れば若しさういふ觀念から他の事を凌いで、或は世の中の大勢を知らず、或は事情を察せずに、吾さへ善ければ宜いと云ふことであつたならば、如何になるか、必ず共に其の不幸を蒙つて、己れ一人を利さうと思つた、其の己れも亦不幸を蒙むるといふことになるのである、殊に極く昔の事物の進歩せぬ時代は、或は「マグレ」幸と云ふことがあつたけれども、世の進むに從つて總ての事物が、どうしても規則的にやつて行かなければならぬ時代に於て、己れ自身さへ都合が宜いと云ふならば、例へば鐵道の改札場を通らうと云ふに、狹い場所を己れさへ先へ通らうと皆思つたならば、誰も通ることが出來ぬ有樣になつて、共に困難に陷る、近い例を云ふと、己れをのみと云ふ考へが、己れ自身の利をも進めることが出來ぬといふは、此の一事に徴しても分るだらうと思ふのである、是に於て私が常に

希望する所は、物を進めたい増したいと云ふ慾望といふものは、常に人間の心に持たねばならぬ、而して其の慾望は道理に依つて活動するやうにしたい、此の道理といふのは仁義徳相並んで行く道理である、其の道理と慾望とは相密着して行かなければ、此の道理も前にいふ支那の衰微に陥つたやうな風に走らないとは云へない、又後にいふ慾望は如何に進んで行つても、道理に違背する以上は、何時までも奪はずんば饜かずといふ不幸を見るに至るであらうと思ふのである。

◎効力の有無は其人に在り

金は尊いものであるとか、又は貴ばねばならぬものであるとか云ふことに關しては、古來隨分多くの格言もあり、俚諺もある、或人の詩に『世人交りを結ぶに黄金を以てす、

黄金多からざれば交り深からず』とある一句などは、黄金は友情といふ形而上の精神までも支配するの力あるものとも取れる、精神を尊んで物質を卑める東洋古來の風習では、黄金によつて友情をまで左右されるのは、人情の墮落思ひやられて甚だ寒心の至りであるが、併し斯ういふことが我々の日常よく出會ふ問題である、例へば親睦會などいふと必ず相集まつて飲食する、これは飲食も友愛の情を幇助するからである、又久し振りに來訪して呉れる友人に、酒食を供することも出來ないやうでは、締交の端緒も開き難い、而して是等のことには皆黄金が關係する。

俚諺に『錢ほど阿彌陀は光る』と言うて、十錢投げれば十錢だけ光る、二十錢投げれば二十錢だけ光ると計算して居る、又『地獄の沙汰も金次第』といふに至りては、頗る評し得て皮肉の感がないでもないが、亦以て金の効能の如何に大きいものであるかを表

したものと見ることが出來る、一例を擧げると、東京停車場へ往つて汽車の切符を買ふとするに、如何なる富豪でも、赤切符を買へば三等にしか乘れない、又如何に貧人でも、一等切符を買へば一等に乘れる、これは全く金の効能である、兎に角金には或る偉大なる力あることを拒む譯にはならぬ、如何に多く財を費しても、唐辛を甘くすることは出來ないけれども、無限の砂糖を以て其の辛味を消すことは出來る、又平生苦り切つて八ケ間敷言つて居る人でも、金の爲には直ぐ甘くなるのは世間普通のことで、政治界などに能く見る例である。

　斯く論じ來れば、金は實に威力あるものなれども、併しながら金は固より無心である、善用さるゝと惡用されるとは、其の使用者の心にあるから、金は持つべきものであるか、持つべからざるものであるかは、卒爾に斷定することは出來ない、金はそれ自身に善惡

を判別するの力はない、善人が之を持てば善くなる、惡人が之を持てば惡くなる、つまり所有者の人格如何によつて善ともなり惡ともなる、此事に關しては、余は常々人に語つて居るが、昭憲皇太后の、

もつ人の心によりて寶とも
　仇ともなるは黄金なりけり

との御歌は、實に感佩敬服に堪へぬのである。

然るに世間の人々は、兎角この金を惡用したがるものである、されば古人も之を戒めて『小人罪なし、寶を抱くこれ罪』とか、『君子財多ければ其德を損し、小人財多ければ其過を增す』などと言つてある、論語を讀んで見ても、『富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し』といひ、又は『富にして求むべくんば執鞭の士と雖も、吾れまた之を爲さん』

と言ひ、大學には『德は本なり、財は末なり』と曰つてある、今かゝる訓言を一々此所に引用したならば、殆んど枚擧に遑なしであらうが、これは決して金を輕視しても宜いと云ふ意味ではない、苟くも世の中に立つて完全の人たらんとするには、先づ金に對する覺悟がなくてはならぬ、而して斯る訓言に徵しても、社會に於ける金の効力は如何に思察すべきものであるか、頗る考慮を要するのである、蓋し餘り之を重んじ過ぎるのも誤りなら、又これを輕んじ過ぎるのも宜しくない、卽ち『國、道ありて貧且つ賤しきは恥なり、國、道なくして富且つ貴きは恥なり』と言うて、孔子も決して貧乏を奬勵はなさらなかつた、唯『その道を以てせざれば、これを得るとも處らざるなり』である。

◎孔夫子の貨殖富貴觀

從來儒者が孔子の說を誤解して居た中にも、其の最も甚しいのは富貴の觀念貨殖の思想であらう、彼等が論語から得た解釋に依れば、『仁義王道』と『貨殖富貴』との二者は氷炭相容れざるものとなつて居る、然らば孔子は『富貴の者に仁義王道の心あるものはないから、仁者とならうと心掛けるならば富貴の念を捨てよ』といふ意味に說かれたかと云ふに、論語二十篇を隈なく捜索してもそんな意味のものは一つも發見することは出來ない、否、寧ろ孔子は貨殖の道に向つて說をなして居られる、併しながら其の說き方が例の半面觀的であるものだから、儒者が之に向つて全局を解することが出來ず、遂に誤を世に傳へるやうになつて仕舞つたのである。

例を擧ぐれば、論語の中に『富と貴とはこれ人の欲する所なり、其の道を以てせずして之を得れば處らざるなり、貧と賤とはこれ人の惡む所なり、其の道を以てせずして之

を得れば去らざるなり』といふ句がある、此の言葉は如何にも言裡に富貴を輕んじた所があるやうにも思はれるが、實は側面から說かれたもので、仔細に考へて見れば、富貴を賤んだところは一つもない、其の主旨は富貴に淫するものを誡められたまでゞ、是を以て直ちに孔子は富貴を厭惡したとするは、誤謬も亦甚しと謂はねばならぬ、孔子の言はんと欲する所は、道理を有た富貴でなければ、寧ろ貧賤の方が可いが、若し正しい道理を踏んで得たる富貴ならば敢て差支ないとの意である、して見れば富貴を賤しみ貧賤を推稱した所は更にないではないか、此句に對して正當の解釋を下さんとならば、宜しく『道を以てせずして之を得れば』といふ所に能く注意することが肝要である。

更に一例を以てすれば、同じく論語中に『富にして求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾亦之を爲さん、如し求むべからずんば、吾が好む所に從はん』といふ句がある、これ

も普通には富貴を賤んだ言葉のやうに解釋されて居るが、今正當の見地から之を解釋すれば、句中富貴を賤んだといふやうなことは一も見當らないのである、富を求め得られたなら、賤い執鞭の人となつても可いといふのは、正道仁義を行うて富を得らるゝならばと云ふことである、卽ち『正しい道を踏んで』といふ句が此の言葉の裏面に存在して居ることに注意せねばならぬ、而して下半句は正當の方法を以て富を得られぬならば、何時までも富に戀々として居ることはない、奸惡の手段を施してまでも富を積まんとするよりも、寧ろ貧賤に甘んじて道を行ふ方が可いとの意である、故に道に適せぬ富は思ひ切るが宜いが、必ずしも好んで貧賤に居れとは言うてない、今この上下二句を約言すれば、正當の道を踏んで得らるゝならば、執鞭の士となつても宜いから富を積め、併しながら不正當の手段を取る位なら寧ろ貧賤に居れといふので、矢張この言葉の反面には

『正しい方法』といふことが潜んで居ることを忘れてはならぬ、孔子は富を得る爲には實に執鞭の賤きをも厭はぬ主義であつた、と斷言したら、恐らく世の道學先生は眼を圓くして驚くかも知れないが、事實は何所までも事實である、現に孔子自らそれを口にされて居るから致し方がない、尤も孔子の富は絶對的に正當の富である、若し不正當の富や、不道理の功名に對しては、謂ゆる『我に於て浮雲の如し』であつたのだ、然るに儒者は此の間の區別を明瞭にせずして、富貴といひ功名といひさへすれば、其の善惡に拘はらず、何でも惡いものとして了つたのは、早計も亦甚しいのではないか、道を得たる富貴功名は、孔子も亦自ら進んで之を得んとして居たのである。

◎防貧の第一要義

余は從來救貧事業は人道上より、將た又經濟上より之を處理しなければならぬことゝ思うて居たが、今日に至つてはまた政治上よりも之を施行しなければ爲らぬことゝなつたと思ふ、余の友人は先年歐洲細民救助の方法を視察せんとして出發し、約そ一年半の日子を費して歸朝したが、余も此人の出發に就ては多少助力した點から、歸朝後同趣味の人を集めて、其の席上に報告演説を依囑した、其人の語る所を聞いて見ると、英國の如きは此の事業完成の爲に、殆んど三百年來苦心を繼續して、今日僅かに整備するを得た、又「デンマルク」は英國以上に整頓して居るが、佛、獨、米なぞは、今や各自各樣に細民問題に力を注いで、一寸の猶豫もないとのことである、而して海外の事情を見れば見るほど、久しい以前より自分共が力を注いで居た所に力を入れて居るやうに思はれる。

此の報告會のとき、自分も集會した友人に對して意見を述べた、それは『人道よりす

るも經濟的よりするも、弱者を救ふは必然のことであるが、更に政治上より論じても、其の保護を閑却することは出來ない筈である、但しそれも人に徒食悠遊させよと云ふのではない、成るべく直接保護を避けて、防貧の方法を講じたい、救濟の方法としては、一般下級民に直接利害を及ぼす租稅を輕減するが如きも、其の一法たるに相違ない、而して鹽專賣の解除の如きは、これが好箇の適例である』といふ意味であつた、此の集會は中央慈善協會に於て開催したのであつたが、會員諸君も余の所說を諒とされ、今日と雖も其の方法等に就て種々なる方面に向ひ、相共に調査を實行しつゝある次第である。

如何に自ら苦心して築いた富にした所で、富は即ち自己一人の專有だと思ふのは大なる見當違ひである、要するに、人は唯一人のみにては何事も爲し得るものでない、國家社會の助けに依つて自らも利し、安全に生存するも出來るので、若し國家社會がなかつ

たならば、何人たりとも滿足に斯の世に立つことは不可能であらう、これを思へば、富の度を增せば增すほど社會の助力を受けて居る譯だから、此の恩惠に酬ゆるに救濟事業を以てするが如きは、寧ろ當然の義務で、出來る限り社會の爲に助力しなければならぬ筈と思ふ。『己れ立たんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す』といへる言の如く、自己を愛する觀念が強ければ強いだけに、社會をも亦同一の度合を以て愛しなければならぬことである、世の富豪は先づ斯る點に着眼しなくてはなるまい。

此秋に方つて、畏くも　陛下は大御心を惱まし給ひ、御先例になき貧窮者御救恤の御下賜金を仰せ出だせられた、此の洪大無邊の　聖旨に對し奉りて、富豪者は申合せぬまでも、心中には何とかして聖恩の萬分の一にだも酬い奉らなくてはならぬと苦慮するであらう、是こそ余が三十年來一日も忘るゝ能はざりし願意で、言はゞ願望が今日漸く

達せられたといふもの、併しながら誠に長く心掛て來たことだけに、有難き　聖旨を承くるにつけても、前途が非常に明くなつた感じがして、心中の愉快は殆んど譬へやうがない、けれども爰に懸念すべきは其の救濟の方法如何に就てゞある、それが適度に行るれば宜いが、乞食が俄に大名になつたといふやうな方法では、慈善が慈善でなく、救恤が救恤でなくなる、それからもう一つ注意したいのは、陛下の御心に副ひ奉らんが爲め、富豪が資金を慈善事業に投ずるにしても、出來心の慈善、見榮から來た慈善は決して宜しくないといふことである、左樣いふ慈善救濟事業は得て誠實を缺くもので、其の結果は却つて惡人を造るやうな事になり勝ちである、兎に角　陛下の大御心の存し給ふ所を思ひ、此際富豪諸氏は社會に對する自己の義務を完うせられたい、これ實に畏き　聖旨に副ひ奉るのみか、二つには社會の秩序、國家の安寧を保持する上に於て、如何ばかり

か貢獻することが多からう。

◎罪は金錢にあらず

陶淵明は『盛年不二重來一、一日難二再晨一』と題し、朱子は『青年易レ老學難レ成、一寸光陰不レ可レ輕』と警めてある如く、殊更に空想に耽り、誘惑に陷り易き青年時代は、夢の如くに過ぎ去つて終ふものである、余等が青年時代も眞に早く經過して、明日ありと思うてゐた中に矢の如く移り去つた、今日になつて後悔しても詮方のない事である、青年諸君は深く此の前車に注意して、余等の後悔の轍を踏まぬやうにして貰ひたい、諸君の勵精によりて、將來國家の運命に影響する所大なるものがあるから、從來相當の覺悟ある人も、更に其の臍を固めねばならぬのである。

覺悟を新にするに就て注意すべき點は限りないのであるが、特に注意すべきは金錢の問題である、追々と社會の組織が複雜となつて來るが、昔でさへ恒產無くして恒心を保つことは出來ぬと言はれた位であるから、活氣ある世務に處する程、金錢問題に關して充分の覺悟が無くては、意外の失敗を演じ過失に陷ることがないとは限らぬ。

勿論金錢は貴いものではあるが、又頗る卑しい物である、貴い點より言へば、金錢は勞力の代表となり、約束によつて大抵の物の代價は、金錢ならでは淸算の出來ぬものである、蓋し茲に金錢といふは、只金銀貨幣紙幣の類の通貨のみを指すのでは無く、總じて代償することの出來る貨財は金錢を以て評することが出來るので、金錢は財產の代稱であるとも言ひ得ると思ふのである、嘗て
昭憲皇太后宮の御歌を拜誦した中に、

もつ人の心によりてたからとも
仇ともなるは黄金なりけり

とあつたやうに記憶して居るが、眞に適切なる御評で、吾人の感佩服膺すべき名歌である。然るに昔の支那人の書いたものに據ると、一體に金錢を卑しむ風が盛んであるやうに思はれる、左傳に『小人玉を抱いて罪あり』とある類から、孟子に陽虎の言として『仁を爲せば富まず、富めば仁ならず』とあるが如き、其の一例である、陽虎の如きは固より敬服すべき人物ではないが、當時にありては知言として一般から認められて居たのである、更に又『君子財多ければ其の徳を損し、小人財多ければ其の過を增す』といふやうな意味の言を漢籍の中で讀んだこともある、兎に角東洋古來の風習は、一般に金錢を卑しむこと甚しいもので、君子は近づくべからざるもの、小人には恐るべきも

のとしたのであるが、畢竟貪婪飽くなき世俗の惡弊を矯めんとして、終には極端に金錢を卑しむ樣に爲つたものと思はれる、是等の說は青年諸君は深く注意を拂はねばならぬ。

余は平生の經驗から、自己の說として論語と算盤とは一致すべきものであると言つて居る、孔子が切實に道德を敎示せられたのも、その間經濟にも相當の注意を拂つてあると思ふ、是は論語にも散見するが、特に大學には生財の大道を述べてある、勿論世に立つて政を行ふには、政務の要費は勿論、一般人民の衣食住の必要から、金錢上の關係を生ずることは言ふでもないから、結局、國を治め民を濟ふためには道德が必要であるから、經濟と道德とを調和せねばならぬ事となるのである、故に余は一個の實業家としても、經濟と道德との一致を勉むる爲に、常に論語と算盤との調和が肝要であると手輕く說明して、一般の人々が平易に其の注意を怠らぬやうに導きつゝあるのである。

昔は東洋ばかりでなく、西洋も一體に金錢を卑しむ風習が極端に行はれたやうであるが、是は經濟に關することは、得失といふ點が先に立つものであるから、或る場合には謙讓とか淸廉とか言ふ美德を傷けるやうに觀えるので、常人は時としては過失に陷り易いから、強く之を警戒する心懸けより、斯る敎を說く人もありて、自然と一般に風習となつたものであらうと思ふ。

嘗て某新聞紙上にアリストートルの言として、『總ての商業は罪惡である』といふ意味の句があつたと記憶して居るが、隨分極端な言ひ方であると思ふたが、尙ほ再考すれば、總て得失が伴ふものには、人も其の利慾に迷ひ易く、自然仁義の道に外れる場合が生ずるものであるから、夫等の弊害を誡むるため斯樣な過激なる言葉を用ゐたものかと思はれる、何うしても人情の弱點として、物質上の事に眼が著き易く、精神上のことを忘れ

て物質を過重する弊害の生ずるは止むを得ないことであるが、思想も幼稚であり、道德上の觀念も卑しい者ほど、此の弊害に陷り易いものである、故に昔は全體から觀れば、智識も乏しく道義心も淺薄にして、得失のため罪惡に陷る者が多かつたのであると思はれるので、殊更に金錢を卑しむ風が高まつたのであらう。

今日の社會狀態は、昔よりは智識の發達が著しく進んで、思想感情の高尚な人が多くなつた、更に言ひ換へれば、一般の人格が高まつて來て居るのである、故に金錢に對する念慮も餘程進んで來て、立派な手段を用ゐて收入を圖り、善良なる方法を以て使用する人が多くなつたので、金錢に對する公平なる見解をなすやうに爲つた、併し前述の如く人情の弱點として、利慾の念より輙もすれば富を先にして道義を後にする弊を生じ、過重の結果、金錢萬能の如く考へて、大切なる精神上の問題を忘れて、物質の奴隸

となり易いものであるが、斯くなりては責其人にありとは言ふものゝ、金錢の禍を恐れて其の價値を卑しく觀るやうになつて、再びアリストートルの言を繰返さしむるに至るであらう。

幸にして世間一般の進歩と共に金錢上の取扱も改まつて、利殖と道德と離れまいとする傾向が增して來た、殊に歐米にては『眞正なる富は正當なる活動によつて收得せらるべき者である』との觀念が著々實行されて來て居るが、我國の青年諸君も深く此點に注意して、金錢上の禍に陷らず、倍〻道義と共に金錢の眞價を利用する樣に勉められん事を望むのである。

◎金力惡用の實例

概して御用商人といへば、兎角世間では何か罪悪を含み居るものゝ如く、悪感情を以て迎へ、あれは御用商人であるといふ、其語には厭な響を持つて居る、私共も御用商人と指し呼ばれたらば、甚だ心持が善くない、卽ち御用商人といへば、金の力を以て權勢に媚びる者、而して廉潔實直の事のみをして居られぬ性質の業體の者だといふやうに一般の人に見做されて居るものは甚だ心外なことである、併しながら海外の其の道の者でも、又內地の其の道の者でも、私共の見る所では、皆相當の資力ある人であつて、能く道理を辨へて居る、面目を重んじ信用を大切にする、斯樣に自ら省みる底の人であれば、必ず是非善惡の判斷に迷はぬ譯であるから、少々官府の人から如何はしい申出でがあつたからとて、オイソレと直ぐに應諾は爲さないかと思はれる、或は取扱上の面倒があるので、正當なる賣買の以外に、極く輕微な何等かのことはあるかも知れないけれ

ども、曩に發現した海軍收賄事件のやうな大仕掛の罪惡は、苟くも雙方惡い考が一致しなければ出來ぬ筈である、よし一方から賄賂を贈つて來ても、一方が是を受けぬと云へば仕方がない、又役人に不心得な者があつて、婉曲に或は露骨に贈賄を促したとて、御用商人たる實業家が、自己の良心に省みて面目信用を大切に思ふ者ならば、必ずそんな要請には應じない筈である、已むを得ずば其の取引を斷つても、そんな罪惡は成立せぬやうにすることが出來る筈である、私共は爾かあるべきものと確く信じて居る。

然るに海軍收賄事件の事實に徴するに、軍艦であるとか、軍需品であるとか、其の納入に就て贈賄が行はれたといふのである、又單り「シーメンス」會社にのみ其樣な事があつたと云ふのでは無い、凡そ主なる物品の買上げには、殆んど贈賄行爲が伴うて居るといふことである、海軍のみならず、陸軍にも亦その事が多く行はれて居るといふこと

である、甚しきは其の買上げられた品物が、表面の價格よりは實質が頗る劣つて、何所かに完備を缺いてる所の脆弱のものである、と云ふやうな疑惑を蒙むるは何事であるか、實に慨はしい次第ではないか、大學に『一人貪戻なれば、一國亂を作す』といふ語がある、是は何も貪慾とか收賄とかいふことを意味してるのでは無いが、收賄貪慾といふ底の人の些細な私曲から、延いては天下を聳動するやうな大事に立ち至るといふことは、實に恐ろしい事と謂はねばならぬ。

以前私は斯樣な不正な贈賄をなす實業家は、海外には有りもしやうが、我が日本にはあるまいと思つて居たが、苟くも海外のそれに紛らはしい者が我が實業家中にもあると云ふのでは、甚だ以て遺憾に堪へない、それかあらぬか遂に三井會社の人までも、其の嫌疑の下に檢擧されたのは、甚だ以て痛心の至りである、畢竟斯樣な事件の發生するの

も、仁義道德と生產殖利を別々に考へて取扱ふからであらうと思はれる、苟も生產殖利は正しき道に依つて經營すべきものであるとの觀念が、我々お互に實業者間の信條となつて居るならば、外國の人は兎に角、日本の實業家中に其樣な不正を働く者のないことを誇り得るでもあらう、縱や相手方の人が貪慾心に驅られ、內々これ〳〵のことをした、乃公の勢に酬いろといふやうな、顏色を示したり、甚しきは露骨に口に出して其樣な申出でをなすやうな場合にも、其れは正義に背く行爲であるから、私には出來ぬと云つて、キツパリ斷る位の覺悟を以て商賣をしたならば、必ず其樣な誘導の起るものではない、是に於て私は益々實業家の人格を高めることの必要を痛切に感ずるのである、實業界に不正の行爲が跡を絕たぬやうでは、國家の安全を期することが出來ないと云ふまでに、深く私は憂へて居る。

◎義理合一の信念を確立せよ

社會の百事、利ある所には必ず何等かの弊害が伴ふは數の免れざるもので、我國が西洋文明を輸入して、大に我が文化に貢獻した一面に於ては、矢張り其の弊害を免るゝことは出來ない、即ち我國が世界的事物を取入れて其の恩澤に浴し、其の幸福に均霑したと同時に、新しき世界的害毒の流入したことは爭はれぬ事實で、彼の幸德一輩が懷いて居た危險思想の如きは、明かに其一つであると言ひ得るのである、古來我國にはあれ程の惡逆思想は未だ曾て無かつた、然るに今日さういふ思想の發生するに至つた所以は、我國が世界的に立國の基礎を築いた結果で、亦止むを得ざることではあるけれども、我國に取つては最も怖るべく最も忌むべき病毒である、從つて我々國民たる者の責務とし

て、如何にもして此の病毒の根本的治療策を講じなくてはならぬ、惟ふに此の病毒の根治法には恐らく二様の手段があらう、一は直接その病氣の性質原因を研究し、之に適切な方劑を投ずるので、他の一方は出來るだけ身體諸機關を强壯ならしめて、假令病毒の侵染に遇ふとも、立ち所に殺菌し得るだけの素質を養成して置くことである、所で、我我の立脚地からは、此の二者孰れに就くべきかと云ふに、元來實業に携はる者であるから、此の惡思想の病毒病理を研究して、其の治療方法を講ずることは職分でない、寧ろ我々の執るべき務は國民平生の養生の側にあると思ふ、國民全部をして强健なる身體機關を養はしめて、如何なる病毒に遭ふとも決して侵害されることのないやうに養生を遂げしめなくてはならぬ、故に之が治療法、卽ち危險思想防遏策に就て余が所信を披瀝し、以て一般世人、殊に實業家諸氏の考慮を促したいと思ふ。

余が平素の持論として屢々言ふ所のことであるが、從來利用厚生と仁義道德の結合が甚だ不十分であつた爲に、『仁をなせば則ち富まず、富めば則ち仁ならず』、利に就けば仁に遠ざかり、義に依れば利を失ふといふやうに、仁と富とを全く別物に解釋して了つたのは、甚だ不都合の次第である、此の解釋の極端なる結果は、利用厚生に身を投じた者は、仁義道德を顧みる責任はないと云ふやうな所に立ち至らしめた、余は此點に就て多年痛歎措く能はざるものであつたが、要するに是れ後世の學者のなせる罪で、既に數次述べたる如く、孔孟の訓が『義利合一』であることは、四書を一讀する者の直ちに發見する所である。

後世儒者の其意を誤り傳へられた一例を擧ぐれば、宋の大儒たる朱子が、孟子の序に『計を用ゐ數を用ふるは、假饒ひ功業を立て得るも、只是れ人慾の私にして、聖賢の作處

とは天地懸絶す』と說き、貨殖功利のことを貶して居る。其の言葉を押進めて考へて見れば、彼のアリストートルの『總ての商業は罪惡なり』と曰へる言葉に一致する、之を別樣の意味から言へば、仁義道德は仙人染みた人の行ふべきことであつて、利用厚生に身を投ずるものは仁義道德を外にしても構はぬといふに歸着するのである、此の如きは決して孔孟敎の骨髓ではなく、彼の閩洛派の儒者によつて揑造された妄說に外ならぬ、然るに我國では元和寛永の頃より此の學說が盛んに行はれ、學問といへば此の學說より外にはないと云ふまでに至つた、而して此の學說は今日の社會に如何なる餘弊を齎らして居るのであらうか。

孔孟敎の根底を誤り傳へたる結果は、利用厚生に從事する實業家の精神をして、殆んど總てを利己主義たらしめ、其の念頭に仁義もなければ道德もなく、甚しきに至つては

法網を潜られるだけ潜つても金儲けを仕度いの一方にさせて仕舞つた、從つて今日の謂ゆる實業家の多くは、自分さへ儲ければ他人や世間は如何あらうと構はないといふ腹で、若し社會的及び法律的の制裁が絶無としたならば、彼等は強奪すら仕兼ねぬといふ情ない狀態に陷つて居る、若し永く此の狀態を押して行くとすれば、將來貧富の懸隔は益々甚しくなり、社會は愈々淺間しい結果に立ち至る事と豫想しなければならぬ、これ誠に孔孟の訓を誤り傳へたる學者が數百年來跋扈して居た餘毒である、兎に角世の中が進むに伴れて、實業界に於ても生存競爭が倍々激しくなるは自然の結果といつて可い、然るに此の場合に際し、若し實業家が我勝ちに私利私慾を計るに汲々として、世間は如何ならうと、自分さへ利益すれば構はぬと言つて居れば、社會は益々不健全と成り、嫌惡すべき危險思想は徐々に蔓延するやうになるに相違ない、果して然らば危險思想釀成の

罪は、一に實業家の雙肩に負はねばならなくなる、故に一般社會の爲に之を匡正せんとするならば、此際我々の職分として、極力仁義道德に由つて利用厚生の道を進めて行くといふ方針を取り、義利合一の信念を確立するやうに勉めなくてはならぬ、富みながら且つ仁義を行ひ得る例は澤山にある、義利合一に對する疑念は今日直ちに根本から一掃せねばならぬ。

◎富豪と德義上の義務

私は老人の冷水といひませうか、將た老婆心といひませうか、此の歲になつても國家社會の爲には朝夕駈け廻つて居ります、自宅へも皆さんが種々な事を云つて見えますが、それが必ずしも善いことばかりではありません、否、寄附をしろの、資本を貸せの、學

費を貸與してくれのと、隨分理不盡なことを言つて來る人もありますが、私は夫等の人人に悉く會つてゐます、世の中は廣いから隨分賢者も居れば偉い人も居る、それを五月蠅い善くない人が來るからと云つて、玉石混淆して一樣に斷り、門戶を閉鎖して了ふやうでは、單り賢者に對して禮を失するのみならず、社會に對する義務を完全に遂行することが出來ません、だから私は何誰に對しても城壁を設けず、充分誠意と禮讓とを以てお目にかゝる、而して若し無理な註文が出れば斷るし、出來ることは盡して上げるやうにする、昔支那の語に『周公三たび哺を吐き、沛公三たび髮を梳る』といふことがある、卽ち周公といふ大政治家は、御飯を食べて居る時に訪問客があると、食べかけた御飯を吐き出して客を迎へて用件を聞く、客が歸ると復た御飯にかゝるが、そこへ來客があると復た御飯を吐き出して面會する、かくて一回の食事中に三度も哺を吐いて來客に接す

るといふほど來客を優遇した、また沛公は漢八百年の基を開いた高祖であるが、此人も周公に私淑し、能く廣く賢者に俟つといふ主義で、朝髮を梳いて居る時來客があると、髮を梳づたまゝ引見する、三度髮を梳るといふのは、三度結ひかけた髮を中止してまで訪客に接するといふ、非常に客を歡迎するの意味を現はしたものである、私は敢て周公沛公の賢に比するといふ譯ではないが、廣く賢者に俟つといふ意味で、何誰にでもお目に懸ることにして居る、然るに世間往々にして客を引見することを憶劫がる人が多い、否、富豪だとか名士だとか言はるゝ階級の人には、殊に來客を厭ふの風が甚しいやうであるけれども、五月蠅とか憶劫だとか言つて引込んで居つては、國家社會に對して德義上の義務を全うすることは出來まいと思ふ。

私は過日某富豪の子息で大學を卒業したばかりの御人に面會した、是から社會に出る

に就て、色々御注意に與りたいと云ふことであつたので、私はその時斯んな話をしては貴方のお父さんに、澁澤は餘計なことを云ふと蔭で恨まれるかも知らんがと冒頭して、次のやうな話をしました。

今時の富豪は兎角引込思案ばかりして、社會の事には誠に冷淡で困るが、富豪といへど自分獨りで儲かつた譯ではない、言はゞ社會から儲けさせて貰つたやうなものである、例へば地所を澤山所有して居ると、空地が多くて困るとか言つて居るが、其の地所を借りて地代を納めるものは社會の人である、社會の人が働いて金儲けをし、事業が盛んになれば空地も塞がり、地代も段々高くなるから、地主も從つて儲かる譯だ、だから自分の斯く分限者になれたのも、一つは社會の恩だといふことを自覺し、社會の救濟だとか、公共事業だとかいふものに對し、常に率先して盡すやうにすれば、社會は倍々健全にな

る、それと同時に自分の資産運用も益々健實になると云ふ譯であるが、若し富豪が社會を無視し、社會を離れて富を維持し得るが如く考へ、公共事業社會事業の如きを捨てゝ顧みなかつたならば、茲に富豪と社會民人との衝突が起る、富豪怨嗟の聲は軈て社會主義となり、「ストライキ」となり、結局大不利益を招くやうにならぬとも限らぬ、だから富を造るといふ一面には、常に社會的恩誼あるを思ひ、德義上の義務として社會に盡すことを忘れてはならぬ。

斯んな事を言つては富豪から憎まれるかも知らんが、實際私共でさへ上述の譯合から出來るだけ盡して居るのに、どういふものか世間の金持は引込思案で困る、此間も或富豪に貴方がたがもう少し社會に口を出して下さらなくては困ると言ふと、どうも面倒臭くてと言つて居られたが、單に五月蠅いからと言つて引込んで居られては、私共ば

かり躍起になつても誠に旨く行かないで困ります、現に私共がお先棒になつて明治神宮の外苑建設を企畫して居りますが、之は代々木か青山邊に明治神宮の外苑として、宏大なる公園様のものを造り、帝國中興の英主たる先帝の御遺徳を永く後昆に傳ふべき記念圖書館、若くは各種教育的娯樂機關を造りたいといふのが趣意で、約四百萬圓の費用を要する見込である、斯る企は社會教育の上から見て誠に適切なる事業だと信ずるのであるが、さて是れだけの費用を寄せるには容易でない、斯ういふ場合には岩崎さんや三井さんに是非一と奮發して貰はなければならぬ、がそれと同時に世の大方富豪が社會に對する德義上の義務として、常に公共事業に盡されんことを望むのである。

◎能く集め能く散ぜよ

金とは現に世界に通用する貨幣の通稱であつて、而して諸物品の代表者なのである、貨幣が特に便利であるといふのは、何物にも代り得らるゝからである、太古は物々交換であつたが、今は貨幣さへあればどんなものでも心に任せて購ふことが出來る、此の代表的價値のある所が貴いのである、だから貨幣の第一の要件として、貨幣その物の實價と物品の値とが等しくなければならない、若し稱呼のみ同一にして其の貨幣の實價が減少すると、反對に物價は騰貴する、また貨幣は分割に便利である、爰に一圓の湯呑がある、之を二人に分けやうと思つても分けることは出來ない、壞して半分にして五十錢宛に分けることは出來ない、貨幣だと其れが出來る、一圓の十分の一が欲しいと思ふと、十錢銀貨がある、又貨幣は物の價格を定める、若し貨幣といふものがなかつたなら、此の茶碗と煙草盆の等級を明確に定めることは出來ない、然るに茶碗は一個十錢、煙草盆

は一圓といふならば、卽ち茶碗は煙草盆の十分の一に當り、貨幣あつて兩者の價格は定まるのである。

總じて金は貴ばなければならぬ、これは單に靑年ばかりに望むのではない、老人も壯者も男も女も、凡て人の貴ぶべきものである、前にも言つた如く、貨幣は物の代表であるから、物と同じく貴ばなければならぬ、昔禹王といふ人は、些細な物をも粗末にしなかつた、また宋の朱子は『一食一飯まさに之を作るの難きを思ふべし、半紙半縷來處の易からざるを知れ』と言つてある、一寸の絲屑半紙の紙切、又は一粒の米とても、決して粗末にしては爲らないのである、それに就て爰に一つの佳話がある、英蘭銀行に有名なるギルバルトといふ人が、靑年時代に目見えの爲め銀行に出頭して、その歸る時に、室內に落ちてありし一本の「ピン」を見付けて、ギルバルトは直ちに之を拾つて襟にさし

た、之を見た銀行の試驗役はギルバルトを呼止め、今足下は室內で何かお拾ひになつたやうですが、あれは何ですかと聞くと、ギルバルトは臆する色もなく、一本の「ピン」が落ちて居たが、取り上げれば要用のもので、此儘にして置けは危險であると思つて拾ひ取りましたと答へた、是に於て試驗役は大に感心して、更に色々質問して見ると、洵に思慮深い有望な青年であつたので、遂に之を任用し、後年に至りて大銀行家となつたといふことである。

要するに、金は社會の力を表彰する要具であるから、之を貴ぶのは正當であるが、必要の場合に能く費消するは勿論善いことであるが、よく集めよく散じて社會を活潑にし、從つて經濟界の進步を促すのは有爲の人の心懸くべきことであつて、眞に理財に長ずる人は、よく集むると同時によく散ずるやうでなくてはならぬ、よく散ずるといふ意味は、

正當に支出するのであつて、即ちこれを善用することである、良醫が大手術を用ゐて患者の一命を救つた「メス」も、狂人に持たしめると人を傷る道具となる、また老母の孝養に必要なる飴も、賊徒に與ふれば樞の開閉に音なきの盗具となる故に、我々は金を貴んで善用することを忘れてはならない、實に金は貴ぶべく又賤しむべし。之をして貴ぶべきものたらしむるのは、偏へに所有者の人格によるのである、然るに世には貴ぶといふことを曲解して、只無暗にこれを吝む人がある、眞に注意せねばならぬことである、金に對して戒むべきは濫費であると同時に、注意すべきは吝嗇である、能く集むるを知りて能く散ずることを知らねば、その極守錢奴となるから、今日の青年は濫費者とならざらんことを勉むると同時に、守錢奴とならぬやうに注意せねばならぬのである。

理想と迷信

◎道理ある希望を持て

戰爭して負けては困るが、唯國力を擧げて戰爭にのみ奔るといふことは王道に適するものでは無い、今日の時局に對して我々は左樣な事まで心配せぬでも宜い譯であるが、是から先きの商工業は如何にしたら宜からうか、平和が克復したら其後の實業界は如何なるかといふやうな事に就ては、意想外なる變化を生じて、中には惡いと思つたことが善くなり、善いと思ふたことが惡くもならうから、今日から臆斷は出來ない、併し人は未來の事に向つて是非とも理想は持つべきものであるから、假令違却するとも一定の主

義に依て行ふといふやうなことが無ければ爲らぬ、詰り能く思ひ審かに考へて事に當れば、必ず過は尠いものである、戰爭の如き事變の勃發には、曾て想像したものに違却を生ずることはあるが、凡そ人の世に處するには、相當の趣味と理想とを以て道理から割出して進むのが必要であると思ふ、只その間に謂ゆる商業の德義は如何しても立て通すやうにして、最も重要なるは信である、此の信の一字を守ることが出來なかつたならば、我々實業界の基礎は鞏固といふとは出來ないのである、約言すれば、時局の平和となつた曉には、別して我々實業に從事する者の責任が重くなるのであらうと思ふ、獨り責任が重いのみならず、諸君が經營せらるゝ事業に就ても、是が如何になるとかいふ事を豫想して、その豫想から十分なる道理を考定して、是に由つて活動せらるゝやうにありたいと考へる、『道理ある希望を持つて活潑に働く國民』といふ評語は概括的な言葉で

あるが、先頃或亞米利加人が我が同胞を評して、日本人の全體を觀察すると、各人皆希望を以て活潑に勉强する國民であると言はれて、私は大に悅びました、私も斯く老衰しては居るが、向後益々國家の進運を希望として居る、また多數の人々の幸福を增すことを希望として居る、實業家諸君も亦同樣であらうと思ふ、時局の有無に關はらず、苟くも實業に從事するものは斯くありたい、將來は斯うしなければならぬと云ふ希望は誰もあるに相違ない。

況んや斯る大戰に際しては、將來どう變化するだらうかといふ豫想は、最も愼思熟慮を要することゝ思ふ、その經營せらるゝ事業に應じて宜しきを制して行くといふことは必要だらうと思ふが、之を處するに就て是非一つ守らなければならぬことは、前にも述べた商業道德である、約すれば信の一字である、是が御同樣實業者に健全に行はれて往

つたならば、私は日本の實業界の富は更に增大して、同時に人格も大に進むであらうと思ふ、單に時局に就てのみ希望する譯ではないが、斯る時機は別して變化が多いことを豫想すると、お互に負擔して居る職分から考へたら、宜しきを制することが出來るであらうと思ふのである。

◎この熱誠を要す

如何なる仕事に對しても、近頃の流行語に趣味を持たねば不可ぬといひますが、此の趣味といふ語の定義がどの邊にあるか、學者でないから完全なる解釋を下すことは出來ないが、人が職掌を盡すといふにも、此の趣味を持つといふことを深く希望する、趣味といふ字は理想とも聞えるし、慾望とも聞えるし、或は好み樂しむといふやうな意味

にも聞える、故に此の趣味といふ字を約めて解釋したならば、單に其の職分を表面通りに勤めて往くと言ふのは、俗にいふ御極まり通りで、只その命令に從つて之を處して行くのである、併し趣味を持つて事物を處するといふのは、我心から持出して、此の仕事は斯くして見たい、斯うやつて見たい、斯うなつたから、是を斯うやつたならば、斯くなるであらうと云ふやうに、種々の理想慾望をそこに加へてやつて行く、其れが始めて趣味を持つたといふこと、卽ち趣味といふのは其邊にあると、私は理解する、趣味の定義はどうであるか知らぬが、是非人は其の掌ることに就て、總て此の趣味を持たれたいと思ふ、更に一歩進んで、人として生れたならば、人たる趣味を持つて盡したいと思ふ、果して此世に一人前の趣味を持つて、其の趣味が眞正に向上して往つたら、其れこそ相應の功德が世の中に現はれ得るであらう、それまでに無くとも、趣味ある行動であつた

ならば、必ず其の仕事に就て精神あることであらうと思ふ、若し其のお極まり通りの仕事に從ふのであつたら、生命の存在したものでなくて、たゞ形の存したものとなる、或る書物の養生法に、若し老衰して生命が存在して居つても、唯だ食うて、寢て、其の日を送るだけの人であつたならば、それは生命の存在では無くして、肉塊の存在である、故に人は老衰して、身體は十分に利かぬでも、心を以て世に立つ者であつたら、卽ちそれは生命の存在であるといふ言葉があつた、人間は生命の存在たり得たい、肉塊の存在たり得たくないと思ふ、これは私共頽齡のものは、始終それを心掛けねばならぬ、まだあの人は生きて居るか知らんと云はれるのは、蓋し肉塊の存在である、若しさういふ人が多數あつたならば、此の日本は活き〳〵はせぬと思ふ、今日世間に名高い人で、まだ生きて居るかと言はれる人が澤山ある、是は卽ち肉塊の存在である、故に事業を處する

にも其通り、唯だ其の務めるだけでなく、其事に對して趣味を持たなければ不可ぬ、若し趣味がないなら精神がなくなつて了ふ、恰度木偶人と同樣になる、斯の如き譯であるから、何事でも自己の掌ることに深い趣味を以て盡しさへすれば、自分の思ふ通りに總てが行かぬまでも、心から生ずる理想若くは慾望の或る一部に適合し得らるゝものと思ふ、孔子の言に『之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を樂む者に如かず』とある、蓋し之は趣味の極致と考へる、自分の職掌に對しては必ず此の熱誠がなくてはならぬのである。

◎道德は進化すべきか

道德といふものは、他の理學化學のやうに、段々進化して行くものであるか、詰り道

德は文明に從つて進化すべきものであるかと云ふのである、一寸了解し難い言葉であるが、前にも言ふ如く、宗教信念を以て道德を堅固にするが宜いか、さなくとも論理の上から德義心は維持出來るものであると云ふやうに、追々其の解釋が進化し來りはせぬか、蓋し道德といふ文字は、支那古代の唐虞の世より、王者の道といふのが即ち道德の語原である、故に道德といふ文字は餘程古い。

進化は生物のみでは無い、若しもダーヴヰン氏の說に據りて、古いものは自然に進化すべしと言はゞ、科學の發明、生物の進化に伴つて、追々に變更するといふことになつて然るべき譯ではないか、但し進化論は多く生物に就て說明したやうであるけれども、研究を重ねて往つたならば、生物でなくても追々推移變更するものではないか、變るといふよりは寧ろ進み行く有樣がありはせぬか、何時頃の數であるか知らぬが、支那で唱

へる二十四孝は、種々なる孝行の例を二十四擧げてある、其の中に最も笑ふべきは郭巨といふ人が、其の身貧にして親を養ふ資財なく、爲めに吾が兒を生埋にしやうと思つて土を掘つたら釜が出た、其の釜の中に多くの黄金があつたので、吾が兒を生埋にせずとも親を養ふことが出來た、卽ち孝の德であると云うて居る、若し今の世の中で、親孝行の爲めに我が兒を生埋にすると云ふたならば、馬鹿な事をする、困つたものだと人が評するに相違ない、卽ち孝の一事にしても、世の進步に伴れて人の毀譽が異ると云つても宜いと思ふ、更に一の例を云へば、王祥が親を養ひたい爲に、鯉魚を捕ふるとて、裸體になつて氷の上に寢て居つたら、鯉が飛出したといふことがある、是は戲作かも知らぬが、若し事實としたならば、如何に孝道なればとて、其の心の神に感通する前に身體が凍死したならば、却つて孝道に反するであらう。

想ふに二十四孝の教旨の如きは、假設のものにて的例にはなり難きも、善事といふことに就ては、見方が世の進歩と共に色々に變るといふことがありませぬか、若し或る物質に就て考へたら、即ち電氣もなく蒸汽も無かつた時のことを今日から回想して、殆んど並べ較べにならぬやうになる、故に道德といふものも左樣にまで變化するものであれば、昔の道德といふものは餘りに尊重すべき價値は無くなるが、併し今日理化學が如何に進歩して、物質的の智識が增進して行くにもせよ、仁義とか云ふものは、獨り東洋人が左樣に觀念して居る許りではなく、西洋でも數千年前からの學者、若くは聖賢とも稱すべき人々の所論が、餘り變化をして居らぬやうに見える、果して然らば古聖賢の說いた道德といふものは、科學の進歩に依て事物の變化する如くに變化すべきものでは無からうと思ふのである。

◎斯の如き矛盾を根絶すべし

強い者の中分は何時も善くなると云ふことは、一つの諺として佛國に傳はつて居るけれども、漸々文明が進めば、人々道理を重んずる心も、平和を愛する情も增して來る、相爭ふ所の慘虐を嫌ふ念も、文明が進めば進む程強くなる、換言すれば、戰爭の價値は世が進むほど不廉となる、何れの國でも自ら其所に顧みる所があつて、極端なる爭亂は自然に減ずるであらう、又必ず減ずべきものと思ふ、明治三十七八年頃、露西亞のグルームとかいふ人が『戰爭と經濟』といふ書を著作して、戰爭は世の進むほど慘虐が強くなる、費用が多くなるから、遂には無くなるであらう、といふ說を公にしたことがある、曾て露西亞皇帝が平和會議を主張されたのも、是等の人の說に據つたものであると、

誰やらの說に見たことがある、夫程に戰爭は慘虐なものであるといふ事が唱へらるゝ位だから、今度の如き全歐洲の大戰亂などは、決して起るべきもので無いやうに思はれて居つたが、丁度昨年(大正三年)の七月末に日々各新聞紙の報導を見た頃、私は兩三日旅行して、如何なるかといふ人の問に答へて、新聞紙で一見すれば戰爭が起ると信ぜられるが、先年亞米利加のジヨルダン博士が「モロツコ」問題の生じた時に、米國に有名なる財政家ゼー、ピー、モルガン氏の忠言の爲に戰爭が止んだといふことを、電報でいつて來たと言うて、―博士は素より平和論者であるから、平和に重きを措いたのであらうが―特に手紙を寄越したことがある、私も其說を深く信じた譯では無かつたけれども、世の進步の度が增すに隨つて人々が能く考慮するから、戰亂は自然と減ずるといふ道理が起つて來る譯で、それは自然の勢ひと思はれると申したことであつた。

然るに今日歐羅巴の戰爭の有樣は、細かに承知はしないが、實に慘澹たる有樣である、殊に獨逸の行動の如きは、謂ゆる文明なるものは何れにあるか分らぬと云ふやうな次第である、蓋し其の根源は、道德といふものが國際間に遍ねく通ずることが出來ないで、遂に是に至つたものと思ふ、果して然らば凡そ國たるものは斯る考を以てのみ、其の國家を捍衛して行かねばならぬものであるが、何とか國際の道德を歸一せしめて、謂ゆる弱肉强食といふことは、國際間に通ずべからざるものとなさしむる工夫が無いものであらうか、畢竟政治を執る人、及び國民一般の觀念が、相共に自己の勝手我儘を增長するといふ慾心が無かつたならば、此の如き慘虐を生ぜしむることは無からうけれども、一方が退步すると他方が遠慮なく進步して來るやうでは、此方も進まなければならぬから、勢ひ相爭ふやうになり、結局戰爭せねばならぬことになる、殊更その間に人種關係もあ

ら、國境關係もありませうから、或る一國が他の一國に對して勢力を張るのは其意を得ない、之を止めるには平和では不可ぬといふので、遂に相爭ふやうになるのである、蓋し己の欲する所を人に施さないのであつて、たゞ我を募り慾を恣にし、強い者が無理の申分を押通すといふのが今日の有樣である。

一體文明とは如何なる意義のものであるか、要するに今日の世界は尚だ文明の足らないのであると思ふ、斯く考へると、私は今日の世界に介在して將來我が國家を如何なる風に進行すべきか、又我々は如何に覺悟して宜いか、已む事を得ずば其の渦中に入つて弱肉強食を主張するより外の道はないか、是非これに處する一定の主義を考定して、一般の國民と共に之に據りて行くやうにしたいと思ふ、我々は飽くまでも己れの欲せざる所は人にも施さずして、東洋流の道德を進め、彌增しに平和を繼續して、各國の幸福

を進めて行きたいと思ふ、少くとも他國に甚しく迷惑を與へない程度に於て、自國の隆興を計るといふ道がないものであるか、若し國民全體の希望に依つて、自我のみ主張する事を止め、單に國内の道德のみならず、國際間に於て眞の王道を行ふといふ事を思ふたならば、今日の慘害を免れしめることが出來やうと信ずる。

◎人生觀の兩面

人は此の世に生れた以上、必ず何等かの目的がなくては叶はぬとだが、其の目的とは果して何事であるか、如何にして遂げ得べきか、これは人の面貌の異れるが如く、各自意見を異にして居るであらうが、恐らくは次の如く考ふる人もあるであらう、それは自己の長じたる手腕にせよ、技倆にせよ、それを十分に發揮して力の限りを盡し、以て君

父に忠孝を效し、或は社會を救濟しようと心懸ける、併し其れも漠燃と心で思ふだけでは何にもならぬ、矢張り何等か形式に現はして爲なければならぬので、茲に己の修め得たる材能に依賴して、各自の學問なり、技術なりを盡すやうにする、例へば、學者ならば學者としての本分を盡し、宗教家ならば宗教家としての職責を完うし、政治家も其の責任を明かにし、軍人も其の任務を果すといふやうに、各自に其の能力の有らん限りを傾けて之に心を入れる、斯の如き場合に於ける其の人々の心情を察するに、寧ろ自己の爲といふよりは君父の爲め、社會の爲といふ觀念といふ方が勝つて居る、卽ち君父や社會を主とし、自己のことをば賓と心得て居るので、余は之をしも客觀的人生觀とは名くるのである。

然るに前陳のやうなことは全く反對に、唯々簡單に自分一人のことばかり考へ、社會

のことや他人のことなぞ考へない者もあるであらう、併し此人の考の如く社會を觀察すれば、矢張り其所に理窟がないでもない、卽ち自己は自己の爲に生れたものである、他人の爲や社會の爲に自己を犧牲にすることは怪しからぬではないか、自己の爲に生れた自己なら、何所までも自己の爲に計るが可いとの主張から、社會に起る諸事件に對し、出來得る限り自己に利益になるやうにばかりして行く、例へば、借金は自分の爲に自分がしたのだから、是は當然拂ふべき義務があるから拂ふ、租稅も自分が生存しつゝある國家の費用だから、當然に上納する、村費も亦左樣であるが、此上他人を救ふ爲に、或は公共事業の爲に義捐するといふやうな責任は負はない、それは他人のため社會の爲にはなるであらうが、自分の爲にならぬからだとなし、何でも自己の爲に社會を經營させようとする卽ち自己を主として他人や社會をば賓と心得、自己の本能を滿足せしめ、自

我を主張するを以て能事終れりとする、余は此の如きものを名けて主觀的人生觀とは言ふのである。

余は今是等二者の中、事實に於て如何と考ふるに、若し後者の如き主義を以て押し通すときは、國家社會は自ら粗野となり、鄙陋となり、終には救ふべからざる衰頽になりはすまいか、それに反して前者の如き主義で擴充してゆけば、國家社會は必ず理想的のものとなつてゆくに相違ない、故に余は客觀的に與して主觀的をば排斥するのである、孔子の敎に『仁者は己れ立たんと欲して先づ人を立て、己れ達せんと欲して先づ人を達す』と曰うてあるが、社會のこと人生のことは總て斯うなくては爲らぬことゝ思ふ、己れ立たんと欲して先づ人を立てといひ、己れ達せんと欲して先づ人を達すといへば、如何にも交換的の言葉のやうに聞えて、自慾を充たさう爲に、先づ自ら忍んで人に讓るの

だといふやうな意味にも取れるが、孔子の眞意は決してそんな卑屈なもので無かつたに違ひない、人を立て達せしめて、然る後に自己が立ち達せんとするは、其の働きを示したもので、君子人の行の順序は此くあるべきものだと教へられたに過ぎぬのである、換言すれば、それが孔子の處世上の覺悟であるが、余も亦人生の意義は此くあるべき筈だと思ふ。

◎これは果して絶望か

私共の組織して居る歸一協會といふのがある、歸一といふのは外でもない、世界の各種の宗教的觀念、信仰等は、遂に一に歸する期のないものであらうか、神といひ、佛といひ、耶蘇といひ、人間の履むべき道理を說くものである、東洋哲學でも西洋哲學でも、

自然些細な事物の差はあるけれども、その歸趣は一途のやうに思はれる、『言忠信、行篤敬なれば、蠻貊と雖も行はれん』といひ、反對に『言忠信ならず、行篤敬ならざれば、州里と雖も行はれんや』と云つて居るのは、これは千古の格言である、若し人に忠信を缺き行が篤敬でなかつたならば、親戚故舊たりとも其人を嫌がるに違ひない、西洋の道德も矢張り同じやうな意味のことを說いて居る、但だ西洋の流義は積極に說き、東洋の流義は幾分か消極に說いてある、例へば、孔子敎では『己の欲せざる所、人に施す勿れ』と說いてあるのに、耶蘇の方では『己の欲する所、これを人に施せ』と、反對に說いてあるやうなもので、幾分かの相違はあるけれども、惡いことをするな、善いことをせよと云ふ、言ひ現はし方の差異で、一方は右から說き、一方は左から說き、而して歸する所は一である、斯樣に程合のもので、深く硏究を進めるならば、各々宗派を分ち、門戶を

異にして、甚しきは相凌ぐといふやうなことは、實は馬鹿らしい事であらうと考へる、凡てに於て歸一が出來るか否かは判らぬけれども、或る程度の歸一を期し得るものなれば、左樣あらしめたいといふ考へで、組織せられたのが即ち歸一協會である。

組織以來最早數年を經過して居る、之が會員は日本人ばかりでなく、歐米人も多少は居て、而して或る問題に就てお互に研究し合つて居る、私は即ち仁義道德と生產殖利といふことは、一致すべきものであり、一致させたいものであることに就て、自分は四十年來その事を唱道し實踐して居る、併しながら道理は左樣であるけれども、之に反する事實が屢々世間に現はれるのは、眞に情ない次第である。

自分の說に對して平和協會のボール氏とか、井上博士、鹽澤博士、中島力藏博士、菊地大麓男などは、全然歸一とまでは行かないにしても、必ず或る程度までは歸一し得ら

るべきものである、世の中の物事が、時としては横道に外れるやうなこともあるが、其れはその事物が惡いので、その爲に眞理は少しも晦まされるものでは無い、昔は斯うであつたとか、斯ういふ理論もあるとか曰はれて、仁義道德を生產殖利とは必ず一致すべきもの、又一致せなければ眞正の富を造り成し、之を永久に捕捉することの出來ないものであると云ふことは、大抵の議論が歸著しようと思ふと言つて居られる、若し果して斯ういふ論旨が十分に徹底して、世の中に鼓吹せられ、生產殖利は必ず仁義道德に依らねばならぬ、と言ふ觀念が打成されたならば、仁義道德に缺ける行爲は自ら止むに至るであらう、例へば、御用物品の買上に從ふ職司の人も、賄賂は仁義道德に背くと心付けば、迚も賄賂を收め得るものでない、御用商人の側から云うても、仁義道德に背戾すると思へは、賄賂を行うことは出來まい。

此の關係を押し進めて政治にせよ、法律にせよ、軍事にせよ、有らゆる事柄を此の仁義道德に一致させなければ不可ない、一方は仁義道德に從つて正しき商賣の道を履んでも、一方が賄賂を要請するといふやうな片足では不可ない、世の中のことは殆んど車を廻すやうなもので、お互に仁義道德を守つて行かなければ、必ず何所に扞格を生ずるのであるから、一切の事柄をして仁義道德に合致せしむるやう、相互に努めなければならぬ、此の主義を十分に擴大して廣く社會に行ふならば、賄賂などといふやうな、忌はしいことは自ら止むに至るであらう。

◎日新なるを要す

社會の事柄は年を逐うて進んで來るやうにも見える、また學問も內からと外からと。

次第々々に新しいものを齎らして來る、社會は日に月に進步するには相違ないが、世間のことは久しくすると、その間に弊を生じ、長は短となり、利は害となるを免れぬ、特に因襲が久しければ、潑溂の氣がなくなる、故に古人も曰つた、支那の湯の盤の銘に『苟日新、日日新、又日新』とある、何でもないことだが、日々に新にして又日に新なりは面白い、總て形式に流れると精神が乏しくなる、何でも日に新の心懸が肝要である。

政治界に於ける今日の遲滯は、繁縟に流れるからのことである、官吏が形式的に、事柄の眞相に立ち入らずして、例へば、自分にあてがはれた仕事を機械的に處分するを以て滿足して居る、イヤ官吏ばかりでない、民間の會社や銀行にも、此の風が吹き荒んで來つゝあるやうに思ふ、一體形式的に流れるのは、新興國の元氣鬱勃たる所には少いもので、長い間、風習がつゞいた古國に多いものである、幕府の倒れたのは其の理由から

であつた、『滅二六國一者六國也、非レ秦也』と曰つてある、幕府を滅したるは幕府の外なかつた、大風が吹いても強い木は倒れぬ。

自分は宗教觀念を今でも持たぬが、併し其れかと言つて外道で守る所がないと云ふのではない、私は儒教を信仰して、是を言行の規矩として居る、『獲二罪於天一無レ所レ禱』である、私一人は其れで可いが、一般民衆は爾うは行かぬ、智識の程度の低い者には、矢張り宗教がなければ、ならぬ所が、今日の狀態は、天下の人心歸一する所なく、宗教も亦形式となつて、お茶の流派流儀と云つたやうな憾がある、民衆に嚮ふべき所を敎へぬ、是は何とかせねばなるまい。

此の狀態に對して善い施設をせねばならぬと思ふ、今日は迷信などが中々盛んであつて、そのお蔭で田を流したの、倉をなくしたのといふものが多い、宗教家が本當に力を

入れて起たなければ夫等の勢は益々盛んになるばかりであらう。西洋人は言ふ『信念強ければ、道徳は必要なし』と、その信念を持たせねばならぬ。

商賣は己を利することを眼目とする爲に、一自分さへ利すれば其れで可い、他人の迷惑は知らぬ存ぜぬといふ考を持つて居る人がある、それ故に利殖と道德とは一致せぬといふ人もあるが、これは間違ひで、そんな古い考は今の世に通用させてはならぬ、維新頃までは、社會の上流、士大夫ともいふべき人は利殖に關係しないで、人格の低いものが之に當るといふのであつた、その後此の風習は改まつたが、まだ餘喘を保つて居る。

孟子は、利殖と仁義道德とは一致するものであると曰つた、其後の學者が此の兩者を引き離して了つた、仁義をなせば富貴に遠く、富貴なれば仁義に遠かるものとして了つた、町人は素町人と呼びて賤められ、士の倶に齒ひすべきものでないとせられ、商人も

卑屈に流れ、儲け主義一天張りとなつた、是が爲に經濟界の進步は幾十年幾百年遅れたか分らぬ、今日は漸次消滅しつゝあるが、まだ不足である、利殖と仁義の道とは一致するものであることを知らせたい、私は論語と十露盤とを以て指導して居る積りである。

◎修驗者の失敗

余が十五歳の時であつた、自分には一人の姉が腦を患つて發狂し、二十歳といふ娘盛りでありながら、婦人にあるまじき暴言暴行を敢てし、狂態が甚だ強かつたので、兩親も余も之を非常に心配した、兎に角女のことであるから、他の男に其の世話はさせられぬ、余は心狂へる姉の後ろに附隨して歩き、樣々に惡口されながらも、心よりの心配に驅られて能く世話をしてやつたので、その頃近所の人々の褒め者であつた、然るに此の

心配は獨り一家内の上ばかりでなく、親戚の人々も等しく憂慮して呉れたが、中にも父の實家なる宗助の母親は大の迷信家であつたので、此の病氣は家に祟のある爲であるかも知れぬから、祈禱するが宜いと頻りに勸誘したけれども、父は迷信が大嫌ひで、容易に聞入れなかつたが、その中に姉を伴れて轉地保養かたぐ〳〵上野の室田といふ所へ行かれた、此の室田といふ所は有名の大瀧がある所で、病人を其の瀧に打たすれば宜いとのことであつた、しかるに父の出た後、母はとう〳〵宗助の母親に說き伏せられ、父の留守中に家にあるといふ祟を拂ふため、遠加美講といふものを招いで御祈禱することになつた、余も父と同じく少年時代より迷信をひどく嫌つたので、其の時極力反對したけれども、未だ十五歳の子供の悲しさ、一言の下に伯母なぞに叱りつけられて、余が說は通らない。

さて兩三人の修驗者が來て其の用意に掛つたが、中座といへる者が必要なので、その役には近い頃家に雇入れた飯焚女を立てることになつた、而して室内には注連を張り、御幣などを立てゝ嚴かに飾りつけをし、中座の女は目を隱くし、御幣を持つて端坐して居る、その前で修驗者は色々の咒文を唱へ、列座の講中信者などは、大勢して異口同調に遠加美といふ經文體のものを高聲に唱へると、中座の女、初めの程は眠つて居るやうであつたが、何時かは知らず持つて居る御幣を振立てた、この有樣を見た修驗者は、直ちに中座の目隱を取つて其の前に平身低頭し『何れの神樣が御臨降であるか、御告を蒙りたい』などと曰ひ、それから『當家の病人に就て何等の祟がありますか、何卒お知らせ下さい』と願つた、すると中座の飯焚女めが如何にも眞面目くさつて『此の家には金神と井戸の神が祟る、又この家には無緣佛があつて、それが祟をするのだ』と、さも横

柄に曰ひ放つた。それを聞いた人々の中でも、別して初めに祈禱を勸誘した宗助の母親は得たり顏になつて『それ御覽、神樣の御告は確かなものだ。成る程老人の話に、何時の頃か、此の家から伊勢參宮に出立して其れ限り歸宅せぬ人がある、定めし途中で病死したのであらうと云ふことを聞いて居たが、今御告の無緣佛の祟といふのは、果して此の話の人に相違あるまい、どうも神樣は明かなものだ、實に有難い』と曰つて喜び、而して此の祟を淸めるには如何したら宜からうと謂ふ所から、復た中座に伺つて見ると、『それは祠を建立して祀りをするが宜い』と曰つた。

全體余は最初から此事には反對であつたので、いよいよ祈禱するに就ては、何か疑はしき所でも有つたらばと思つて始終注目して居たが、今無緣佛と曰つたに就て、『其の無緣佛の出た時は凡そ何年程前の事でありませうか、祠を建てるにも碑を建てるにも、そ

の時代が知れなければ困ります』と言つたら、修驗者は重ねて中座に伺つた、すると中座は『凡そ五六十年以前である』といふたので、又押返して『五六十年以前なら何といふ年號の頃でありますか』と尋ねたら、中座は『天保三年の頃である』と曰つた、所が、天保三年は今より二十三年前の事であるから、其所で余は修驗者に向ひ、『只今御聞きの通り、無緣佛の有無が明かに知れる位の神樣が、年號を知らぬといふ譯はない筈のことだ、斯樣いふ間違があるやうでは、まるで信仰も何も出來るものぢやない、果して靈妙に通ずる神樣なら、年號ぐらゐは立派に御解りにならねばならぬ、然るに此の見易き年號すらも誤る程では、所詮取るに足らぬものであらう』と詰問の矢を放つた、宗助の母親は橫合から『其樣なことを言ふと神罰が當る』といふ一言を以て自分の言葉を遮つたが、これは明白の道理で、誰にも能く解つた話だから、自然と滿座の人々も興を冷まし

て修驗者の顔を見詰めた、修驗者も間が惡くなつたと見えて『是は何でも野狐が來たのであらう』と言ひ拔けた、野狐といふことなら、猶更祠を建てるの、祀をするのといふことは不用だといふので、詰り何事もせずに止めることになつた、それゆゑ修驗者は自分の顔を見て『さて〳〵、惡い少年だ』と曰はぬばかりの顔付で睨まへた、私は勝誇りたる會心の笑を禁ずることが出來なかつた。

　それぎり宗助の母親はふツつり加持祈禱といふことを廢めて了つた、村内の人々は此事を傳へ聞いて、以來修驗者の類を村には入れまい、迷信は打破すべきものぞといふ覺悟を有つやうになつた。

◎眞正なる文明

文明と野蠻といふ文字は相對的で、如何なる現象を野蠻といひ、如何なる現象を文明といふか、其の限界は隨分六ヶ敷いけれども、要するに比較的のものであるから、或る文明は更に進んだ文明から見ると、矢張り野蠻たるを免れないと同時に、或る野蠻は其れより一層甚しい野蠻に對すると文明と言へる譯になるけれども、今日之を論ずるに當りては、唯一の空理にあらずして實現されて居る所のものを例とするより外はない、但し一鄕、一都市に就ても文化の程度を異にするけれども、先づ一國を標準とするのが文明野蠻といふ文字に相應しいと思ふ、私は世界各國の歷史、若くは現狀を詳細に調べて居らぬから、細密なるお話は出來ぬけれども、英吉利とか佛蘭西とか獨逸とか亞米利加とかいふ國々は、今日世界の文明國と云うて差支ないであらう、其の文明なるものは何であるかと云ふに、國體が明確になつて居て、制度が儼然と定つて、而して其の一

國を成すに必要なる總ての設備が整うて、勿論諸法律も完備し、教育制度も行き届いて居る。

斯の如く百揆皆整うて居るからと云うて、未だ文明國とは言へない、其の設備の整うて居る上に、一國を十分に維持し活動すべき實力がなくてはならぬ、此の實力といふことに就ては兵力にも論及せねばならぬが、警察の制度も、地方自治の團體も、皆その力の一部分である、斯の如きものが十分に具備して居る上に、彼此おの〳〵克く其の權衡を得て相調和し相聯絡して、一方に重きを措き過ぎるとか、若くは統一を缺くとかいふことの無いのが即ち文明と言ひ得るだらう、換言すれば、一國の設備が如何に能く整うて居ても、之を處理する人の智識能力が其れに伴はなければ、眞正なる文明國とは謂はれない、但し前に述べたる如き、完全なる設備の整うて居る國で、之を運用する人は不

完全であるといふことは、先づ少い道理であるが、或る場合には表面の體裁は完全に見ゆるが、根本が堅實でない場合もあり得ることで、謂ゆる優孟の衣冠で、立派な着物も其の人柄に似合はぬといふやうな事がないとは言はれぬ、故に眞正の文明といふことは總ての制度文物の具備と、其れから一般國民の人格と智能とによりて始めて言ひ得るだらうと思ふ、斯く觀察すれば、最早貧富といふことは論ぜぬでも、文明といふ中には自ら富の力が加はつて居ると見て宜しいけれども、形式と實力とは必ずしも一致するものに非ずして、形式が文明であつても實力は貧弱、是は甚だ不權衡の言ではあるけれども、必ず無いとは言はれない、故に曰く、眞正の文明は強力と富實とを兼ね備ふるものでなければならぬ。

さて一國の進步は孰れに傾くかといふに、古來各國の實例を觀るに、多く文化の進步

が先にして、實力が後より追隨するやうに思はれる、殊に國によりては兵力が先づ前驅して、富力といふものは殊更に遲れ馳せになるといふことは、多く見る例である、我が帝國の現狀も矢張りさういふ有樣と謂はねばなるまいかと思ふ、其の國體が萬國に冠絕して、而して百般の施設も、維新以後輔弼の賢臣が打寄つて漸次に建設せられたのであるから、洵に申分はないと思つて居る、只それに伴ふ富實の力が同じく完備して居るかといふと、悲いかな歲月尙ほ淺しと言はねばならぬ、富實の根本たるべき實業の養成は、短日月にして滿足し得るものではない、爲に前に申す國體とか制度とかいふものが完備せるに比較すれば、富力は頗る缺如して居る、但し其の富を增殖することのみに國民擧つて努力するならば、帝國小なりと雖も種々なる方法もあるだらう、けれども富むより先に使用せねばならぬといふ必要がある、文明の治具を張るために、富實の力を減損す

るは今日の大なる憂である、凡そ國を成すは唯富みさへすれば宜いといふ譯に行かぬ、文明の治具を張るために、富力の一部を犧牲に供するといふことは止むを得ぬであらう換言すれば、一國の體面を保つ爲め、一國の將來の繁盛を圖る爲め陸海軍の力を張らねばならぬ、内治にも外交にも、種々の國費を支出せねばならぬ、即ち一國の治具の爲には、其の財源を多少減損するといふことは、勢ひ免れぬことであるけれども、其れが劇しく一方に偏すると、終に文明貧弱にならぬとは謂へぬ、若しも文明貧弱に陷つたら、百般の治具は皆虛形となり、遠からずして文明は野蠻と變化する、此く考へると、文明をして眞の文明たらしむるには、其の内容をして富實、强力、此の二者の權衡を得せしめねばならぬ、我が帝國に於て今日最も患ふる所は、文明の治具を張るために、富實の根本を減損して顧みぬ弊である、これは上下一致、文武協力して其の權衡を失はぬやう

勉勵せねばならぬと思ふ。

◎發展の一大要素

明治の時代は新しい事物を入れて舊い事物を改造し、汲々として進歩を圖つた時代であつた、勿論進歩が十分なりしとは言はれぬが、長い間國を鎖して歐米の文物に接觸しなんだものが、僅かに四五十年の間に、漸次彼の長を採り我が短を補うて、或點は彼に恥ぢぬまで進歩した、勿論これは聖代の御蔭、明治天皇の聖明に由る所、在朝有司の誘導も亦謝意を表さねばならぬが、また國民の精勵の然らしむる所と謂はねばならぬ。

さて明治が大正に移つた所で、往々世間では、最早創業の時代は過ぎた、是からは守成の時代といふ人があるけれども、お互國民は、左樣に小成に安んじてはならぬ、版圖

は小さく人口が多く、尙ほ追々に人口が增殖して行くのだから、そんな引込思案では居られぬ、內を整ふると同時に、外に展びるといふことを工夫しなければなるまい、耕地の面積は少いけれども、農法を改良して耕地の効用を增すことが出來る、種苗を改良し、耕作法を改良し、窒素肥料、燐酸肥料等、優良な肥料を宛て行ひ、集約的に農法を改良すれば、上田五俵の所は七俵も穫れ、下田は二倍にも收穫が倍すであらう。今まで出來なかつた陸稻も、人造肥料によれば、一反步から五俵も七俵も穫れるといふ例もある、耕地が狹いからとて、其の効用を增すことを粗畧に考へては可かぬ、又北海道或は他の新領土等にも、須要の資金勞力を注入して、行届くだけ事業を成立たせなければならぬ、此くお互に努めても、さて限りあるものは限りあるのでから、一面海外に向つて大和民族發展の途を開くことを、須臾も怠つてはならぬのである。

海外に對つて發展するには、如何なる方面を擇ぶべきかと云へば、矢張一番利益のある所に赴くといふことは、自然の趨勢であると思ふ、氣候もよし、地味も良くて、その土地が能く人を容れ、農業に商業に、總ての事の遣りよい處を擇ぶのが人情である、是に於て私共の切に憂ふるのは、北米合衆國と我邦との關係である、今日のやうに紛議を釀して居るのは、お互實に遺憾に堪へない、惟ふに是は先方にも大なる我儘があるに相違ない、不道理を言ひ張つて居ることは事實であるが、又事の此に到つたに就ては、我が國民も反省しなければならぬ點が大にあると思ふ、是等のことは現に當面の交渉問題となつて居るから、詳細に立入つて言ひ能はぬ事情もあるけれども、國民の期待は何所までも果す勇氣を以て、而して能ふだけの忍耐を以て、大和民族の世界的發展の途を開き、何れの地方でも、厭がられ嫌はれる人民とならぬやうに心掛けることが、即ち發展

の大要素であらうと思ふのである。

◎廓清の急務なる所以

一と搖ぎ搖いで茲に維新の大改革となつた、治める人治めらるゝ人の分界を去り、又商賣人の範圍も狹い區域にあつたものが、世界を股にかけての大活動を試みなければならぬといふことになり、又日本內地だけの商賣でも、主なる品物の運送、蓄積等は、從來大抵政府の力に依つて行はれて居つたものが、それも一切個人でしなければ爲らぬといふ風に遷り變つて來た、商人から云へば全く新天地が開かれたのである、而して彼等も亦相當の教育を受けねばならぬことになつた、商であれ工であれ、一の手續を致へ、或は地理、或は物品、品目に、或は商業の歷史に、兎に角、商賣を繁昌させるに就ての

必要な智識だけは、世界の粹を拔いて敎へるといふ風になつた、けれども其れは主として實業敎育であつて、道德敎育ではなかつた、寧ろ爾ういふ事は措いて問題にしなかつた、乃で自分の富を增さうとする人が續々と出て來る、俄分限が出る、僥倖で大富を得た者もある、それが刺戟となり誘惑となつて、誰でも爾ういふことを狙ふやうになる、斯くして益々富を殖す方にのみ相擧つて進む、そこで富む人は愈々富む、貧い者も富を狙はうとする、仁義道德は舊世紀の遺物として顧みない、寧ろ殆んど其の何物たるかを知らぬ、唯智識だけを以て自家の富を增すに汲々乎たる有樣である、腐敗に傾き、溷濁に陷り、墮落混亂を來す、固より怪むに足らない、勢ひ廓淸を叫ばなければならぬ事にもなるのである。

然らば如何にして其の廓淸を計るべきであらう、一般に正當なる利益を進める方法を

忘れ、徒らに利慾の餓鬼となる結果、此の如き道徳を滅却するやうな狀態に陷るといふことは、前に言つた、併し其の行動を惡むの餘り、生產利殖の根本をも塞ぐといふまでに立ち至るのは、甚だ取らない、例へば男女の品行の甚だ猥褻に流れるのを嫌うて、自然の人情まで絕つといふことは、甚だ不條理なことでもあるし、また行はれ難いことでもある、遂には生々の理を失つて了ふことになるのである、實業界の腐敗墮落に對しても、唯これに對して攻擊戒飭を加へるといふ方にのみ力を盡すのが、適當なる廓淸であるか否かは餘程注意すべき問題であつて、或は反つて爲に國家の元氣を喪ひ、國家の眞實の富を毀損するやうな事にならぬとも言はれぬ、廓淸といふことは中々六ケ敷い、舊に復つて、治める方の人のみが道義を重んじ、生產殖利に從事する人は成るたけ制限して、極く小さい範圍に棲息せしむるやうにして行つたならば、其の弊害を滅ずること

が出來るか知れないが、それでは國の富の進歩は止まつて了ふ、そこで飽くまで富を進め、富を擁護しつゝ、其間に罪惡の伴はぬ神聖な富を作らうとするには、どうしても一の守るべき主義を持たなければならぬ、それは卽ち私が常に言つて居る所の仁義道德である、仁義道德と生產殖利とは決して矛盾しない、だから其の根本の理を明かにして、斯くすれば此の位置を失はぬといふことを、我れ人共に十分に考究して、安んじて其の道を行ふことが出來たならば、敢て相率ゐて腐敗墮落に陷るといふことなく、國家的にも個人的にも、正しく富を增進することが出來ると信ずる。

其方法として日常の事に就き、斯る商賣には斯く〳〵、斯る事業には斯く〳〵と爰に詳述は出來ないが、第一の根本たる道理なるものは必ず生產と一致するものである、而して富をなす方法手段は、第一に公益を旨とし、人を虐げるとか、人に害を與へると

か、人を欺くとか或は僞り杯いふ事のない樣にしなければならぬ、此くて各々其職に從つて盡すべきを盡し、道理を誤らず富を増して行くことであれば、如何に發展して行つても、他と相侵すとか相害することは起らぬと思ふ、神聖なる富は此くて初めて得られ續けられるのである、各人各業が此域に達すれば、そこで廓淸は遂げられたのである。

子貢曰、貧而無レ諂、富而無レ驕、何如、子曰、可也、未レ若ニ貧而樂富而好レ禮者一也、子貢曰、詩云、如レ切、如レ磋、如レ琢、如レ磨、其斯之謂與、子曰、賜也、始可ニ與言一レ詩已矣、告ニ諸往一而知レ來者。　論語

人格と修養

◎樂翁公の幼時

樂翁公の傳は既に廣く世間に知れ渡つて居ることであるから、今更めて述ぶるまでもないのであるが、玆に述べんとするは樂翁公の御自筆で、松平家の祕書となつて居る『撥雲筆錄』といふものに依りて、聊か公の御幼時に於ける一端を窺ふと同時に、その御人格御精神等の非凡なる所以を紹介しやうと思ふのである、卽ち

『六つの年に大病に罹りたり、生くべき程心許なかりけれど、高島朔庵法眼等多くの醫師打集ひて醫しぬ、九月の頃平癒す、七つの頃にやありけん、孝經を讀み習ひ假名な

んど習ひたり、八つ九つの頃、人々皆記憶もよく才もありとて褒めのゝしりければ、我心ながらさもあることよと思ひしぞはかなかれ。』

これは御利巧だ〳〵と皆が御世辭を言ふから、自分自身は悧巧な積りで居たのが恥かしいといふ、懷舊の情を敍べられたので、甚だ床しき述懷である。

『其後大學など讀みならひたる頃、幾かへり數へられ侍りても得覺え侍らずして、さては人々の褒めのゝしりけるは諂らひ阿ねるにこそ、實はいと不才にして不記憶なりけりと、九つの頃ふと覺りぬ、之を思へば幼き時褒めのゝしるはいと惡しきことなるべし、十餘りの頃より名を代々に高くし、日本唐土へも名聲を鳴らさんと圖りけるも、大志のやうなれども最と愚かなることにぞ侍りける。』

是に依つて見ると、十歳位の時から海外にまで聞える程の人物になりたいと思はれた、

實に非凡なことである、併し御自身では、それは大志のやうではあつたけれども、烏滸の次第であつたと謙遜して居られるのである。

『其頃より大字など多く寫して人の需めに應じたりけり、皆々請需めしも諂ひの種に生ひ出でしことなれば、其需めに應じて書きける心いと淺かりけり。』

私共も時々字などを書かせられるが、或は樂翁公が茲に言はれたやうなことがあるかも知れない。

『十餘り二つの頃、著述を好みて通俗の書など集め、大學の條下にある事々を書集めて人の教戒の便りにせまほしく思立ちて書きけれども、古きことも覺え侍らぬ上、通俗の書は僞り多しと聞きければ止めたり。』

もう十一二歳の頃から著述をして人の教にならうと思ふことを書き始められたのである

が、併し古いことは知らず、また通俗の書を參考にする、事實を失うて居ることがあるから、讀者を誤らしめてはならぬと思返して止められたのである。

『今思へば眞西山の大學術義の旨趣に類したる大旨なれば、蒐め侍らざりしぞ幸ひとも云ふべきにぞ、此頃より歌も詠みたれど、皆腰折の類にて覺えもし侍らず、又頼よる人もなければ、自からよみて反古にのみしたり、鈴鹿山の花の頃、旅人の行きかふ樣畫きたるを見て、

鈴鹿山旅路の宿は遠けれど振捨てがたき花の木の下

と詠みたるも、十餘り一つの頃にありけん。』

十一歳の時に既に斯ういふ歌を詠まれたのは、文藝上に於ても天才であつたやうに思はれます。

『十餘り二つの時、自敎鑑と云ふ書を書きたり、大塚氏に添削を請ひたれば、其うちの書にしては見よきなり、今もあり、淸書の頃、明和は七つとあれども五年の頃より作りたり、父上悦び給ひて史記を賜ふ、今も藏書になしぬ、十餘り一つ二つの頃より詩を作りけれど、平仄も揃ひかねて人にも言ひ難きなり、

雨後の詩に

虹晴淸夕氣　雨歇散秋陰
流水琴聲響　遠山黛色深

又七夕の詩に

七夕雲霧散　織女渡銀河
秋風鵲橋上　今夢莫揚波

とよみたるも、多くの師の添削にあひたれば、斯かる言葉とはなりたりける。』

これで見ると樂翁公は性來非常に多能で、少年の時分から餘程優れた御人のやうである、自敎鑑といふは公の藏書中に出て居るが、自分の身を修めるといふことを自ら戒めた書で、餘り長篇ではないやうに記憶して居る、私も昔これを讀んだことを覺えて居る樂翁公は又甚だやさしい性質の御方であつたが、併し老中田沼玄蕃頭の政治をひどく憂へて、迚も是では德川家は立行くことは出來ぬといふ位に憤慨して、是非この惡政を除くには田沼を殺す外はないから、身を捨てゝ田沼を刺さうといふことを覺悟したと云ふことが、此書の中にも書いてある、元來至つて溫和な思慮深い御人であつたが、或點には餘程精神の銳い所のあつた方のやうである、尙ほ續いて讀んで行くと、癇癖の強い所があつて、それを侍臣が嚴しく諫めたことが書いてある。

『明和八年予は十餘り四ッになれり（略中）予此頃より短氣にして、僅かのことにも怒りふづくみ、或は人を叱怒し、又は肩はり筋いだして理をいひなんどしたり、みなくなげかしとのみいひたり、大塚孝綽ことによくいさめたり、水野爲長常にいさめて日々のよしあしをいひたり、聞けばいと感じけれど、ふづくみの情に堪がたきに至る、床に索道のかきし太公望の釣する畫をかけて、怒の情おこれば獨りそれに打向ひて、其情をしづめけれども堪かねたり、ひと日全く怒の情なくくらしたく思ひしかど、終に其頃はなかりき、此くても十八歳の頃より洗ひそゝぎしやうになりたるこそ稀有なれ、全く左右の直言ありし故なるべし。』

是に依りて見ると、此御方は天才を有つて居られて、而して或點には餘程感情の強い性質を有つて居られたが、これと同時に大層精神修養に力を盡され、而して遂に樂翁公

の楽翁公たる人格を築き上げられたものと見えるのである。

◎人格の標準は如何

人は萬物の靈長であるといふことは、人皆自ら信じて居る所である、同じく靈長であるならば、人々相互の間に於ける何等の差異なかるべき筈なるに、世間多數の人を見れば、上を見るも方圖がなく、下を見るも際限なしと云うて居る、現に我々の交際する人は、上王公貴人より、下匹夫匹婦に至るまで、其の差異も亦甚しいのである、一郷一村に見るも、既に大分の差があり、一縣一州に見れば、其の差は更に大きく、之を一國に見れば益々懸隔して、殆んど底止する所なきに至るのである、人既に其の智愚尊卑に於て斯様に差等を有するとすれば、其の價値を定むるも亦容易のことでは無い、況ん

や之に明確なる標準を附するに於てをやである、併し人は動物中の靈長として之を認むるならば、其間には自ら優劣のあるべき筈である、殊に人は棺を蓋うて後、論定まるといふ古言より見れば、何所かに標準を定め得る點があると思はれる。

人を見て萬人一樣なりとするには一理ある、萬人皆相同じからずとするのも亦論據がある、隨つて人の眞價を定むるにも、此の兩者の論理を研究して適當の判斷を下さねばならぬから、隨分困難のことではあるが、其の標準を立つる前に、如何なる者を人といふか、先づ其れを定めてかゝらねばなるまいと思ふ、併しこれが中々の困難事で、人と禽獸とは何所が違ふかと言ふやうな問題も、昔は簡單に說明されたであらうが、學問の進步に從つて、それすら益々複雜な說明を要するに至つたのである、昔歐洲の或る國王が、人類天然の言語は如何なるものであるかを知りたいと思つて、二人の嬰兒を一室に

収容し、人間の言語を少しも聞かせないやうにして、何等の教育も與へずに置き、成長の後、連れ出して見たが、二人とも少しも人間らしい言語を發することが出來ず、唯獸のやうな不明瞭な音を發するのみであつたと言ふ、是は事實か否かは知らないが、人間と禽獸との相違は、極めて僅少に過ぎぬといふことは、此の一話によつても解かるのである、四肢五體具足して人間の形を成して居るからとて、我々は是を以て直ちに人なりと言ふことは出來ぬのである、人の禽獸に異なる所は、德を修め、智を啓き、世に有益なる貢獻を爲し得るに至つて、初めて其れが眞人と認めらるゝのである、一言にして之を覆へば、萬物の靈長たる能力ある者に就てのみ、初めて人たるの眞價ありと言ひたいのである、從つて人の眞價を極むる標準も、此の意味に就て論ぜんとするのである。

古來歴史中の人々、何者か能く人として價値ある生活をなしたであらう、往昔支那の

周時代にあつては、文武兩王並び起つて殷王の無道を誅し、天下を統一して專ら德政を施かれた、而して後世文武兩王を以て道德高き聖主と稱して居る、して見れば文武兩王の如きは、功名も富貴も共に得られた人と謂ふべきである、然るに文王武王周公孔子と並び稱せられて居る夫子は如何である、亦聖人として崇められ、孔夫子に對して四配と言へる顏囘、曾子、子思、孟子の如きも、聖人に亞ぐものとして推稱せられて居るに關はらず、是等の人々は終生道の爲に天下に遊說して、其の一生を捧げたものである、けれども戰國の際、一小國家すら自ら有することは出來なかつた、されど德に於ては文武に讓らずして、其名も亦高いものであつたが、富貴といふ方面から之を物質的に評するならば、實に雲泥霄壤の差ありて比較にならないのである、故に若し富を標準として人の眞價を論ずれば、孔子は確に下級生である、併し孔子自身は果して左樣に下級生と感

じたであらうか、文王、武王、周公、孔子皆其の分に滿足して其の生を終つたとするならば、富を以て人の眞價の標準とし、孔子を以て人間の下級生なりと爲すのは、適當なる評價と言ひ得るであらうか、是を以て人を評價するの困難を知るべきである、善く其人の以てする所を視、其の由る所を觀て、而して後その人の行爲が世道人心に如何なる効果ありしかを察せざれば、之を評定することは出來ぬと思ふ。

我國の歷史上の人物に就て見るも、また其の感なき能はざるものがある、藤原時平と菅原道眞、楠正成と足利尊氏、何れを高價に評定し、何れを低價とすべきか、時平も尊氏も共に富に於ては成功者であつた、併し今日から見れば、時平の名は道眞の誠忠を顯はす對象としてのみ評さるゝに過ぎない、之に反して道眞の名は、兒童走卒と雖も尙ほ能く之を記憶して居る、然らば孰れを果して眞價ある者と目すべきであらうか、尊氏

正成二氏に就て見るも同樣である、蓋し人を評して優劣を論ずることは、世間の人の好む所であるが、能く其の眞相を穿つの困難は是を以て知らるゝのであるから、人の眞價といふものは容易に判定さるべきものでは無い、眞に人を評論せんとならば、其の富貴功名に屬する謂ゆる成敗を第二に置き、能く其人の世に盡したる精神と効果とに由つてすべきものである。

◎誤解され易き元氣

元氣とは如何なるものかと云ふに、之を形に現はして說くことは甚だ難かしい、漢學から說けば、孟子の言ふ浩然之氣に當るだらうと思ふ、世間ではよく青年の元氣と言ふけれども、青年にばかり元氣があつて、老人には無くて宜いといふのでない、元氣は押

並べて、更に一歩進んでは男女共になければならぬと考へる、大隈侯の如き私よりは二つもお上であるけれども、其の元氣は非常なるものである、孟子の浩然之氣につきては、孟子が『其爲レ氣也、至大至剛、以レ直養而無レ害、則塞二于天地之間一』と、斯う言つて居る、此の『至大至剛、以レ直養』といふ言葉が甚だ面白い、世間では能く元氣がないとか、元氣を出したとか云ふ、ことに依ると、大分酩酊して途中を大聲でも出して來ると、彼は元氣が宜いと云ひ、默つて居ると元氣が惡いと云ふが、併し「ポリス」に捕つて恐れ入るといふやうな元氣は、決して誇るべき者で無い、人と爭つて自分が間違つて居つても強情を張り通す、是が元氣が宜いと思つたら大間違である、それは即ち元氣を誤解したのである、また氣位が高いといふことも元氣であらう、福澤先生の頻りに唱へて居つた獨立自尊、此の自尊なども或る場合には元氣とも言へやう、自ら助け、自ら守り、自ら治

め、自ら活きる、是等と同樣な自尊なれば宜い、併し自治だの自活だのは、相當な働があるから宜いが、自尊といふことは誤解すると倨傲になる、或は不都合になる、總て惡德になつて、一寸道を通りかゝつても、此方は自尊だから己は逃げないと云つて、自働車などに突當つては頓だ間違が起る、斯るものは元氣ではなからうと思ふ、元氣といふものは然ういふもので無い、卽ち孟子の謂ゆる至大至剛、至つて大きく至つて强いもの、而して『以レ直養』、道理正しき卽ち至誠を以て養つて、それが何時までも繼續する、唯ちよつと一時酒飲み元氣で、昨日あつたけれども、今日は疲れて仕舞つたと言ふ、そんな元氣では駄目である、直しきを以て養つて餒うる所がなければ、『則塞ニ于天地之間ニ』是こそ本統の元氣であると思ふ。

此の元氣を完全に養ふたならば、今の學生が軟弱だ、淫靡だ、優柔だと言はれるやう

な謗りは、決して受ける氣遣はなからうと思ふ、併し今日の儘では、多少惡くすると元氣を損ずる場合がないとは言はれぬ、老人とても猶ほ然りであるが、特に最も任務の重い現在の青年は、此の元氣を完全に蓄はへるとを呉々も努めなくてはならぬ、程伊川の言葉であつたと思ふが、『哲人見レ機誠ニ之思ヲ、志士厲行致ニ之爲ヲ』との句がある、或は文字が間違つてるかも知れぬが、これは私の注意した言葉で、今も感心するが、彼の明治時代の先輩は『哲人見レ機誠ニ之思ヲ』といふことをした人である、大正時代の青年は何うしても『志士厲行致ニ之爲ヲ』といふ方であつて、總て巧みに之を纏むる時代であると思ふ、故に青年は十分元氣旺盛にして、聖代に報答するの心掛が緊要であると思ふ。

◎二宮尊德と西郷隆盛

井上侯が總大將を承つて采配を揮り、私や陸奥宗光、芳川顯正、それから明治五年に英國へ公債募集のため洋行するやうになつた、吉田清成などが專ら財政改革を行ふに腐心最中の明治四年頃のことであるが、或日の夕方、當時私の住居した神田猿樂町の茅屋へ、西鄉公が突然と私を訪ねて來られた、その頃西鄉さんは參議といふもので、廟堂では此上もない顯官である、私の如き官の低い大藏大丞ぐらゐの小身者を訪問せられるなど、既に非凡の人でなければ出來ぬことで、誠に恐れ入つたものであるが、その用談向は、相馬藩の興國安民法に就てゞあつた。

この興國安民法と申すは、二宮尊德先生が相馬藩に聘せられた時に案出して遺され、それが相馬藩繁昌の基になつたといふ、財政やら產業やらに就ての方策である、井上侯始め私等が、財政改革を行ふに當り、この二宮先生の遺された興國安民法をも廢止しや

うとの議があつた。
是を聽きつけた相馬藩では、藩の消長に關する由々しき一大事だといふので、富田久助、志賀直道の兩人を態々上京せしめ、兩人は西鄕參議に面接し、如何に財政改革を行はれるに當つても、同藩の興國安民法ばかりは御廢止にならぬやうにと、倶に賴み込んだものである、西鄕は其の賴みを容れられたのだが、大久保さんや大隈さんに話した所で取上げられさうにもなく、井上侯なんか話でもしたら、井上侯はあの通りの方ゆゑ、到底受付けて呉れさうに思はれず、頭からガミ〳〵跳付けられるに極つてるので、私を說きさへすれば或は廢止にならぬやうに運ぶだらうとでも思はれたものか、富田志賀の兩氏に對する一諾を重んじ、態々一小官たるに過ぎぬ私を茅屋に訪ねて來られたのであつた。

西郷公は私に向はれ、斯く〳〵爾かじか〳〵の次第故、折角の良法を廢絶さしてしまふのも惜いから、澁澤の取計ひで此の法の立ち行くやう、相馬藩の爲に盡力して呉れぬか、と言はれたので、私は西郷公に向ひ『そんなら貴公は二宮の興國安民法とは何んなものか御承知であるか』と御訊ねすると、ソレハ一向に承知せぬとのこと、如何なものかも知らずに之を廢絶せしめぬやうとの御依頼は、甚だ以て腑に落ちぬわけであるが、御存知なしとあらば致し方がない、私から御説明申し上げやうと、その頃既に私は興國安民法に就て充分取調べてあつたので、詳しく申し述べることにした。

二宮先生は相馬藩に招聘せらるゝや、先づ同藩の過去百八十年間に於ける詳細の歳入統計を作成し、この百八十年を六十宛に分けて天地人の三才とし、その中位の地に當る六十年間の平均歳入を同藩の平年歳入と見做し、更に又この百八十年を九十年宛に分け

て乾坤の二つとし、收入の少い方に當る坤の九十年間の平均歳入額を標準にして藩の歳出額を決定し、之により一切の藩費を支辨し、若し其年の歳入が幸にも坤の平均歳入豫算以上の自然增收となり、剩餘額を生じたる場合には、之を以て荒蕪地を開墾し、開墾して新に得たる新田畝は開墾の當事者に與へることにする法を定められたのである、之が相馬藩の謂ゆる興國安民法なるものであつた。

西鄕公は私が斯く詳細に二宮先生の興國安民法に就て說明する所を聞かれて、『そんならそれは量レ入以爲レ出の道にも適ひ誠に結構なことであるから、廢止せぬやうにしても可いでは無いか』とのことであつた、依て私は此所で平素自分の抱持する財政意見を言つて置くべき好機會だと思つたので、『如何にも仰せの通りである、二宮先生の遺された興國安民法を廢止せず、之を引續き實行すれば、それで相馬一藩は必ず立ち行くべく、

今後とも益〻繁昌するのであらうが、國家の爲に興國安民法を講ずるが相馬藩に於ける興國安民法の存廢を念とするよりも、更に一層の急務である、西郷參議に於かせられては、相馬一藩の興國安民法は大事であるによつて是非廢絶させぬやうにしたいが、國家の興國安民法は之を講ぜずに其儘に致し置いても差支無いとの御所存であるか、承りたい、苟も一國を雙肩に荷はれて國政料理の大任に當らるゝ參議の御身を以て、國家の小局部なる相馬一藩の興國安民法の爲には御奔走あらせらるゝが、一國の興國安民法を如何にすべきかに就ての御賢慮なきは、近頃以て其意を得ぬ次第、本末顚倒の甚しきものであると、切論いたすと、西郷公は之に對し、別に何とも言はれず、默々として茅屋を辭し還られてしまつた、兎に角、維新の豪傑のうちで、知らざるを知らずとして、毫も虛飾の無かつた人物は西郷公で、實に敬仰に堪へぬ次第である。

◎修養は理論ではない

修養は何所まで行らねばならぬかと云ふに、之は際限がないのである、けれども空理空論に走ることは最も注意せねばならぬ、修養は何も理論ではないので、實際に行ふべきことであるから、何所までも實際と密接の關係を保つて進まねばならぬ。

偖この實際と學理の調和といふことは、特に述べて置かねばならぬのである、要するに、理論と實際、學問と事業とが互に並行して發達せないと、國家が眞に興隆せぬのである、如何程一方が發達しても、他の一方が之に伴はなければ、其國は世界の列強間に伍することは出來ぬと思はれる、事實ばかりで滿足とは云はれず、又學理のみでは立つことが出來ないので、此の兩者がよく調和し密着する時が、卽ち國にすれば文明富强と

なり、人にすれば完全なる人格ある者となるのである。

右に對する例證は澤山にあるが、之を漢學に求めて見れば、孔孟の儒教は支那に於ては最も尊重されて、之を經學または實學と云つて、彼の詩人又は文章家が弄ぶ文學とは全く別物視してある、而して其れを最も能く研究し發達せしめたのが彼の支那宋末の朱子である、蓋し朱子は非常に博學で、且つ熱心に此學を說いたのである、所が、朱子の時分の支那の國運は如何であつたかと云ふに、丁度その頃は宋朝の末で、政事も頽廢し、兵力も微弱にして、少しも實學の効は無かつたのである、卽ち學問は非常に發達しても、政務は非常に混亂した、詰り學問と實際とが全く隔絕して居たのである、つまり本家本元の經學が宋朝に至りて大に振興したにも係はらず、之を採つて實際に用ゐなかつたのである。

然るに日本に於ては其の空理空文の死學であつた宋朝の儒教を利用した爲め、却つて實學の効驗を發揮したのである、之を善く用ゐたのは德川家康である、元龜天正の頃は日本を廿八天下と稱して、國內麻の如くに亂れて、諸侯皆武備にのみ心を盡して居つたのである、その中にて家康は大に達觀して、到底武のみを以て治國平天下の策とすべきで無いといふことを悟り、大に心を文事に注いで、支那に於ては死學空文であつた朱子の儒學を採つたのである、當初先づ藤原惺窩を聘し、次で林羅山を用ゐて、切りに學問を實際に應用した、卽ち理論と實際とを調和し接近せしめたのである、現に家康が遺訓の一として今日まで人口に膾炙する『人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し、急ぐべからず、不自由を常と思へば不足なく、心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし、堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思へ、勝つ事ばかり知りてまくる事を知らざれ

ば、害その身に至る、おのれを責めて人をせむるな、及ばざるは過ぎたるにまされり』に就て考へて見るに、皆經學中に求めたものである、多くは論語中の警句中より成立して居る、當時殺伐の人心を慰安して、よく三百年の太平を致した所以のものは、蓋し學問の活用、卽ち實際と理論とを調和して、極めて密接ならしめたるに由ることゝ思ふのである、而かも家康が此くまで朱子の儒學を採つて之を實際に應用したけれども、元祿享保の頃となつては、次第に種々の學派を生じ、空理を弄ぶやうになつて來て、有名なる儒者は多かつたけれども、之を實際と密着せしめたものは甚だ稀で、僅かに熊澤蕃山、野中兼山、新井白石、貝原益軒の數人に過ぎない、德川の末の微々として振はなくなつて來たのも、矢張り此の調和を失した結果であらうと思ふのである。

以上は往時の事例であるが、今日でも兩者の調和不調和が其の事物の盛衰を示して居

ることは、諸君のよく知られる所と思ふ、世界の二三等國に就て見ると明かである、又一等國中にも、現に兩者が其の並行を失はんとしつゝある國もあるやうに思はれる。

翻つて帝國は如何と言へば、未だ決して十分なる調和を得て居るといふことは出來ない、のみならず、動ともすれば離隔せんとする傾向さへ見える、之を思へば實に國家の將來が案じられるのである。

故に修養を主とする者は、大に爰に鑑みる所があつて、決して奇矯に趨らず、中庸を失せず、常に穩健なる志操を保持して進まれんことを衷心より希望して止まぬのである、換言すれは、今日の修養は、力行勤勉を主として智德の完全を得るのにある、即ち精神的方面に力を注ぐと共に、智識の發達に勉めねばならぬ、而して修養が、單に自分一個の爲のみでなく、一邑一郷、大にしては國運の興隆に貢獻するのでなければならぬ。

◎平生の心掛が大切

總じて世の中のことは心の儘にならぬが多い、獨り形の上に表はれて居る事物ばかりでなく、心に屬することも間々さういふことがある、例へば、一度斯うと心の中に堅く決心したことでも、何か不圖したことから俄に變ずる、人から勸められて遂に其の氣になると云つたやうな事もあるが、それが必ずしも惡意の誘惑でないまでも、心の遷轉から起ることで、斯の如きは意志の弱いのであると謂はねばなるまい、自ら決心して動かぬと覺悟して居ながら、人の言葉によりて變ずるが如きは、固より意志の鍛錬の出來て居るものではない、兎角平生の心掛が大切である、平素その意中に『斯うせよ』とか『斯うせねばならぬ』とか、事物に對する心掛が的確に決つて居るならば、如何に他人が巧

妙に言葉を操つても、浮とそれに乘せられるやうなことはない譯だ、故に何人も問題の起らぬ時に於て其の心掛を錬つて置き、而して事に會し物に觸れた時、それを順序よく進めるが肝要である。

然るに兎角人心には變態を生じ勝ちのもので、常時は『斯くあるべし』『斯くすべし』と堅く決心して居た者も、急轉して知らず〳〵に自ら自己の本心を誘惑し、平素の心事と全く別處にこれを誘ふやうな結果を齎らすが如きは、常時に於ける精神修養に缺くる所があり、意志の鍛錬が足らぬより生ずることである、斯の如きは隨分修養も積み鍛錬を經た者でも惑はされることのないとは言はれぬものだから、況んや社會的經驗の少い青年時代などには、いやが上に注意を怠つてはならぬ、若し平生自己の主義主張として居たことが、事に當つて變化せねばならぬやうなことがあるならば、宜しく再三再四熟

慮するが宜い、事を急激に決せず、愼重の態度を以て能く思ひ深く考へるならば、自ら心眼の開くものもありて、遂に自己本心の住家に立ち歸ることが出來る、此の自省熟考を怠るのは、意志の鍛錬に取つて最も大敵であることを忘れてはならぬ。

以上は自己が意志の鍛錬に關する理論でもあり、又しかく感じた所であるが、序を以て余が實驗談を此所に附加して置きたい、余は明治六年思ふ所ありて官を辭して以來、商工業といふものが自己の天職である、若し如何やうの變轉が起つて來ても、政治界には斷じて再び携はらぬと決心した、元來政治と實業とは互に交渉錯綜せるものであるから、達識非凡の人であつたら、此の二途に立つて其の中間を巧妙に歩めば頗る面白いのであるが、余の如き凡人が左樣の仕方に出るときは、或はその歩も誤つて失敗に終ることがないとも限らない、故に余は初めから自己の力量の及ばぬ所として政治界を斷念し

專ら實業界に身を投じようと覺悟した譯であつた、而して當時余が此の決心を斷行するに方つても、自己の考案に待つ所の多かつたことは勿論のことで、時には知己朋友よりの助言勸告も或る程度まではこれを斥け、斷々乎として一意實業界に向つて猛進を企てた、しかるに最初の決心が其れほど雄々しいものであつたにも拘はらず、さて實地に進行して見ると中々思惑通りには行かないもので、爾來四十餘年間、屢々初一念を動されようとしては危く蹈み止り、漸くにして今日あるを得た譯である、今から回顧すれば最初の決心當時に想像したよりも、此間の苦心と變化とは遙かに多かつたと思はれる。

若し余の意志が薄弱であつて、夫等幾多の變化や誘惑に遭遇した場合に浮々と一歩を蹈み誤つたならば、今日或は取返しのつかぬ結果に到着して居たかも知れぬ、例へば、過去四十年間に起つた小變動の中、其の東すべきを西するやうな事があつたならば、事

件の大小は別として、初一念は此所に挫折する事になる、假りに一つでも挫折されて方向が錯綜することになれば、最早自己の決心は傷けられた事になるので、それから先は五十歩百歩、もう何をしても構ふものかと云ふ氣になるのが人情だから、止め度がなくなつて仕舞ふ、彼の大堤も蟻穴より崩るゝの喩の如く、左樣なつては右に行くものも中途から引返して左へ行くやうなことになり、遂には一生を破壞了はねばならぬ、しかるに余は幸にも左樣な場合に處する每に熟慮考察し、危く心が動きかけたことがあつても、中途から取返して本心に立ち戻つたので、四十餘年間先づ無事に過して來ることを得た、これに由つてこれを觀るに、意志の鍛錬の六ケ敷きことは今更驚嘆の外はないが、併し夫等の經驗から修得した敎訓の價値も、また決して少いものでは無いと思ふ、而して得た所の敎訓を約言すれば、大略次の如きものがある、即ち一些事の微に至るま

でもこれを閑却するは宜しくない、自己の意志に反することなら事の細大を問ふまでもなく、斷然之を跳付けて了はねば可かない、最初は些細の事と侮つてやつた事が、遂には其れが原因となつて總崩れとなるやうな結果を生み出すものであるから、何事に對しても能く考へて行らねばならぬ。

◎須らく其の原因を究むべし

乃木大將の殉死に就て世間の論ずる所を觀るに、或説の如きは、殉死に就ては多少非難なきに非ざれど、乃木大將にして始めて可なり、他人之に倣ふべきに非ずと論ずるもあり、又は絶對に感歎すべき武士的行爲にして、實に世の中を聳動せしめたる天晴の最期とて、限りなき崇敬の心を以て論評するもありて、殆んど當時の新聞雜誌が其事に就

て塡められた程であるから、大將の行爲は現社會に大なる影響を與へたと言ひ得るだらうと思ふ。

私の觀る所も略ぼ後者と同樣なれども、乃木大將が末期に於ける敎訓が尊いといふよりは、寧ろ生前の行爲こそ眞に崇敬すべきものありと思ふ、換言すれば、大正元年九月十三日までの乃木大將の行爲が純潔で優秀であるから、其の一死が靑天の霹靂の如く世間に嚴しい感想を與へたのである、大將の殉死が如何なる動機から起つたに致せ、唯その一死だけが斯の如く世間に劇しい影響を與へたのでは無からう、故に私は前に述べた點に就て少しく意見を敷衍して見ようと思ふ、但し私は乃木大將とは親しみが厚くなかつたから、其の性行を審かに知らぬけれども、殉死後各方面の評論から觀察すると、實に忠誠無二の人である、廉潔の人である、其の一心は唯奉公の念に滿たされた人であ

る、而して事に處して常に精神を是に集注して苟くもせぬ人であるといふことは、總ての行爲に於て察知し得らるゝのである。

殊に軍務的行動に就ては、何物をも犧牲にして君の爲め國の爲めに盡すといふ精神に富まれたことは、現に二人の令息が日露戰役にて前後討死された時にも、將軍は君國の爲に堅忍其の情を撓めて、涙一滴も人に見せなかつた一事に徵しても明かである。

全體將軍は青年の頃より、軍人としては事毎に長上の命令に服從して、水火の中をも辭せぬといふ堅實なる服從氣性を持つて居られたと同時に、事の是非善惡に就ての議論には、些かも權勢に屈せぬといふ凛乎たる意考を持つて居られたやうに見受けられる、それかあらぬか、或る場合に先輩の意見に忤つて休職になつた抔といふことは、蓋し其の鞏固の意志に原因せしものと想像される、左らば至つて褊狹な過激な唯感情的の人か

と思ふと、其間に靄然たる君子の風ありて、或は諧謔を以て、或は渾乎たる言動を以て、人を懐けられ、自己が率ゐた兵隊等に對しても其れこそ心から其人の痛苦を想察し、又その戰死に就ては、故郷の父母妻子に對して深く哀情を添へて居られた。昔時軍人の美談として世に傳へられて居る吳起が、其の部下の兵士の創の膿を吸うて癒してやつた時に、其の武士は大に喜びて、この創が癒えたらば將軍の爲に戰場で命を棄てねばならぬと云つて感じた、すると其母の言ふには、人情左もあるべき事であるが、汝の兄も其通りにして終に討死したとて歎いたといふ話がある、吳起が兵士の膿を吸ふたのは衷心から出たのか、或は一の術數でありはせぬかと、其の母は疑うて歎いたのではあるまいかと思ふ、然るに乃木將軍に至つては、全く天眞爛漫たる衷情から兵士を犒らはれたのである、單に軍隊に居られる時のみ然るに非ずして、學習院に院長として居られた時にも、

掬するばかりの情愛が總ての方面に現はれて居る、左らば其の平生は如何にやといふと、獨り武ばかりを誇りとする人に非ずして、文雅にも富まれて居る、如何に忠誠の人でも唯武骨一片で、花を見ても面白くない月を見ても感じもないといふ人は困る、『強いばかりが武夫か』といふことは物の本にもあり、彼の薩摩守忠度が、討死の際に和歌の詠艸を懐中せられたとか、或は八幡太郎義家が、勿來關の詠歌の如き一の美談としてある、昔時の武士が武勇と文雅とを兼ね備へたのは、實に奥床しい感がする、然るに乃木將軍は詩歌の道にも長けて、而かも高尙な意味を平易の言葉で述べることが誠に巧みであつた、彼の二百三高地に於ける絕句の如き、或は又故鄕に歸つて故老に會ふのが心苦しいといふ詩の如き、又は辭世の歌の如き、孰れも眞情流露、少しも巧みを弄せず能く滑かに詠まれて居る。

斯の如く奉公の念に強い所から。不幸にも先帝の崩御に際して、最早此世に生き甲斐がないと思はれたのであらう、固より將來の軍事に就ても、學習院の事務に就ても、また當時英吉利の皇族に對する接伴のことも、種々關心の事はありしならむも、併し輕重之に代へ難いといふ所から、忍び難きを忍びて殉死を決して、さてこそ其事が發露したればこそ、將軍の心事が世間に顯はれて、實に世界を聳動したのである、故に私は思ふ、唯その一命を棄てたのが偉いのでは無くして、六十餘歲までの總ての行動、總ての思想が偉かつたといふことを頌讚せねば爲らぬ。

兎角世の中の青年は、人の結末だけを見て之を欽羨し、其の結末を得る原因が何れほどであつたかと云ふことに見到らぬ弊が多くてならぬ、或人は榮達したとか、或人は富を得たとか云つて羨望するけれども、其の榮達若しくは其の富を得るまでの勤勉は容易

ならぬ、智識は勿論、力行とか忍耐とか、常人の及ばざる刻苦經營の結果であるに相違ない、其の智識其の力行、其の忍耐といふものに想ひ到らないで、只その結果だけを見て之を羨望するのは甚だ謂れないことである、乃木大將に對するも、唯その壯烈の一死のみを感歎して、其の人格と操行とに想到せぬのは、恰かも人の富貴榮達を見て、徒らに其の結果を羨望すると同樣になりはせぬか、故に私は將軍に對して、殉死其物を輕視するといふ意味ではないけれども、斯の如く天下を感動せしめたる所以のものは、壯烈無比なる殉死にありと謂はんよりは、寧ろ將軍の平生の心事、平生の行狀が之をして然らしめたものなりと解釋するのである。

◎東照公の修養

東照公に驚くべきは、神道佛教儒教等に大層力を入れられたことである。之に向つて種々の調査をなされて、其の隆興を計つたことは容易でない、是れも歴史家に相當の批評もありませうが、私は特に文政を修められたについて深く敬服する、佛教には梵舜といふ人がありますが、之は餘り立派な學者では無かつた爲に、東照公も感心なさらぬで後に南光坊天海によつて佛教をお取調べになり、儒教では藤原惺窩を第一に聘し、尋いで其の弟子の林道春を御儒家として立派に其家を立てた、且つ此の儒教を尊んだことは頗る重かつたやうであつた、殊に東照公は論語中庸をよくお讀みなすつたことは歴史に明記してありますからして、諸君も御記憶でありませうが、神君の遺訓と稱して平假名交りの文章がある、卽ち『人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し、急ぐべからず………云々』、私は斯樣に能く覺えて居ります、此の遺訓は全く論語から出て居ります、東

照公が論語をよくお讀みなすつた證據であります、『士不可以不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎。』これは曾子といふ人の語で、論語の泰伯篇にあります、『人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し』と全く同意味であります、また末段の『及ばざるは過ぎたるよりまされり』は、孔子の言から出たのです、而して孔子は『過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し』と言ふたを、公は『勝れり』と強くしたのです、是等の批評はこれだけで止めますが、兎に角この御遺訓が論語より出たといふことは、諸君にも明瞭にお解りでありませう、その他にも此の道德については餘程お心を用ゐられたものと見える、元龜天正の頃はあの通り亂世が打續いて、世の中に文學趣味などは殆んど無くなり、仁義道德の何者か分らぬといふ時に、誰が申上げたともなく、夙く既に文學を盛にしなければならぬといふことに就て御心を勞され、而かもそれが根

本的文學であつて、切に仁義道徳を重んずる主義を以て全然朱子學を用ゐられたやうに思ひます、爾來追々と經學にも各派が生じて參りましたが、林家では徹頭徹尾朱子學を主として居る、東照公の是等の御用意は如何なる御手際であるか、私は敬服に餘りありといふ外ない、更に又注目すべきは佛教であります、佛教に就ても餘程御注意が深く御穿鑿が届いたやうであります、初め三河の大樹寺に歸依して、大樹寺の僧侶と御親交があつたやうであります、而して大樹寺は淨土宗であります、尋いで芝の增上寺の住職をも召され、駿河にお移りになつてからは金地院の崇傳承兌抔を御用になり、後には東叡山を開いたる南光坊天海卽ち慈眼大師號を受けた人である、此の天海は實に僧侶中の英雄である、英雄と言うては少し形容に過ぎるけれども、僧侶中の傑出した人であつた、殊に精力絶倫で、而かも百二十六まで生きたといふ人でありますから、大隈侯の豫定よ

り一年餘計に生存した、東照公は深く此天海に御歸依になつて、屢次その說をお聽きなされたやうに見受けられます、此頃も南光坊天海の傳記を調べつゝ居りますが、駿河に於て公は數次その法談をお聽きなされた、長い年月の間にはどれほどであつたか分明ならぬが、天海の傳記に書いてありました所では、或年の九十日の間に六七十回の法談があつたと云うてあります、縱ひ御隱居であつても、江戶から始終文書が往復する、京都からの往復も同樣であらうから、中々閑散で能樂とか茶事三昧に日を暮されたのでは無からう、而して寸暇あれば其間に法談に御出座なすつたのであらうと思ひます、德川實記には詳しく書いてありませぬが、南光坊天海が常に顧問となつて色々の御話を申上げたといふことである。

◎誤解されたる修養說を駁す

修養といふことに就て、私は或者より攻擊を受けたことがある、其說は大體二つの意味に分れて居たのである、其の一つは、修養は人の性の天眞爛漫を傷けるから宜くないと言ふので、他の一つは、修養は人を卑屈にすると言ふのであつた、依つて是等の異見に對して答へて置いたことを左に述べて見ようと思ふのである。

先づ修養は、人の本然の性の發達を阻害するから宜くないといふは、修養と修飾とを取り違へて考へて居るものと思ふ、修養とは身を修め德を養ふといふことにて、練習も研究も克己も忍耐も都て意味するもので、人が次第に聖人や君子の境涯に近づくやうに力めるといふことで、それが爲に人性の自然を矯めるといふことは無いのである、つま

り人は十分に修養したならば、一日々々と過を去り善に遷りて聖人に近づくのである、若しも修養した爲に、天眞爛漫を傷けると言ふならば、聖人君子は完全に發達した者でないといふことになる、又修養の爲に僞君子となり、卑屈に陷るならば、其の修養は誤れる修養であつて、吾々の常に言ふ修養ではないと思ふ、人は天眞爛漫が善いといふことは私も最も贊成する所であるが、人の七情卽ち喜怒哀樂愛惡慾の發動が、いつ如何なる場合にも差支ないとは言はれぬ、聖人君子も發して節に中るのである、故に修養は人の心を卑屈にし天眞を害するものと見るは大なる誤りであると斷言するのである。

修養は人を卑屈にすると謂は、禮節敬虔などを無視するより來る妄說と思ふ、凡そ孝悌忠信仁義道德は日常の修養から得らるゝので、決して愚昧卑屈で其の域に達するものではない、大學の致知格物も、王陽明の致良知も、矢張り修養である、修養は土人形を

造るやうなものではない、反つて己の良知を增し、己れの靈光を發揚するのである、修養を積めば積むほど、其人は事に當り物に接して善惡が明瞭になつて來るから、取捨去就に際して惑はず、而かも其の裁決が流るゝ如くなつて來るのである、故に修養が人を卑屈愚昧にすると言ふは大なる誤解で、極言すれば、修養は人の智を增すに於て必要だと云ふことになるのである、是を以て修養は智識を輕んぜよといふのではない、唯今日の教育は、餘りに智を得るのみに趨つて、精神を練磨することに乏しいから、それを補ふための修養である、修養と修學を相容れぬ如くに思ふのは大なる誤りである。

蓋し修養といふことは廣い意味であつて、精神も智識も身體も行狀も向上するやうに練磨することで、青年も老人も等しく修めねばならぬ、斯くて息むことなければ、遂には聖人の域にも達することが出來るのである。

以上は私が二つの反對說卽ち修養無用論者に對して反駁したる大要であるが、青年諸氏も亦この考で大に修養せられんことを切望するのである。

◎權威ある人格養成法

現代青年に取つて最も切實に必要を感じつつあるものは人格の修養である、維新以前までは、社會に道德的の敎育が比較的盛んな狀態であつたが、西洋文化の輸入するに連れて思想界に少からざる變革を來し、今日の有樣では殆ど道德は混沌時代となつた、卽ち儒敎は古いとして退けられたから、現時の青年には之が十分咀嚼されて居らず、というて耶蘇敎が一般の道德律になつて居る譯では尙更なし、明治時代の新道德が別に成立したのでもないから、思想界は全くの動搖期で、國民は孰れに歸嚮してよいか、殆んど

判断にさへ苦しんで居る位である、從つて一般青年の間に人格の修養といふとは幾ど閑却されて居るかの感なきを得ないが、これは實に憂ふべき趨向である、世界列強國が孰れも宗教を有して道德律の樹立されて居るのに比し、獨り我國のみが此の有樣では、大國民として甚だ恥かしい次第ではないか、試みに社會の現象を見よ、人は往々にして利己主義の極端に馳せ、利の爲には何事も忍んで爲すの傾があり、今では國家を富強にせんとするよりも、寧ろ自己を富裕にせんとする方が主となつて居る、富むことも固より大切なことで、何も好んで簞食瓢飮陋巷に在つて其の樂を改めぬといふことを最上策とするには及ばない、孔子が『賢なる哉回や』と、顏淵の淸貧に安んじて居るのを褒められた言葉は、要するに『不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し』といふ言葉の裏面を曰はれたまでゞ、富は必ずしも惡いと貶めたものではない、併しながら唯一

身さへ富めば足るとして、更に國家社會を眼中に置かぬといふは慨すべき極である、說は富の講釋に入つたが、何にせよ社會人心の歸向が左樣いふ風になつたのは、概して社會一般人士の間に人格の修養が缺けて居るからである、國民の歸依すべき道德律が確立して居り、人はこれに信仰を持つて社會に立つといふ有樣であるならば、人格は自ら養成されるから、社會は滔々として我利のみ是れ圖るといふやうなことはない譯である、故に余は青年に向つて只管人格を修養せんことを勸める、青年たるものは眞摯にして率直、しかも精氣内に溢れ活力外に揚る底のもので、謂ゆる威武も屈する能はざる程の人格を養成し、他日自己を富裕にすると共に、國家の富强をも謀ることを努めねばならぬ、信仰の一定せられざる社會に處する青年は、危險が甚だしいだけに自己もそれだけに自重してやらねばならぬのである。

さて、人格の修養をする方法工夫は種々あらう、或は佛教に信仰を求めるも宜しからう、或は「クリスト」教に信念を得るも一方法であらうが、余は青年時代から儒道に志し、而して孔孟の教は余が一生を貫いての指導者であつたゞけに、矢張り忠信孝悌の道を重んずることを以て大なる權威ある人格養成法だと信じて居る、これを要するに忠信孝悌の道を重んずるといふことは全く仁を爲すの基で、處世上一日も缺くべからざる要件である、既に忠信孝悌の道に根本的修養を心掛けた以上は、更に進んで智能啓發の工夫をしなければならぬ、智能の啓發が不十分であると、兎角世に處して用を成すに方り完全なることは期し難い、從つて忠信孝悌の道を圓滿に成就するといふことも出來なくなつて來る、如何となれば、智能が完全なる發達を遂げて居ればこそ、物に應じ事に接して是非の判別が出來、利用厚生の道も立つので、茲に始めて根本的の道義觀念と一致し、處世上何

等の誤謬も仕損じもなく、能く成功の人として終局を全うすることを得るからである、人生終局の目的たる成功に對しても、近時多種樣に之を論ずる人があつて、目的を達するに於ては手段を擇ばずなぞと、成功といふ意義を誤解し、何をしても富を積み地位を得られさへすれば、其れが成功であると心得て居る者もあるが、余は其樣な說に左袒することが出來ない、高尙なる人格を以て正義正道を行ひ、然る後に得た所の富、地位でなければ、完全な成功とは謂はれないのである。

◎商業に國境なし

明治三十六年桑港に於て學童問題といふものが突發した、それから後も次第に日米間の國交が薄くなるやうな傾向を生じたといふのは、日本人が薄くするのでは無くし

て、亞米利加の或る方面の人が、段々に日本を嫌ふといふ有樣を生じた、偖さういふ有樣を生ずると、恰かも明治三十五年に桑港の金門公園に於て見た所の『日本人泳ぐべからず』の事柄が段々盛んに進んで來るやうになつた、亞米利加に對して特殊の印象を有つてる私、殊に實業界の一人として、又日本全體の實業界に對して深く心神を勞して居る身であるから、國交上に大なる憂を抱いた、其後桑港に居る日本人間に在米日本人會なるものを組織した、其の會長の手島謹爾氏が、特に渡邊金藏といふ人を日本に送られて、私に請求せらるゝには、「カリフォルニヤ」州に於て亞米利加人が兎角日本人を嫌ふといふ感情を改善せしむる爲に、在米日本人會を企てたのである、就ては本國(日本)に於ても其の意味を理解して、大に贊同して呉れるやうにと云ふことであつた、私は其の企圖の至極機宜に適するものと思つて、我々も充分に助力するから、在米諸君

も大に力めるやうにしたら宜からうと言つて、渡邊金藏氏に私が明治三十五年に金門公園に於て感ぜしことを話して、會長たる手島氏を初め、其他の會員にも能く注意して呉れといふことを傳言した、それが明治四十一年であつたと思ふ。

その歳の秋、亞米利加から太平洋沿岸の商業會議所の議員が、多數日本へ來遊することになつた、それは我が東京商業會議所及び各地の商業會議所が同じ位置なるを以て、太平洋沿岸の商業會議所の諸君に、團體を組んで日本に旅行して呉れといふ事を勸誘したに因るものであるが、一は日米兩國間の國交親善に努むる爲め、總ての誤解を除却したいといふ意味を以て成立つたものである、其時に日本に來遊せられたのは、桑港に於てはエフ、ダブリユー、ドールマン、「シヤトル」ではジエー、デイ、ローマン或は「ポートランド」のオー、エム、クラーク等の人々で、私は種々の會合に於て是等の諸君に會談し

て、日米の關係に就て從來の沿革を詳述し、諸君の力で誤解を解くやうにして戴きたいと希望し、また一方には日本から米國に移住してる人々に就ては、歐米の習慣に慣れぬ爲に公德が修まらぬとか、或は風采が鄙劣だとか、或は同化しないとか云ふやうな缺點があれば、其の缺點は相共に矯正して、勉めて直させるやうにして、米國人に嫌はれぬ所の人間たらしむることを心掛けるのが肝要である、今日の場合、人種とか宗教とかの相違から、日本人を嫌ふといふやうなことは、文明なる亞米利加人としてよもあるまいと思ふ、若し之れありとすれば、それは亞米利加人の誤謬である、のみならず、亞米利加の當初の趣意に悖る譯である、我が日本を世界に紹介して呉れたのは亞米利加である、日本は其れを德として今日まで國交の親善を勉めて居るのに、其の亞米利加が人種的の僻見、宗教差異の偏頗心から、日本人を嫌つて差別的待遇をすると云ふのは、亞米

利加としてなすべきことで無い、果して然らば亞米利加は、初めは正義にして後には暴戻と曰はねばならぬ、といふことを懇々と述べたに付て、當時來遊せられた商業會議所の諸君も、誠に道理だと言うて深く喜んで呉れた。

君子は愼みて以て禍を辟け、篤くして以て掩はれず、恭しくして以て恥に遠ざかる。　　禮記

之を求むるに道あり、之を得るに命あり、是れ求むとも得るに益なし、外に在る者を求むればなり。　　孟子

算盤と權利

◎仁に當つては師に讓らず

世人は動もすれば、論語主義には權利思想が缺けて居る、權利思想なき者は文明國の完全なる教とするに足らぬと論ずるものが有るやうだが、是は論ずる人の誤想謬見と謂はねばならぬ、成る程、孔子教を表面から觀察したなら或は權利思想に缺けて居るやうに見えるかも知れぬ、基督教を精髓とせる泰西思想に比較すれば、必ず權利思想の觀念が薄弱であるが如く思はれるであらう、併しながら余は此の如き言をなす人は、未だ以て眞に孔子を解した者ではないと思ふ。

基督や釋迦は始めより宗教家として世に立つた人であるに反し、孔子は宗教を以て世に臨んだ人でないやうに思はれる、基督や釋迦とは全然その成立を異にしたものである、殊に孔子の在世時代に於ける支那の風習は、何でも義務を先にし、權利を後にする傾向を帶びた時であつた、斯の如き空氣の中に成長し來つた孔子を以て、二千年後の今日、全く思想を異にした基督に比するは、既に比較すべからざるものを比較するのであるから、此の議論は最初より其の根本を誤つたものと謂ふべく、兩者に相違を生ずることは固より當然の結果たらざるを得ないのである、然らば孔子教には全然權利思想を缺いて居るであらうか、以下少しく余が所見を披瀝して世の蒙を啓きたいと思ふ。

論語主義は己を律する教旨であつて、人は斯くあれ、斯くありたいといふやうに、寧ろ消極的に人道を説いたものである、而して此の主義を押し擴めて行けば、遂には天下

に立てるやうにはなるが、孔子の眞意を忖度すれば、初から宗教的に人を教へる爲に説を立てようとは考へてなかつたらしいけれども、孔子には一切教育の觀念が無かつたとは言はれぬ、若し孔子をして政柄を握らしめたならば、善政を施き國を富まし、民を安んじ、王道を十分に押し廣める意志であつたらう、換言すれば、初めは一の經世家であつた、其の經世家として世に立つ間に、門人から種々雜多のことを問はれ、それに就て一々答を與へた、門人と謂つても各種の方面に關係を持つた人の集合であるから、其の質問も自ら多樣多岐に亙り、政を問はれ、忠孝を問はれ、文學、禮樂を問はれた、此の問答を集めたものが軈て論語廿篇とはなつたのである、而して詩經を調べ、書經を註し易經を集め、春秋を作りたる抔は晩年のことで、福地櫻痴居士が曰へる如く、六十八歳より以後の五年間を、纔に布教的に學事に心を用ゐたらしく見える、されば孔子は權利

思想の缺けたる社會に人となり、而も他人を導く宗教家として世に立つた譯でないから其の教の上に權利思想が劃然として居らぬは已むを得ないのである。
然るに基督は之に反し、全く權利思想に充實された教を立てた、元來猶太、埃及等の國風として豫言者といふやうな者の言を信じ、從つて其種の人も多いのであつたが、基督の祖先たるアブラハムより基督に至るまで殆ど二千年を經て居る間に、モーゼとかヨハネとかいふ幾多の豫言者が出て、或は聖王が出て世を治めるとか、或は王樣同樣に世を率ゐて立つ所の神が出るとか言ひ傳へて居た、此時に方つて基督は生れたのであつたが、國王は豫言者の言を信じ、自己に代つて世を統ぶる者に出られては大變だと云ふ所から、近所の子供を皆殺させたけれども、基督は母マリヤに連れられて他所へ行つた爲に此難を免れた、耶蘇教は實に斯の如き誤夢想的の時代に生れた宗教であるから、從つ

て其の教旨が命令的で又權利思想も強いのである。

併し基督教に說く所の『愛』と論語に教ふる所の『仁』とは殆んど一致して居ると思はれるが、其所にも自動的と他動的との差別はある、例へば、耶蘇教の方では『己の欲する所を人に施せ』と教へてあるが、孔子は『己の欲せざる所を人に施す勿れ』と反對に說いて居るから、一見義務のみにて權利觀念が無いやうである、併し兩極は一致すといへる言の如く、此の二者も終局の目的は遂に一致するものであらうと考へる。

而して余は、宗教として將た經文としては耶蘇の教がよいのであらうが、人間の守る道としては孔子の教がよいと思ふ、こは或は余が一家言たるの嫌があるかも知れぬが、殊に孔子に對して信頼の程度を高めさせる所は、奇蹟が一つもないといふ點である、基督にせよ、釋迦にせよ、奇蹟が澤山にある、耶蘇は磔せられた後三日にして蘇生したと

いふが如きは明かに奇蹟ではないか、尤も優れた人のことであるから、必ず左樣いふことは無いと斷言も出來ず、夫等は凡智の測り知らざる所であると謂はねばなるまいが、併し之を信ずれば迷信に陷りはすまいか、斯る事柄を一々事實と認めることになると、智は全く晦まされて、一點の水が藥品以上の效を奏し、焙烙の上からの灸が利目あるといふことも事實として認めなくては爲らなくなるから、其の因つて來る所の弊は甚しいものである、日本も文明國だと謂はれて居ながら、未だ白衣の寒詣や、不動の豆撒が依然として消滅せぬのは、迷信の國だといふ譏を受けても仕方がない、然るに孔子に此の忌むべき一條の皆無なのは余の最も深く信ずる所以で、また是より眞の信仰は生ずるであらうと思ふ。

論語にも明かに權利思想の含まれて居ることは、孔子が『仁に當つては師に讓らず』

といつた一句、これを證して餘りあることゝ思ふ、道理正しき所に向うては飽くまでも自己の主張を通してよい、師は尊敬すべき人であるが、仁に對しては其の師にすら讓らなくもよいとの一語中には、權利觀念が躍如として居るではないか、獨り此の一句ばかりでなく、廣く論語の各章を涉獵すれば、これに類した言葉は尙ほ澤山に見出すことが出來るのである。

◎金門公園の掛札

私が初めて歐羅巴へ旅行したのは舊幕府時代であつた、慶應三年に佛蘭西に行つて、約一年も居り、其他の國々も巡廻して、一と當りの事情は知るを得たけれども、不幸にして其時には亞米利加に旅行をしなかつたが、明治三十五年(西曆一千九百二年)に初

めて亞米利加へ行つた、曾て其の土地は踏まぬでも、十四五歳の時から亞米利加なるものを知り、其の外交の關係に就て特に注目し、且つ從來の國交が甚だ適順に進んで居たので、亞米利加といふ音は、常に自分の耳を樂しましめるものであつた、而して其の土地を初めて見たのであるから、事々物々實に私の心を喜ばして、幾んど我が故鄕へでも歸つたやうな感じを持つた、最初に桑港へ上陸して樣々なる事物に接觸して、深く興味を持つて居つた、所が、唯一つ大に私の心を刺戟したのは、金門公園の水泳場へ行つた時に、其の水泳場の掛札に『日本人泳ぐべからず』といふことが書いてあつた、これは私の如き亞米利加に對して愉快なる感じを持つて居る身には、特に奇異の思ひをなさしめた、當時桑港に居つた日本の領事上野季三郎といふ人に、何故かゝる掛札があるかと問ふたら、それは亞米加加に來て居る移住民の青年等が、公園の水泳場に行つて、

亞米利加の婦人が泳いで居るのを、潛行して足を引張る、さういふ惡戯が多い爲に、右の掛札を掛けられたのである、と說明した、其時に私は大に驚いて、其れは日本の靑年の不作法が原因をなして居る、併しながら此く些細なことでも、兎に角差別的の待遇を受けるといふことは、日本として心苦しい話だ、斯ういふ事が段々增長して行くと、終には兩國の間に如何なる憂ふべき事が生ずるかも知れぬ、さなきだに東西洋の人種間には、種族の關係、宗敎の關係といふものは、斯の如く親んで居るとも、未だ全く融和したとは言へないやうに思ふのに、さういふ事が現はれたのは眞に憂ふべきことである、領事に職を奉ずる人は、充分御注意をして欲しいものだと言つて別れたが、之が三十五年の六月の初めであつた、尋で市俄古、紐育、「ボストン」、費府を經て華盛頓に往つた、こゝで時の大統頭ルーズヴェルト氏に謁見することが出來た、其他にもハリマン、ロッ

クフエラー、スチルマン抔の亞米利加で有名なる人々にも面會した、初めルーズヴエルト氏に面會した時に、ル氏は頻りに日本の軍隊と美術とに就て賞讃の辭を與へられた、日本の兵は勇敢にして軍略に富み、且つ仁愛の情に深く、節制ありて極めて廉潔である、それは北淸事件の時に、亞米利加の軍隊が行動を共にしたに依りて、日本の軍隊の善良なるを見て敬服したといふことであつた、また美術も歐米人が如何に羨望しても、企て及ばざる一種の妙味を有つて居ると言つて賞めた、私は此時に、自分は銀行家であつて美術家ではない、又軍人でないから軍事も知らない、然るに閣下は私に向つて軍事と美術だけをお賞め下すつたが、次回に私が閣下にお目に掛る時には、日本の商工業に對して御賞讃のお言葉のあるやうに、不肖ながら私は國民を率ゐて努める積りであると答へた、之に對してル氏が言ふには、私は日本の商工業が劣つて居るといふ意味を以て、他

を褒めた譯ではなかつた、詰り軍事と美術とが先に自分の眼についたから、日本の有力なる人に向つては、先づ日本の長所を述べるのが宜いと思つたのである、決して日本の商工業を輕蔑したのでは無い、私の言葉が惡るかつたのだから、惡い感じを持つて下さらぬやうにして欲しい、イヤ決して惡い感じは持ちませぬ、閣下が日本の長所を褒めて下さつたのは有難いけれども、私は商工業が第三の日本の長所たるやうになりたいと、頻りに苦心して居るのであると言つて、胸襟を披いて談話したことがある、其後亞米利加の各地に於て種々の人々にも會ひ、いろ〳〵の物にも接觸して、誠に愉快なる旅行を了つて歸朝したのである。

◎唯王道あるのみ

惟ふに社會問題とか勞働問題等の如きは、單に法律の力ばかりを以て解決されるものではない、例へば一家族内にても、父子兄弟眷族に至るまで各々權利義務を主張して、一も二も法律の裁斷を仰がんとすれば、人情は自ら險惡となり、障壁は其の間に築かれて、事毎に角突き合ひの沙汰のみを演じ、一家の和合團欒は殆んど望まれぬ事となるであらう、余は富豪と貧民との關係も、亦それと等しきものがあらうと思ふ、彼の資本家と勞働者との間は、從來家族的の關係を以て成立し來つたものであつたが、俄に法を制定して是のみを以て取締らうとするやうにしたのは、一應尤もなる思ひ立ちではあらうけれども、之が實施の結果、果して當局の理想通りに行くであらうか、多年の關係に因つて資本家と勞働者との間に、折角結ばれた所の言ふに言はれぬ一種の情愛も、法を設けて兩者の權利義務を明かに主張するやうになれば、勢ひ疎隔さるゝに至りはすまいか、

それでは爲政者側が骨折つた甲斐もなく、又目的にも反する次第であらうから、此所は一番深く研究しなければならぬ所であらうと思ふ。

試みに余の希望を述ぶれば、法の制定は固より可いが、法が制定されて居るからと云つて、一も二もなく其れに裁斷を仰ぐといふことは、成るべくせぬやうに仕たい、若しそれ富豪も貧民も王道を以て立ち、王道は卽ち人間行爲の定規であるといふ考を以て世に處するならば、百の法文、千の規則あるよりも遙に勝つた事と思ふ、換言すれば、資本家は王道を以て勞働者に對し、勞働者も亦王道を以て資本家に對し、其の關係しつゝある事業の利害得失は卽ち兩者に共通なる所以を悟り、相互に同情を以て始終するの心掛ありてこそ、始めて眞の調和を得らるゝのである、果して兩者が斯うなつて了へば、權利義務の觀念の如きは、徒らに兩者の感情を疎隔せしむる外、殆んど何等の効果なき

ものと言うて宜からう、余が往年歐米漫遊の際實見した獨逸の「クルップ」會社の如き、又米國「ボストン」附近の「ウォルサム」時計會社の如き、其の組織が極めて家族的であつて、兩者の間に和氣靄然たるを見て頗る歎稱を禁じ得なかつた、これぞ余が謂ゆる王道の圓熟したるもので、斯うなれば法の制定をして、幸に空文に終らしむるのである、果して此の如くなるを得ば、勞働問題も何等意に介するに足らぬではないか。

然るに社會には是等の點に深い注意も拂はず、濫りに貧富の懸隔を強制的に引直さんと希ふ者がないでもない、けれども貧富の懸隔は其の程度に於てこそ相違はあれ、何時の世、如何なる時代にも必ず存在しないといふ譯には行かぬものである、勿論國民の全部が悉く富豪になることは望ましいことではあるが、人に賢不肖の別、能不能の差があつて、誰も彼も一樣に富まんとするが如きは望むべからざる處、從つて富の分配平

均などとは思ひも寄らぬ空想である、要するに、富むものがあるから貧者が出るといふやうな論旨の下に、世人が擧つて富者を排擠するならば、如何にして富國強兵の實を擧ぐることが出來やうぞ、個人の富は即ち國家の富である、個人が富まんと欲するに非ずして、如何でか國家の富を得べき、國家を富まし自己も榮達せんと欲すればこそ、人々が、日夜勉勵するのである、其の結果として貧富の懸隔を生ずるものとすれば、そは自然の成行であつて、人間社會に免るべからざる約束と見て諦めるより外仕方がない、とは云へ、常に其の間の關係を圓滿ならしめ、兩者の調和を圖ることに意を用ふることは、識者の一日も缺くべからざる覺悟である、之を自然の成行き人間社會の約束だからと、其の成るまゝに打棄て置くならば、遂に由々しき大事を惹起するに至るは亦自然の結果である、故に禍を未萠に防ぐの手段に出で、宜しく王道の振興に意を致されんこと

を切望する次第である。

◎競爭の善意と惡意

御互實業者側、殊に輸出貿易に從事する諸君に向つて商業道德といふと、商業にのみ道德があるやうに聞ゆるが、道德といふものは世の中の人道であるから、單に商業家にのみ望むべきもので無い、商業の道德は斯くある、武士の道德は斯うである、政治家の道德は斯樣であると、何か官服の制度見たやうに、線が三つあるとか四つあるとかいふ如き變つたものではない、人道であるから總ての人が守るべきもので、孔子の敎で云ふならば『孝悌は仁を爲すの本』といふやうに、初め孝悌から踐み出して、それから大きく仁義にもなり、忠恕にもなる、之を總稱して道德といふやうに爲つて來るのであらう、

さういふ廣い人道的の道德でなくして、商賣上殊に輸出營業などに付て注意を望むのは、競爭に屬する道德である、是は特に申合せて、其の間の約束を道德的に堅固にしたいと、余は希望して止まぬのである、總て物を勵むには競ふといふことが必要であつて、競ふから勵みが生ずるのである、謂ゆる競爭なるものは、勉强又は進步の母といふは事實である、けれども此の競爭に善意と惡意との二種類があるやうである、一步進んで言ふならば、每日人よりも朝早く起き、善い工夫をなし、智惠と勉强とを以て他人に打克つといふは、是れ卽ち善競爭である、併しながら他人が事を企つて世間の評判が善いから、之を眞似て掠めてやらうとの考で、側の方から之を侵すといふのであつたら、それは惡競爭である、簡單には斯く善惡二つに言ひ得るけれども、抑も事業は百端で、從つて競爭も亦限りなく分れて來る、而して若し此の競爭の性質が善でなかつた場合は、己

れ自身には事によりて利益ある場合もあらうけれども、多くは人を妨げるのみならず、己れ自身にも損失を受くる、單に自他の關係のみに止まらずして、其の弊害や殆んど國家にまで及ぶ、乃ち日本の商人は困つたものだと外國人に輕蔑されるやうに爲つて來るだらうと思ふ、是に至ると其の弊や實に大である、此所に御會合の方々には斯ることは斷じてあるまいが、若しもありてはと、婆心を述るのである、併し世間押並べて此の弊害が多いと聞いて居る、殊に雜貨輸出の商賣などに付て、惡い意味なる競爭、即ち道德に缺くる所ある事柄が、人を害し己を損じ、併せて國家の品位を惡くする、商工業者の位地を高めやうと相互に努めつゝ、反對に低めるといふ事になるのである。

然らば如何なる具合に經營したら宜いかと言ふならば、須らく事實に依らねば言明は出來兼るが、余が思ふには善意なる競爭を努めて、惡意なる競爭は切に避けるのである、

此の惡意なる競爭を避けるといふことは、詰り相互の間に商業道德を重んずるといふ強い觀念を以て固まつて居つたならば、勉強するからとて惡意の競爭にまで陷るといふことはなく、或る度合に於て斯うしては爲らぬといふ寸法は、敢て『バイブル』を讀まぬでも、論語を暗んじぬでも必ず分るであらうと思ふ、元來此の道德といふものを餘りむづかしく考へて、東洋道德でいふならば、四角の文字を並べ立てると、遂に道德が御茶の湯の儀式見たやうになつて、一種の唱へ言葉になつて、道德を說く人と道德を行ふ人とが別物になつて仕舞ふ、是は甚だ面白くない。

全體道德は日常にあるべきことで、チョッと時を約束して間違はぬやうにするのも道德である、人に對して讓るべきものは相當に讓るも道德である、又或る場合には、人よりは先にして人に安心を與へてやるといふのも道德である、事に臨んでは義俠心も持た

なければならぬ、是も一種の道德である、チョッと品物を賣るに付ても、道德は其の間に含んで居る、故に道德といふものは、朝に晩に始終附いて居るものである、然るに道德を大層むづかしいものにして、隅の方に道德を片附けて置いて、さて今日からは道德を行ふのだ、此の時間が道德の時間だといふやうな億劫なものではない、若し商工業などに付ての競爭上の道德といふものであつたら、前來繰返せし通り、善意競爭と惡意競爭、妨害的に人の利益を奪ふといふ競爭であれば、之を惡意の競爭といふのである、然らずして品物を精撰した上にも精撰して、他の利益範圍に喰ひ込むやうなことはしない、これは善意の競爭である、つまり是等の分界は何人でも自己の良心に徵して判明し得ることゝ思ふ。

之を要するに、何業に拘はらず、自己の商賣に勉強は飽くまでせねばならぬ、また注

意も飽くまでせねばならぬ、進歩は飽くまでせねばならぬのであるが、それと同時に惡競爭をしては爲らぬといふことを、强く深く心に留めて置かねば爲らぬのである。

◎合理的の經營

現代に於ける事業界の傾向を見るに、まゝ惡德重役なる者が出でて、多數株主より依託された資産を、恰かも自己專有のものゝ如く心得、之を自儘に運用して私利を營まんとする者がある、それが爲め會社の内部は一の伏魔殿と化し去り、公私の區別もなく祕密的行動が盛んに行はれるやうになつて行く、眞に事業界の爲に痛嘆すべき現象ではあるまいか。

元來商業は政治などに比較すれば、却つて機密抔といふことなしに經營して行かれる

筈のものであらうと思ふ。唯銀行に於ては事業の性質として幾分秘密を守らねばならぬことがある、例へば、誰に何程の貸付があるとか、それに對してどういふ抵當が入つて居るとかいふことは、德義上これを秘密にして置かねばならぬことであらう、又一般商賣上のことにても、如何に正直を主とせねば爲らぬとは云へ、此の品物は何程で買取つたものだが、今これ〳〵に賣るから幾らの利益のあると云ふやうなことを、わざ〳〵世間へ觸れまはす必要もあるまい、要するに不當なることさへないならば、それが道德上必ずしも不都合の行爲となるものではあるまいと思ふ、併し是等の事以外に於て、現在有るものを無いといひ、無いものを有るといふが如き、純然たる嘘を吐くのは斷じて宜しくない、故に正直正銘の商賣には、機密といふやうなことは、先づ無いものと見て宜しからう、然るに社會の實際に徵すれば、會社に於て無くてもよい筈の秘密があつた

り、有るべからざる所に私事の行はれるのは如何なる理由であらうか、余は之を重役に其人を得ざるの結果と斷定するに躊躇せぬのである。

然らば此の禍根は、重役に適任者を得さへすれば自ら絶滅するものであるか、適材を適所に使ふといふことは、中々容易のものでなく、現在にても重役としての技倆に缺けた人で其職に在るものが少くない、例へば、會社の取締役若くは監査役などの名を買はんが爲に、消閑の手段として名を連ねて居る、謂ゆる虚榮的重役なるものがある、彼等の淺薄なる考は厭ふべきものだけれども、其の希望の小さいだけに、差したる罪惡を逞うするといふやうな心配はない、それからまた好人物だけれども、その代り事業經營の手腕の無いものがある、さういふ人が重役となつて居れば、部下に居る人物の善惡を識別するの能力もなく、帳簿を查閲する眼識もない、爲に知らず識らずの間に部下の者に

惡まられ、自分から作つた罪でなくとも、竟に救ふべからざる窮地に陷らねばならぬことがある、是は前者に比すると稍罪は重いが、併し孰れも重役として故意に惡事をなした者でないことは明かである、然るに夫等二人の者より更に一歩進んで、その會社を利用して自己の榮達を計る踏臺にしようとか、利慾を圖る機關にしようとか云ふ考を以て重役となる者がある、斯の如きは實に宥すべからざる罪惡であるが、夫等の者の手段としては、株式の相場を釣上げて置かぬと都合が惡いと言うて、實際は有りもせぬ利益を有るやうに見せかけ、虛僞の配當を行ふたり、又事實拂込まない株金を拂込んだやうに裝うて、株主の眼を瞞着しようとする者なぞもあるが、是等のやり方は明かに詐欺の行爲である而して彼等の惡手段は未だそれ位にては盡きない、その極端なる者に至ては、會社の金を流用して投機をやつたり、自己の事業に投じたりする者もある、是では最早窃盜と擇

ぶ所がない、畢竟するに此種の惡事も、結局その局に當る者が道德の修養を缺けるより

して起る弊害で、若しも其の重役が誠心誠意事業に忠實であるならば、そんな間違は作

りたくも造れるものでない。

自分は常に事業の經營に任じては、其の仕事が國家に必要であつて、又道理に合する

やうにして行きたいと心掛けて來た、假令その事業が微々たるものであらうとも、自分

の利益は少額であるとしても、國家必要の事業を合理的に經營すれば、心は常に樂んで

事に任じられる、故に余は論語を以て商賣上の『バイブル』となし、孔子の道以外に

は一歩も出まいと努めて來た、其れから余が事業上の見解としては、一個人に利益ある

仕事よりも、多數社會を益して行くのでなければならぬと思ひ、多數社會に利益を與へ

るには、其の事業が堅固に發達して繁昌して行かなくてはならぬといふことを常に心に

して居た、福澤翁の言に『書物を著はしても、それを多數の者が讀むやうなものでなくては効能が薄い、著者は常に自己のことよりも國家社會を利するといふ觀念を以て筆を執らなければならぬ』といふ意味のことがあつたと記憶して居る、事業界のことも亦この理に外ならぬもので、多く社會を益することでなくては正經な事業とは言はれない、假りに一個人のみ大富豪になつても、社會の多數が爲に貧困に陷るやうな事業であつたならば如何なものであらうか、如何に其人が富を積んでも、其の幸福は繼續されないではないか、故に國家多數の富を致す方法でなければ不可ぬといふのである。

志以發レ言、言以出レ信、信以立レ志、參以定レ之。　　左傳

實業と士道

◎武士道は卽ち實業道なり

武士道の神髓は正義、廉直、義俠、敢爲、禮讓等の美風を加味したもので、一言にして之を武士道と唱へるけれども、其の內容に至りては中々複雜した道德である、而して余が甚だ遺憾に思ふのは、此の日本の精華たる武士道が、古來專ら士人社會のみに行はれて、殖產功利に身を委ねたる商業者間に、其の氣風の甚だ乏しかつた一事である、古の商工業者は武士道に對する觀念を著しく誤解し、正義、廉直、義俠、敢爲、禮讓等のことを旨とせんには、商賣は立ち行かぬものと考へ、彼の「武士は喰はねど高楊枝」

といふが如き氣風は、商工業者に取つての禁物であつた、惟ふにこれは時勢の然らしめた所もあつたであらうけれども、士人に武士道が必要であつた如く、商工業者も亦その道が無くては叶はぬことで、商工業者に道德は要らぬなぞとは飛んでもない間違であつたのである。

蓋し封建時代に於て、武士道と殖産功利の道と相背馳するが如く解せられたのは、猶ほ彼の儒者が、仁と富とは並び行はれざるものゝ如く心得たと同一の誤謬であつて、兩者共に相背馳するものでないとの理由は、今日既に世人の認容し了解された所であらうと思ふ、孔子の謂ゆる「富と貴とは是れ人の欲する所なり、其の道を以てせずして之を得れば處らざるなり、貧と賤とは是れ人の惡む所なり、其の道を以てせずして之を得るも去らざるなり」とは、これ誠に武士道の眞髓たる正義、廉直、義俠等に適合するもの

ではあるまいか、孔子の訓に於て、賢者が貧賤に處して其の道を易へぬといふのは、恰かも武士が戰場に臨んで敵に後を見せざるの覺悟と相似たるもので、又彼の其の道を以てするに非ざれば、假令富貴を得ることがあつても、安んじてこれに處らぬと曰ふのは、これまた古へ武士が其の道を以てせざれば一毫も取らなかつた意氣と、その軌を一にするものと謂つて宜しからう、果して然らば富貴は聖賢も亦これを望み、貧賤は聖賢も亦これを欲しなかつたけれども、唯彼の人々は道義を本とし富貴貧賤を末としたが、古への商工業者はこれを反對にしたから、遂に富貴貧賤を本として道義を末とするやうになつて仕舞つた、誤解も亦甚しいではないか。

想ふに此の武士道は、啻に儒者とか武士とかいふ側の人々に於てのみ行はるゝものではなく、文明國に於ける商工業者の、據りて以て立つべき道も茲に存在することゝ考へ

る、彼の泰西の商工業者が、互に個人間の約束を尊重し、假令その間に損益はあるとしても、一度約束した以上は、必ず之を履行して前約に背反せぬといふことは、德義心の鞏固なる正義廉直の觀念の發動に外ならぬのである、然るに我日本に於ける商工業者は、尚ほ未だ舊來の慣習を全く脫することが出來ず、動ともすれば道德的觀念を無視して、一時の利に趨らんとする傾向があつて困る、歐米人も常に日本人が此の缺點あることを非難し、商取引に於て日本人に絕對の信用を置かぬのは、我邦の商工業者に取つて非常な損失である。

凡そ人としてその處世の本旨を忘れ、非道を行うても私利私慾を充たさうとすることがあつたり、或は權勢に媚び諂うても其身の榮達を計らんと欲するは、これ實に人間行爲の標準を無視したもので、斯くの如きは決して其の身、其の地位を永遠に維持する所

以の道では無いのである、苟くも世に處し身を立てようと志すならば、其の職業の何たるを問はず、身分の如何を顧みず、始終自力を本位として須臾も道に背かざることに意を專らにし、然る後に自ら富み且つ榮ゆるの計を怠らざるこそ、眞の人間の意義あり價値ある生活といふ事が出來よう、今や武士道は移して以て實業道とするがよい、日本人は飽くまで大和魂の權化たる武士道を以て立たねばならぬ、商業にまれ工業にまれ、此の心を以て心とせば、戰爭に於て日本が常に世界の優位を占めつゝあるが如く、商工業に於ても亦世界に勇を競ふに至るゝのである。

◎文明人の貪戾

全歐の事變に就て初め私の豫想は全く外れた、既に其の觀察を誤つた私は、將來も亦

見込違ひをするであらうと恐懼して居る、併しながら私の觀察の誤つた所以は、私の豫想以上に暴虐の人があつたからである、謂ゆる「一人貪戾なれば、一國亂を作す」といふ古訓が、事實として全歐洲に現はれて來たからである、文明の世には有り得べからざるものとの想像が過誤の觀察となつたのである、果して然らば、私の智の到らざりしが爲でもあらうが、私は却つて文明人の貪戾なる結果ではなからうかと、冷笑せざるを得ないのである。

此の事變の終局は如何になるであらうか、私の如き近眼者流には豫言することは出來ないけれども、結局は列強並び相疲るゝか、或は一方の威力が衰へて、其極或る條件の下に終局を見るであらうか、歷史家は、百年を經ると地圖の色が變ると言うて居るが、我々は又之に由つて、商工業の勢力の移りゆく樣を見ねばならぬ、將來の商工業は如何

に變化するであらうか、其の變化に就て、我々は如何なる覺悟を以て之に應ずべきであらうか、我々の考慮すべき所、用意すべき點は詰り此所に在るのだ、私は政治上若くは軍事上に就て述ぶることを好まぬ、また其の知識をも持たぬのである。故に今私の言はんと欲する所は、單に商工業に關する方面に限らるゝのであるが、今後地圖の變化に伴なふ商工業勢力範圍の變化に就て、適切なる準備と實行の責任とは、未來の當事者に在るのである、而して此の未來の當事者なるものは、現時の青年を除いて外にない、青年たる者は今日よりして審思熟慮、之に對する策を講ずべきである。

何れの國家に於ても、自國の商工業を發達せしめんとするには、海外に我が國產の販路を求め、人口の增殖するに於ては領土を擴むることを講ずるのみならず、樣々なる策略を以て自己の勢力の增大を圖るのである、現に歐洲列強が五大洲に雄飛して居る所以

は、全く是等の事情に由るものであつて、優越なる位地を占むるものは、特に優越なる國家と稱せらるゝのである、彼の獨逸皇帝今回の行動の如き、此點より企圖せられたものであると思はれる、從來皇帝が內地の殖產に、海外の殖民に留意せらるゝことは容易ならざるものにて、若しも少しく其點に就て注意するならば、何人と雖も、皇帝が何故に此くまで仔細に心を勞せられるかと云ふことを感ぜずには居られまい、例へば、英佛に對する商工業の競爭は勿論、日露戰後、日本雜貨が各地に歡迎さるゝを見れば、直ちに之を模造する、總じて學術技藝には能ふ限りの保護と便利とを與へ、商工業は常に政治兵備と相聯絡し、中央銀行の如きも力を盡して商工業の便宜、資金の融通を計るといふやうに、如何に彼等上下一致して富國に從事して居るかゞ窺知し得られる、又その學問に於ても化學、發明、技術、精妙、實に行屆くことは一通りではない、それは今回の

戰亂の爲に、遠き我國の如きをして、藥品染料等の缺乏に窮せしめたる事實に見るも、彼國の力が世界の隅々まで及んで居ることが分かる、故に自國の擴大のみを企圖する貪戻心は實に厭ふべきであるが、官民一致その國の富强を勉むるの努力は感服の外はないのである。

飜つて我國の商工業を見るに、多くは不統一にして振はず、殊に戰亂の影響を受け、生糸の値は下落し、綿糸綿布の販路は澁滯し、總じて取引は萎靡し、有價證券の價は下落し、新たなる事業は起らざるの狀態にある、併し早晩是等は恢復することも豫想に難くないのであるから、此際一時の困難は堪へ難くとも、當業者は大に勇氣を起さねばならぬ所である、又一方には此の事變は大に乘ぜざるべからざる好時機と思ふ、今日我が實業家は目前の不景氣に畏縮するやうであるけれども、其れは甚だ無氣力の行爲である、

唯その著目を誤らぬやうにして戰中十分なる研究を積み、漸次實物の効果のあるやうに努めて行きたいのである、殊に支那に對する商工業の如きは、境は接近し居る、人情風俗共に歐米人に比すれば緣故最も深いのである、然るに其の關係に於ては、往々にして他列强に比して大に遜色あるは實に心細い極みである、吾人は須らく進んで支那の富源を開發し、其の產業を進め、其の販路を擴めて、通商上の利益を增加するやうに心掛けねば爲らぬ、我が國民の今日まで支那に對する商工業經營の態度を見るに、兎角個々別々であつて、其の間に少しも聯絡がない、獨逸の政治經濟機關が統一して密接な關係を保つて居るのを見るにつけても、我が國民が此の歷史的に於ても、將た人種的に於ても、幾多の便宜を有する國柄なるに關はらず、彼等の後へに瞠若たるやうではならぬ、而して此の覺悟は特に我が青年に對して最も望ましき所である、何うか今日の青年諸氏

は斯る所に注目して力を入れて貰ひたいのである。

◎相愛忠恕の道を以て交はるべし

日支間は同文同種の關係あり、國の隣接せる位置よりするも、將た古來よりの歴史よりいふも、また思想、風俗、趣味の共通せる點あるに徴するも、相提携せざるべからざる國柄なり、然らば奈何にして提携の實を擧ぐべきか、其の方策他なし、人情を理解し、己の欲せざる所は之を人に施さず、謂ゆる相愛忠恕の道を以て相交はるにあり、即ち其の方策は論語の一章に在りと謂ふべきである。

商業の眞個の目的が有無相通じ、自他相利するにある如く、殖利生産の事業も道德と隨伴して、初めて眞正の目的を達するものなりとは、余の平素の持論にして、我國が支

那の事業に關係するに際しても、忠恕の念を以て之に蒞み、自國の利益を圖るは勿論ながら、併せて支那をも利益する方法に出づるに於ては、日支間に眞個提携の實を擧ぐることは、決して難い事ではない。

之に就き先づ試みるべきは開拓事業であつて、即ち支那の富源を拓き天與の寶庫を展開して、其の國富を增進せしむるに在る、而して之が經營の方法は、兩國民の共同出資に依る合辨事業となすが最良法である、獨り開拓事業に止まらず、其他の事業に於ても亦その組織は日支合辨事業とするのである、斯くするに於ては日支間に緊密なる經濟的連鎖を生じ、從つて兩國間に眞個の提携を爲し得るのである、余の關係せる中日實業會社は、此の意味に於て發起設立せられたるものにて、其の成功を期せんとする所以も亦此に存するのである。

余が史籍を通じて尊敬し居る支那は、主として唐虞三代より後きも殷周時代であつて、當時は支那の文化最も發達し、光彩陸離たる時代である、但し科學的智識に至りては、當時の史籍に揭げられたる天文の記事の如き、今日の學理に合せずと言はるれども、百事を現在の支那に比較して、今日の昔時に及ばざる感あるは當然のことである、其の後、西東漢、六朝、唐、五代、宋、元、明、淸に及び、謂ゆる二十一史にて通覽せる所に依るも、各朝に大人物の輩出せるは言はずもがな、秦に萬里の長城あり、隋に煬帝の大運河あり、當時是等の大事業の目的が那邊に存せしかは暫く措き、其の規模の宏大なる、到底今日の企て及ぶ所ではない、されば唐虞三代より殷周時代の絢爛たる文華を史籍に依りて窺ひ、これが想像を逞しうして、今次（大正三年春）支那の地を蹈み、實際に就き民情を察するに及び、恰かも精緻巧妙を極めたる繪畫によりて美人を想像し、實物に

就き親しく之を見るに方り、始めて其の想像に及ばざるの恨を懐くと等しく、初め想像の高かりしだけ失望の度も深く、逆施倒行とも言ふべきか、余をして儒教の本場たる支那の到る處にて、屢〻論語を講ずるの奇觀をさへ呈せしめたのである。

就中余の感を惹きしは、支那に於ては上流社會あり下層社會あるに拘はらず、其の中間に於ける國家の中堅をなす中流社會の存在せざる事と、識見人格共に卓越せる人物が少いと云ふ譯ではないけれども、國民全體として觀察するときは、個人主義利己主義が發達して、國家的の觀念に乏しく、眞個國家を憂ふるの心に缺けたることにて、一國中に中流社會の存せざると、國民全般に國家的觀念に乏しきとは、支那現今の大缺點なりと謂ふべきである。

◎天然の抵抗を征服せよ

世界文明の進歩に伴ひ、人智を以て天然の抵抗を征服し、海にも陸にも種々交通の便利を加へて、其の距離を短縮することは實に驚くばかりである、往昔支那に於ては天圓地方と稱して、我々の住む此の大地を方形のものと思惟せしのみならず、自國以外には殆んど他國の存在を認めなかつたのである、我國とても當初は斯かる偏狹なる見解に依りて誘導啓發せられたのであるから、會々日本以外の國といへば、直ちに唐天竺を聯想するのみであつて、更に世界の何物たるを知らなかつたのである、されば五大洲の存在などいふことに至りては、夢想だも及ばなかつたのである、現に余の幼時に聞ける童話中にも、其の左右の翼を擴げるときは長き三千里にも達するといふ大鵬でさへも、尙は

且つ世界の涯際を見ることが出來ないのであると說いた程であつた。
さて其の如く世界は廣大無邊のものなれば、迚も我々の人智では容易に之を究むることの出來るもので無いとして居たのである、然るに文明の進步と共に交通機關が發達して來た爲に、地球の面積は漸次に減縮せられ、最近の半世紀間に於ては、殆んど隔世の感がある、顧みれば千八百六十七年、那波翁第三世が在位の時に當り、佛國巴里に世界大博覽會の開かるゝに際し、我が德川幕府よりは將軍の親弟德川民部大輔を特命使節として差遣せられ、余は隨行員の一人として渡歐したのであるが、當時一行の者は橫濱より佛國郵船に乘り印度洋及び紅海を經て蘇士の地峽に到りしに、佛國人レセツプ氏の經營に係る同所開鑿の一大工事は、既に着手せられて居たけれども、未だ成就しなかつたが爲め、一行は船を棄てゝ地峽に上り、鐵道に依りて埃及を橫斷し、「カイロー」を經て

「アレキサンドリヤ」に出で、再び乘船して地中海を航し、横濱出帆以來五十五日にして、初めて佛國の「マルセーユ」に到着したのであつた、斯くて翌年の冬期に歸朝する時に其所を過ぎたが、尚ほ運河の工事は竣成の運びに至らなかつた。

其の後(千八百二十九年十一月)該運河が開通して、諸國の艦船が通航を許さるゝや、歐亞の交通に一生面を開き、兩者間の貿易に、航海に、軍事に、外交に一大變革を來したのである。

これと同時に各國艦船は、爾來益々其の形態を大にして其の速力を加へたから、太西洋は言を俟たず、太平洋の面積も亦漸く減縮せられた事さへあるに、更に進んで西伯利亞横斷鐵道が竣工したので、歐亞の交通、東西の聯絡上に一新紀元を開き、四海比隣の實が漸くにして擧らんとして居る。

然るに爰に遺憾なりしは、米大陸が其の半腹に帯の如き一地峽の存するに由り、地勢は爲に蜿蜒長蛇の如く南北に走りて、徒らに太西太平兩海洋の聯絡を遮斷することであつた、而して此の障壁を除却することに就ては、レセップ氏以下何れも多大の辛酸を嘗められたのであるけれども、不幸にして比々失敗し去つたのであつた、併し其儘に終ることはあるまいと思つて居ると、我が東隣友邦の雄大なる經營に依りて、遂に巴奈馬地峽開鑿の一大工事が竣成し、南北の水は乃ち相通じ、東西の半球は全く比隣と化し去らんとしつゝある、東洋の諺に命長ければ恥多しと云ふけれども、輓近五十年間に於ける世界交通の發達と、海運の面積の減縮とは斯の如く顯著なるものがあつて、前後殆んど別乾坤の觀あるを思へば、身、昭代に生れたる餘慶として、長壽の寧ろ幸福なりしを喜ぶのである。

◎摸倣時代に別れよ

度々識者が力說する通り、我が國民の思想には忌むべき弊習がある、それは卽ち外國品偏重の惡風である、外國品だからとて別段排斥する必要がないやうに、之を偏重するの餘り內地品を卑下する理由もない筈である、然るに舶來品といへば總て優秀なものばかりとの觀念が、深く國民の上下に普及して居るのは誠に慨嘆に堪へない、尤も日本の文明は最近の發達で、而かも歐米諸國からの移植に負ふ所が頗る多いために、曾ては歐化主義の流行に苦しみ、今も猶ほその餘弊として、此の舶來品愛重の勢をなして居ることゝ思はれる、けれども維新以來早くも半世紀にならうとする今日、且つ又東洋の盟主、世界の一等國を以て任じて居る今日の日本國たるもの、何時まで歐米心醉の夢を見て居

るのであらう、何時まで自國輕蔑の不見識を敢てする積りであらう、實に意氣地のない話である、外國の「レッテル」が貼つてあるから此の石鹸は宜いぞと威かされたり、外國品だから此の「ウヰスキー」を飲まなければ、時勢後れの人間に見られると怖れるやうで、それで獨立國の權威と大國民の襟度が如何して保たれて行かれよう、私は實に國民の大自覺を望むのである、我々は今日唯今、心醉の時代と袂別せねばならぬ、模倣の時代から去つて、自發自得の域に入らねばならぬ。

有無相通は經濟の原則とはいふものゝ、私は徒らに排外思想を鼓吹するものではない物に一得一失は動もすれば伴ふもので、先年戊申詔書を降された時も、これを極端非理な消極主義に穿き違へた人々が多く、當路者が御大旨の徹底に惱まされたことがある、此の國産奬勵の宣傳をも極端な消極主義、排外主義と取られては、獨り發起人等の迷惑

なるのみならず、延いては國家の大損失を招く虞がある、有無相通ずとは數千年前から道破された經濟上の原則で、此の大原則に反して經濟の發展は企圖せられる筈がない、一縣にして佐渡からは金を產し、越後からは米を產する、一國にすれば、臺灣からは砂糖が出るし、關東地方からは生絲が出る、更に國際間に擴大して見ると、亞米利加の小麥、印度の棉花の如く、それ〴〵地勢に依つて其の產物を異にするのであるから、我々は彼の小麥粉を食し、彼の棉花を購ひ、そして我は生絲、綿絲を賣つて行くべきである、この點は特に注意して、我國に適する物を作り、適せない物を仕入れることを誤らぬやうにせねばならぬ。

次に我々は獎勵會の事業を選擇して置く必要がある、獎勵は其の聲ばかりでも效益は少ないが、折角會組織にしたのであるから、是非目的を貫徹する爲に實際の事業に着

手し、範を天下に示すべきである、目下の所では會報を發行する以外、具體的に決定したものはないが、規則書にもある通り、今後は國産の調査研究、共進會の開催、講話會の開催、商品陳列場の完備、一般の質疑應答、輸出奬勵策等を實施して行くのである、特に研究所の設立、産業上の注意、市場又は製品の紹介、試驗分析、證明の依頼に應ずることなどは裨益する所大なるものがあらうと思ふ、而して事業の成否は一に係つて各人の雙肩にあるのだから、御互にこの會の發展と利用とに力を注がねばならぬ。

最後に當局者に一言して置きたい事は、奬勵は大に之を努めねばならぬが、不自然不相應の奬勵を行へば終に無理が出來る、親切なやり方も却つて不親切な結果となり、保護した積りが干渉束縛となる、殊に商品の試驗及び紹介をする際には、私利私情を離れて一に邦家の爲を念ひ、公平と親切とを忘れざらん事を切望して置く、更に又日本品使

用の機運が動いたのを奇貨として、詰らぬ物を粗製濫造し、忠良なる國民を欺瞞し、一時の私腹を肥さんと試むる商賣人もあらう、此の如きも亦國產の發達を阻害すること尠少でないから、相警めて斯る不逞漢の輩出を防がねばならぬのである。

◎此にも能率增進法あり

我々が始終——殊に私などは、其れに就ては恥入つて、諸君にも始終迷惑をかけるが、此物の切盛のつかぬ爲に、無駄な時間を費す、之がどうも事物の進むほど注意せねば爲らぬことゝ思ふ、從つて之が極端に行くと、能率が大變に惡くなる、能率の惡いといふことは職工か何かにある語ですが、職工ばかりでは無い、通常の事務を處する人でも、チヤンと時の極りが充分附いて、此の時間に是れだけの事をするといふことを遲滯

なく完全に遂げて行くことが出來ると、謂はゞ人を多分に使はぬでも、仕事は澤山に出來て來る、即ち能率が宜くなる、事務に於ても尙ほ然りと思ふ、自身にさう思ふが、さらば日本の諸君が、私ばかりが惡くて他の方は實に其の權衡を得て、一日何時間働く、其の働く時間は仕事に從事をして居る分量が、實に完全に、時計の刻むが如くやれ得るかと云ふと、決して爾うでない、或は使はぬでも宜い人を大に使ひ、一度で濟むことを三度も人を走らせたり、さうして用は左までゞない、費府でワナメーカーが私を接待して呉れた、其の時間の遣ひ方などを見て、あゝ感心なものだ、成程斯うやると實に少い時間にチヤンと多くの事が出來て、其日の仕事が完全に屆くと思うて、頗る敬服したのである、旣にテーラーといふ人が斯ういふ手數を省くことに就て大に說をなして、或る雜誌に池田藤四郞といふ人が之を書いてある、能率を增進するといふ論であるが、私は

初め工場の職工か何かに就て言つたものとばかり思うて居た所が左樣でない、もう日々お互の間に始終ある、ワナメーカーが私を待遇した有樣を見ると、何も別に變つたことでもないが、丁度「ピッツブルグ」の汽車が五時四十分に費府に着く、着いたならば自働車を出して置く、六時までに私の店に來られるから、「ホテル」に寄らずに直ぐ來て吳れ、斯ういふ案内であつた、そこで指圖通り費府に着くと宿にも寄らず、直ぐ自働車で行くと、六時二分か三分に着いた、先生は店に待つて居つて、直に私を案内して、先づ店の有樣を一通り見せた、實に目を驚かすやうな大きな店で、入口には大きな兩國の國旗を建て、立派な華電燈を盛んに點じて、而かも其日に來た多數の客が未だ歸らずに待つて居つたから、何か大きな劇場の「ハネ」にでも出會つたやうな鹽梅に群集をなして居る、其所を主人が案内して連れて歩く、先づ下の方の陳列場をズッと通りながら觀

て、それから「エレベーター」で二階へ上ると、先づ第一に見せたのは料理場、すつかり掃除して綺麗になつて居たが、是は上等の客の仕出をする所、其次は普通の客の仕出をする所、「コック」の有様は斯うである、其次には秘密室といつて、何か店のことに就て秘密な協議をする所であるが、四五千人の會議が出來るといふ程の廣さである、それから教育をする場所、店の人に極く當用の教育を與へる所、是等の諸所を見せた時間が軈て一時間位、それが濟んで七時頃に私が「ホテル」に歸る時に、ワナメーカーが明朝は八時四十五分にお前を訪ねる、それなら朝餐は濟むだらう、――濟みます、丁度翌朝の八時四十五分にキチンと來た、是から大分長い話をして、正午頃まで話をして宜いか、宜しいと云ふからして、頻りに日曜學校に力を入れた理由は斯樣である、一體お前の出身はどういふ人であると云ふやうなことから、段々談話が這入つて、つい其爲に一時間

も彼は餘計豫期したよりも長き話をしたかと思ふ、晝餐になるから私は歸る、二時に來るから、夫迄に支度をして待つてゝ吳れ、それから又二時にキチンと來て、今度は日曜學校の會堂に案內される、其の會堂は當人の建てたものか否か知らないが、中々立派な會堂で、總體では二千人も入るといふ、大勢の會員が居る、何時も此通りで、別に貴方が來たから多くの人を集めたのではないと云つて居た、牧師が聖書を講演し、それから讃美歌がある、それが終るとワナメーカーが私を紹介的の演說をした、それから私にも日曜學校に就て感じたことを言へといふことで、私も演說をした、更にそれに向つてワナメーカーが――此時には私も少し弱りました――是非孔子敎を止めて基督敎に宗旨變をせよと直接談判を大勢の前で迫られた、是には私も返答に苦んだ、それが終ると直ぐ隣りの婦人の聖書研究會に行つて演說し、次で一二丁隔つた所の勞働的種類の人が集つ

て、聖書を研究する所に行き、彼は東洋から斯ういふ老人が來たから、是非握手したら宜からうと云つたので、四百人も居た殘らずに、而かも向ふは勞働者であるから、強く握られるので手が痛くなる位であつた、やがて五時半頃になつた、六時に立つて田舍へ行かねばならぬ約束があるので、一緒に旅宿の前まで來て別れる時に、是非もう一遍會ひたいが、何とか途は無からうかといふ話、——紐育には何日行く、三十日に行つて來月四日まで滯在して居る、然らば私は二日に紐育に行く用事がある、其時もう一遍會はう、何時か、午後の三時には立つて此地に歸らねばならぬ、然らば二時から三時までの間に紐育の貴方の店に行かうと約束し、二日の二時半、三時少し前位、少し遲くなつて遣損つては大に困ると思ひ、大急きで行くと、直ぐさまお前よく來て吳れた、是で滿足だ、私も滿足である、實はお前に御馳走は出來ぬから書物を進げたいと云つて、リンコ

ルンの傳記、ゼネラル、グラントの傳記その他のものを與へ、且つ簡單に兩氏の崇高なる人格を語り、自分もグラント將軍歡迎委員長であつたことなどを語り合ひて別れたが、其の切盛に一も無駄がない、話も亦適切である、私は實に敬服した、時間を無駄に使はぬこと斯の如くなれば、例の能率が如何にも增進するであらう、別に物を拵へる譯ではないが、詰り我々が時間を空費してるのは、丁度物を製作する場合に手を空くしてると同じことであるから、是はお互に注意して人間を無駄に使はぬは勿論のこと、我れ自身をどうぞ無駄に使はぬやうに心懸けたいと思ふ。

◎果して誰の責任ぞ

世人動もすれば維新以後に於ける商業道德は、文化の進歩に伴はずして却つて衰へた

と云ふ、併しながら余は何故に道德が退步、若くは頽廢したか、其の理由を知るに苦しむ者である、之を昔日の商工業者に比すれば、今日の商工業者と其の孰れが道德觀念に富み、孰れが信用を重んずるであらうか、余は今日を以て遙かに昔日に優るものと斷言するに憚からぬ、けれども今日他の事物の進步した割合に道德が進んで居らぬとは、既に前說の如くであるから、余は必ずしも世人の說を駁する譯ではない、唯吾人の此間に處するものは、斯の如き世評の生ずる理由を詮索し、一日も早く道德をして物質的文明と比肩せしめ得るの程度に向上させなくてはならぬ、それは前に述べたるが如き方法の下に道德を講ずるのが先決問題であらう、併しそれとても特別の工夫方法を要する譯でなく、唯日常の經營に於て左樣心掛けて居れば足るのであるから、左まで六ケ敷いものではない。

維新以來物質的文明が急激なる發達をなしたるに反し、道德の進步がそれに伴はなかつたので、世人は此の不釣合の現象に著しく注目して、商業道德退步といふのであるとして見れば、仁義道德の修養に心を用ゐ、物質的進步と互角の地位に進ませるが目下の急務には相違ないが、一面から考察して見ると、單に外國の風習ばかりを見て、直ちにこれを我國に應用せんとすれば、或は不可能を免れぬこともある、國異なれば道義の觀念も亦自ら異るものであるから、仔細に其の社會の組織風習に鑑み、祖先以來の素養慣習に稽へ、其の國、其の社會に適應する所の道德觀念の養成を努めなければならぬものである、一例を擧ぐれば『父召せば諾なし、君命じて召せば駕を待たずして行く』とは、即ち日本人が君父に對する道德觀念である、父召せば聲に應じて起ち、君命じて召すことあれば、場合を問はずして直ちに自ら赴くとは、古來日本人士の間に自然的に養

成されたる一種の習慣性である、然るに之を個人本位の西洋主義に比較すれば、其の軒輊は非常なもので、西洋人の最も尊重する個人の約束も、君父の前には犧牲として敢て顧みぬも宜いといふことになる、日本人は忠君愛國の念に富んだ國民であると稱揚さるる傍から、個人間の約束を尊重せぬとの誹謗を受くるのも、要するに其の國固有の習慣性が然らしめたので、我と彼では其の重んずる所のものに差違がある、然るに其の因つて來る所以を究めずして、徒らに皮相の觀察を下し、一概に日本人の契約觀念は不確實である、商業道德は劣等であると非難するは、餘りに無理であるといふより外は無い。

斯く論ずればとて、余が日本の商業道德の現在に滿足せぬことは勿論である、兎に角近頃の商工業者の間に、或は道德觀念が薄いとか、或は自己本位に過ぎるとかいふ評を加へられることは、當業者の相互に警戒せねばならぬことではあるまいか。

◎功利學の弊を芟除すべし

日本魂、武士道を以て誇りとする我國の商工業者に道義的觀念の乏しいと云ふことは、實に悲むべきことであるが、抑も其の由つて來るところを繹ぬれば、從來因襲する教育の弊であると思ふ、予は歷史家にあらず又學者にあらざれば、遠く其の根源を究むることは出來ないけれども、彼の『民可レ使レ由レ之、不レ可レ使レ知レ之』といふ、朱子派の儒教主義は、近く維新前まで文教の大權を掌握せる林家の學に依て其の色彩を濃厚にし、被治者階級に屬する農工商の生產界は、道德の天則外に放置せらるゝと共に、己れ亦自から道義に束縛せらるゝの必要なしと感ずるに至つた。

此の學派の師宗朱子その人が、唯大學者といふまでにて、實踐躬行、口に道德を說き、

身に仁義を行ふ底の人物でなかつたから、林家の學風も、儒者は聖人の學説を講述する者、俗人は之を實地に行ふべきものとし、説く者と行ふ者との區別を生じ、之が結果として、孔孟の謂ゆる民卽ち被治者階級に屬する者は、唯だ命惟れ奉じて、一村一町の公役行事を怠らざれば足るといふ卑屈根性を馴致し、道德仁義は治者の爲すべきこと、百姓は政府より預りたる田畑を耕し、町人は算盤の目をせゝつてさへ居れば能事了るといふ考へが、習ひ性をなして國家を愛するとか、道德を重んずるとかいふ觀念は全く缺乏したのである。

鮑魚の市に入るものは自ら其の臭を知らずといへば、斯る數百年の惡風に養はれ、謂はゆる糞厠の臭きを忘れたるものを薫化し、陶冶し、天晴れ有道の君子的人物となすは、固より容易のことでは無いのに、歐米の新文明の輸入は、此の道德的觀念の缺乏に乘じ、

翕然として功利の科學に向はしめ、愈々其の惡風を助長することゝなつた。

歐米にも倫理の學は盛である。品性修養の聲も甚だ高い、併し其の出發點が宗教によりて、我國の民性と容易に一致し難き所があるより最も廣く歡迎せられ、最も大なる勢力となつたのは、此の道德的の觀念では無くして、利を增し產を興すに覿面の効果ある科學的智識、即ち功利の學說である、富貴は人類の性慾とも稱すべきであるに、初めより道義的觀念の缺乏せる者に向つて、教ふるに功利の學說を以てし、薪に油を注いで其の性慾を煽るに於ては、其の結果は蓋し知るべしではないか。

往時の下級生產者より出でて、天晴身を立て家を興し、一躍具瞻の地位に進みたる人も固より尠くないが、是等の人々は果して道德仁義に終始し、正路に步し、公道を進み、俯仰天地に怍るなきの心事を以て、能く今日に至つた者であらうか、關係の會社銀行

等の事業を盛大ならしむべく、晝夜不斷の努力を盡すは、實業家として洵に立派なことである、其の株主に忠なる者と稱するも不可なしであるけれども、若し會社銀行の爲に盡す精神が、由つて以て自ら利せんとす 謂ゆる利己の一念に止まりて、株主の配當を多くするは、自家の金庫を重からしむる爲めなりとせば、若し會社銀行を破産せしめ、株主に缺損を與ふるを以て自己の利益が多いといふ場合に際會したならば、或は之を忍ぶやも測られない、孟子の謂ゆる「奪はずんば饜かず」とは卽ち是である。

又富豪巨商に仕へて、一意主家の爲に盡瘁する者の如きも、唯その事蹟より見れば、克く仕ふる所に忠なる者といふことは出來るが、其の忠義的行爲が、全く自家損得の打算より發し、主家を富ましむるは自ら富む所以、番頭手代と見下げらるゝは面白からざるも、實際の收入は遙かに尋常事業家に優るものあれば、我は名を捨て得を取るなりと

の心事より出でたるものなるときは、其の忠義行爲も、歸する所は利益問題の四字に止まり、同じく道德の天則外にあるものと云うて差支あるまい。

然るに世人は此種の人物を成功者として尊敬し羨望し、青年後進の徒も亦これを目標として、何とかして其壘を摩せんとするに腐心する所より、惡風滔々として底止するところを知らざる勢となつて居る。斯く云へば、我が商業者の總ては皆不信背德の醜漢のやうであるが、孟子も『人の性は善なり』と言へる如く、善惡の心は人皆之れあれば、中には君子的人物であつて、深く商業道德の頽廢を慨し、之が救濟に努力し居る者も尠くないが、何にせよ既往數百年來の弊習を遺傳し、功利の學說によりて惡き方面の智巧を加へたる者を、一朝有道の君子たらしむるは容易に望み得らるべきでは無い、去迚それを此儘に放任するは、根なき枝に葉を繁らし、幹なき樹に花を開かしめんとするもの

にて、國本培養も商權擴張も、到底得て望むべきに非ざれば、商業道德の骨髓にして、國家的、寧ろ世界的に直接至大の影響ある、信の威力を闡揚し、我が商業家の總てをして、信は萬事の本にして、一信能く萬事に敵するの力あることを理解せしめ、以て經濟界の根幹を堅固にするは、緊要中の緊要事である。

◎此の如き誤解あり

由來競爭は何物にも伴ふもので、その最も激烈を極むるものは競馬とか競漕とかいふ場合である、其の他朝起るにも競爭がある、讀書するにも競爭がある、また德の高い人が德の低い人から尊重されるにも、それ〴〵競爭がある、けれども是等後の方のものに於ては、餘り激烈なものは認めない、然るに競馬競漕となると、命を懸けても構はない

といふ程になる、自己の財産を增すに就ても是と同樣で、激烈なる競爭の念を起し、彼よりも我に財産の多からんことを欲する、其極、道義の觀念も打忘れて、謂ゆる目的の爲には手段を擇ばぬといふやうにもなる、即ち同僚を誤り、他人を毀ち、或は大に自己を腐敗する、古語に『富をなせば仁ならず』といふのも、畢竟さういふ所から出た言葉であらう、アリストートルは『總ての商賣は罪惡なり』と言つて居るさうであるが、それは未だ人文の開けぬ時代のことで、如何に大哲學者の申分とあつても、眞面目には受取れない、併し孟子も『富をなせば仁ならず、仁をなせば富まず』と言つて居るから、等しく味はふべき言葉である。

蓋ふに此の如く道理を誤るやうになつたのは、一般の習慣の然らしめた結果といはなければならぬ、元和元年に大阪方が亡び、徳川家康が天下を統一し、武を偃せて復た之

を須ゐない時代となつて以來、政治の方針は一に孔子敎より出て居つたやうである、その以前、支那或は西洋に相當の接觸もしたのであるが、偶〻「ゼシユイツト」敎徒が、日本に對して恐るべき企を持つて居るかに見えたことがあつた、或は宗敎によつて國を取るのを其の趣意として居るなどといふ書面が和蘭から來たといふやうなことから、海外との接觸を全く絕つて、僅か、長崎の一局部に於てのみ之を許し、內は全く武力を以て之を守り治めた、而して其の武力を以て治める人の遵奉したのは實に孔子敎であつた、修身、齊家、治國、平天下の調子で治めるといふのが幕府の方針であつた、故に武士たる者は謂ゆる仁義孝悌忠信の道を修めた、さうして仁義道德を以て人を治める者は、生產利殖などに關係する者でない、卽ち『仁をなせば富まず、富をなせば仁ならず』を事實に於て行つたのである、人を治める方は消費者であるから生產には從事しない、生產

利殖のことをするのは、人を治め、人を教ふる者の職分に反するものとして、謂ゆる武士は喰はねど高楊枝といふ風を保つた、人を治める者は人に養はるゝものなり、故に人の食を喰むものは人の事に死し、人の樂を樂む者は人の憂を憂ふといふが彼等の本分と考へられて居た、生産利殖は仁義道德に關係のない人の携はるものとされて居たから、恰かも總て商業は罪惡なりと言はれた昔時と同樣の狀態であつた、是が殆んど三百年間の風を成した、其れも初めは極く簡單な方法で宜かつたが、次第に智識は減じ氣力は衰へ、形式のみ繁多になり、遂に武士の精神廢り、商人は卑屈になつて、虛僞橫行の世の中となつたのである。

教育と情誼

◎孝は强ふべきものに非ず

論語の爲政篇中に、『孟武伯問レ孝、子曰、父母唯其疾之憂』、また『子游問レ孝、子曰、今之孝是謂二能養一、至二於犬馬一、皆能有レ養、不レ敬何以別乎』、尚ほ此外にもある如く、孔夫子は孝道の事に就て屢〻說かれて居る、併し親から子に對して孝を勵めよと强ゆるのは、却つて子をして不孝の子たらしむるものである、私にも不肖の子女が數人あるが、それが果して將來如何なるものか、私には解らぬ、私とても子女等に對して、時折『父母は唯その疾を之れ憂ふ』といふやうな事を說き聞かせもする、それでも決して孝を要求し

孝を強ゆるやうな事は致さぬ事にして居る、親は自分の思ひ方一つで、子を孝行の子にしてもしまへるが、又不孝の子にもしてしまふものである、自分の思ふ通りにならぬ子を、總て不孝の子だと思はゞ、それは大なる間違で、皆能く親を養ふといふだけならば、犬や馬の如き獸類と雖も、猶ほ且つ之を能くする、人の子としての孝道は、斯く簡單なるものであるまい、親の思ふ通りにならず、絶えず親の膝下に居て親を能く養ふやうなことをせぬ子だからとて、それは必ずしも不孝の子でない。

斯ることを述べると、如何にも私の自慢話のやうになつて恐縮であるが、實際の事ゆゑ、憚らずお話しする、確か私の二十三歳の時であつたらうと思ふが、父は私に向ひ『其許の十八歳頃からの樣子を觀て居ると、どうも其許は私と違つた所がある、讀書なさしても能く讀み、又何事にも悧發である、私の思ふ所から言へば、永遠までも其許を

手許に留め置いて、私の通りにしたいのであるが、それでは却つて其許を不孝の子にしてしまふから、私は今後其許を私の思ふ通りのものにせず、其許の思ふまゝに爲せることにした』と申されたことがある、如何にも父の申された如く、その頃私は文字の力の上から云へば、不肖ながら或は既に父より上であつたかも知れぬ、また父とは多くの點に於て、不肖ながら優つた所もあつたらう、然るに父が無理に私を父の思ふ通りのものにしようとし、斯くするが孝の道であると、私に孝を強ゆるが如きことがあつたとしたら、私は或は却つて父に反抗したりなぞして、不孝の子になつてしまつたかも知れぬ、幸ひに斯ることにもならず、及ばぬうちにも不孝の子にならずに濟んだのは、父が私に孝を強ひず、寛宏の精神を以て私に臨み、私の思ふまゝの志に向つて私を進ましめて下された賜物である、孝行は親がさして呉れて初めて子が出來るもので、子が孝をする

のでは無く、親が子に孝をさせるのである。

父が斯る思想を以て私に對して下された爲め、自然その感化を受けたものか、私も私の子に對しては父と同じやうな態度を以て臨むことにして居る、私が此く申すと少し烏滸がましくはあるが、何れかと云へば、父よりも多少優れた所があつたので、父と全く行動を異にし、父と違つた所があつて、父の如くになり得なかつたのである、私の子女等は將來如何なるものか、素より神ならぬ私の斷言し得る限りでないが、今の所では、兎に角、私と違つた所がある、この方は、私と父とが違つた違ひ方と反對で、何れかと申せば劣る方である、併し此く私と違ふのを責めて、私の思ふ通りになれよ、と子女等に强ひて試みたところで、それは斯く注文して强ひる私の方が無理である、私の通りになれよ、と私に强ひられても、私のやうになれぬ子女は、どうしても成れぬ筈のもので

ある、然るに猶ほ強ひて、子女等を總て私の思ふ通りにしやうとすれば、子女等は私の思ふ通りに成り得ぬだけのことで、不孝の子になつてしまはねばならぬ、私の思ふ通りにならぬからとて、子女等を不孝の子にして仕舞ふのは忍ぶべからざる事である。

故に私は子に孝を爲せるのでは無い、親が孝を爲せるやうにして遣るべきだと云ふ根本思想で子女等に臨み、子女等が總て私の思ふやうに爲らぬからとて、之を不孝の子だとは思はぬことにして居る。

◎現代教育の得失

昔の青年と今の青年とは、昔の社會と今の社會と異なるが如くに異なつて居る、余が二十四五歳の頃、即ち明治維新前の青年と現代の青年とは、其の境遇、其の教育を全然

異にして居るが爲めに、何れが優り何れが劣つて居るといふことは、一口には言ひ現はせない、而かも一部の人士は、昔の青年は意氣もあり、抱負もありて、今の青年より遙かに偉かつた、今の青年は輕浮で元氣がないと云ふが、一概にさうばかりも言へまいと思ふ、何となれば、昔の少數の偉い青年と現今の一般青年とを比較し來りて、彼れ是れ言ふことは少しく誤つて居る、今の青年の中にも偉い者もあれば、昔の青年にも偉くない者もあつた、維新前の士農工商の階級は極めて嚴格であつた、武士の中にも上士と下士といふが如き階級があり、百姓町人の間にも、代々土地の素封家で庄屋を勤めて居るやうな家柄と、普通の百姓町人とは、自ら其の氣風教育に異なる所があつた、斯の如き有樣であつたから、昔の青年といつても、武士と上流の百姓町人と、一般の百姓町人とは、其の教育も異つて居たのである。

昔の武士及び上流の百姓町人は、其の青年時代に多く漢學教育を受けたもので、初めは小學とか孝經とか近思錄とか、更に進んでは論語、大學、孟子等を修め、一方身體の鍛錬と共に武士的精神を鼓吹したものである、而して一般の町人百姓は如何なる教育を受けたかと云へば、極めて卑近な實語教とか庭訓往來とか又加減乘除の九々等を學んだに過ぎない、從つて高尙な漢學教育を受けた武士は、理想も高く見識もあつたものであるが、百姓町人は通俗な手習に過ぎなかつたので、概して無學者が多かつたのである、然るに今は四民平等となり、貴賤貧富の差別なく、悉く教育を受くることゝなり、乃ち岩崎三井の息子も九尺二間の長屋の息子も、皆同一の教育を受くるといふ有樣であるから、其の多數の青年中の品性の劣等な、學問の出來ない青年のあるのは、蓋し止むを得ないことである、故に今の一般の青年と昔の少數なる武士階級の青年とを比較し

て彼れ是れと非難するは、當を得ないことである。

現今でも高等教育を受けた青年の中には、昔の青年に比較して毫も遜色のない者が幾らもある、昔は少數でも宜いから、偉い者を出すといふ天才教育であつたが、今は多數の者を平均して啓發するといふ常識的教育となつて居るのである、昔の青年は良師を撰ぶといふことに非常に苦心したもので、有名な熊澤蕃山の如きは中江藤樹の許へ行つて其の門人たらんことを請ひ願つたが許されず、三日間其の軒端を去らなかつたので、藤樹も其の熱誠に感じて、遂に門人にしたといふ程である、其他新井白石の木下順庵に於ける、林道春の藤原惺窩に於けるが如きは、皆その良師を擇んで學を修め、德を磨いたのである。

然るに現代青年の師弟關係は、全く亂れて仕舞つて、美はしい師弟の情誼に乏しいの

は寒心の至りである、今の青年は自分の師匠を尊敬して居らぬ、學校の生徒の如きは、其の教師を觀ること、恰かも落語師か講談師かの如く、講義が下手だとか、解釋が拙劣であるとか、生徒として有るまじきことを口にして居る、これは一面より觀れば、學科の制度が昔と異なり、多くの教師に接する爲であらうが、總て今の師弟の關係は亂れて居る、同時に教師も亦その子弟を愛して居らぬといふ嫌ひもあるのである。

要するに、青年は良師に接して自己の品性を陶冶しなければならない、昔の學問と今の學問とを比較して見ると、昔は心の學問を專一にしたが、現今は智識を得ることにのみ力を注いで居る、昔は讀む書籍その者が悉く精神修養を說いてゐるから、自然と之を實踐するやうになつたのである、修身齊家と言ひ、治國平天下と言ひ、人道の大義を敎へたもである。

論語にも『其爲レ人也孝弟、而好レ犯レ上者鮮矣、不レ好レ犯レ上、而好レ作レ亂者、未二之有一也』といひ『事レ君能致二其身一』といひて、忠孝主義を述べ、且つ仁義禮智信の教訓を敷衍しては、また同情心、廉恥心を喚起させるやうにし、又禮節を重んずるやうにし、或は勤儉生活の貴ぶべきことを教へたものであるから、昔の青年は自然と身を修むると共に、常に天下國家の事を憂ひ、朴實にして廉恥を重んじ、信義を貴ぶといふ氣風が盛であつた、之に反して、現今の教育は智育を重んずるの結果、既に小學校の時代から多くの學科を學び、更に中學大學に進んで益々多くの智識を積むけれども、精神の修養を等閑に附して心の學問に力を盡さないから、青年の品性は大に憂ふべきものがある。

一體現代の青年は學問を修める目的を誤つて居る、論語にも『古之學者爲レ己、今之學者爲レ人』と云つて嘆じてあるが、移して以て今の時代に當て箝めることが出來る、今の

青年は唯學問の爲に學問をして居るのである、初より確然たる目的なく漠然と學問する結果、實際社會に出てから、我は何の爲に學びしやといふが如き疑惑に襲はれる青年が往々にしてある、學問すれば誰でも皆偉い者になれる、といふ一種の迷信の爲に、自己の境遇生活狀態をも顧みないで、分不相應の學問をする結果、後悔するが如きことがあるのである、故に一般の青年は、自己の資力に應じて小學校を卒業すると、それぞれの專門教育に投じて實際的技術を修むべきである、また高等の教育を受くる者も、尙ほ中學時代に於て、將來は如何なる專門學科を修むべきかといふ、確然たる目的を定むることが必要である、淺薄なる虛榮心の爲めに修學の法を誤らば、是れ實に青年の一身を誤るのみならず、國家元氣の衰退を招く基となるのである。

◎偉人と其の母

婦人は彼の封建時代に於けるが如く、無教育にして寧ろ侮蔑的に取扱つて置けば宜しいであらうか、それとも相當な教育を施し、修身齊家の道を教へねばならぬであらうか之は言はずとも知れ切つた問題で、教育は縱ひ女子だからとて、決して疎かにすることは出來ないのである、それに就て余は先づ婦人の天職たる子供の育成といふことに關して、少しく考慮して見る必要があらうと思ふ。

凡そ婦人と其の子供とは如何なる關係を持つて居るものであるかと云ふに、之を統計的に研究して見れば、善良なる婦人の腹から善良なる子供が多く生れ、優れた婦人の教育に因つて優秀な人材が出來るものである、その最も適切な例は彼の孟子の母の如き、

ワシントンの母の如き卽ち其れであるが、我國に於ても楠正行の母、中江藤樹の母の如き、亦皆賢母として人に知らるゝものであつた、近くは伊藤公、桂公の母堂の如きも賢母であつたと聞いて居る、兎に角優秀の人材は、其の家庭に於て賢明なる母親に撫育された例は非常に多い、偉人の生れ賢哲の世に出づるは婦人に因る所が多いと云ふことは、獨り余一家の言では無いのである、して見れば婦人を教育して其の智能を啓發し婦徳を養成せしむるは、獨り教育された婦人一人の爲のみならず、間接には善良なる國民を養成する素因となる譯であるから、女子教育は決して忽諸に附することが出來ないものであるといふことに成るのである、然り矣、女子教育の重んずべき所以は未だそれのみにては盡きない、余は更に女子教育の必要なる理由を次に述べて見やうと思ふ。

明治以前の日本の女子教育は、專ら其の教育を支那思想に取つたものであつた、然る

に支那の女子に對する思想は消極的方針で、女子は貞操なれ、從順なれ、緻密なれ、優美なれ、忍耐なれよ教へたが、此く精神的に教育することに重きを置いたにも拘はらず、智慧とか學問とか學理とかいふ方面に向つての智識に就ては奬めも教へもしなかつた、幕府時代の日本の女子も主として此の思想の下に教育されたもので、貝原益軒の『女大學』は其の時代に於ける唯一最上の教科書であつた、乃ち智の方は一切閑却され、消極的に自己を愼むことばかり重きを置いたものである、而して左樣いふ教育をされて來た婦人が今日の社會の大部分を占めて居る、明治時代になつてから女子教育も進歩したとはいへ、未だそれら教育を受けた婦人の勢力は微々たるもので、社會に於ける婦人の實體は『女大學』以上に出ることの出來ぬものと言ふも、敢て過言では無からうと思ふ、故に今日の社會に婦人教育が盛んであるとは謂つても、尚ほ未だ充分その効果を社會に

認識せしむるには至らぬ、謂はゞ女子教育の過渡期であるから、その道に携はる者は其の可否を能く論斷し講究しなくてはならぬでは無いか、況んや昔の『腹は借りもの』といふ樣なことは口にすべからざる今日、又言うてはならぬ今日とすれば、女子は全く昔日の如く侮蔑視、嘲弄視することは出來ないことゝ考へられる。

婦人に對する態度を耶蘇教的に論じて云々することは姑く別とするも、人間の眞正なる道義心に訴へて、女子を道具視して善いものであらうか、人類社會に於て男子が重んずべきものとすれば、女子も矢張社會を組織する上に其の一半を負うて立つ者だから、男子同樣重んずべき者ではなからうか、既に支那の先哲も『男女室に居るは大倫なり』と云うてある、言ふ迄もなく女子も社會の一員、國家の一分子である、果して然らは女子に對する舊來の侮蔑的觀念を除却し、女子も男子同樣國民としての才能智德を與へ、

倶に共に相助けて事を爲さしめたならば、從來五千萬の國民中二千五百萬人しか用を爲さなかつた者が、更に二千五百萬人を活用せしめる事となるでは無いか、是れ大に婦人教育を興さねばならぬといふ根源論である。

◎其罪果して孰れに在りや

師弟間の關係をして、情誼を厚くし、相親しむの念慮を強くあらせたいと思ふ、地方の學校に於ては何うか知らぬが、私が聞及ぶ東京の中邊の學校に於ては、頗る此の師弟の關係が薄い、殆んど師と弟子とが、惡い例を言はうならば、寄席に出る落語を聽きに往つた多數の聽衆の如く見受けられる、あの人の講義は面白くないとか、あの人は時間が長いとか、甚しきは惡い癖を見付けて、之を批評すると聞及ぶ、尤も昔とても師弟の

間の情愛が總て密だとは言へぬけれども、試みに孔子は三千の弟子があつた、是等が皆能く顔を知り、皆能く談話した人ではあるまい、併し其中で六藝に通ずるものが七十二人あつた、是等の人々は常に孔子と談話して居つたやうに見える、七十三人は全く孔子の人格に感化されたやうに見える、斯の如き師弟を例として論ずるも餘り過當であらうが、また今日の支那を見ると、左まで模範ともされない、併し今日の支那が悪いからとて、孔子の德が變遷する譯はない、支那が後に悪いからとて孔子を輕んぜぬでも宜い、支那が善いからとても桀紂を重んずる譯には往かない、故に孔子が主として子弟を導いた有様は、誠に師たり弟子たる間柄が極く善いと思ふ、斯の如き有様を今日求める譯には往かぬけれども、德川時代に於ても師弟間の感化力は強かつた、其の情誼が切實であつたといふことは、試みに一例を言はんか、熊澤蕃山が中江藤樹に師事した有様などで

分かる、蕃山はあれ程氣位の高い人であつて、謂ゆる威武に屈せず、富貴に蕩せずといふ、天下の諸侯を物の數ともせず、備前侯に仕へたが、師として敬せられたから、政を施した位の見識のあつた人だが、中江藤樹に向つては眞に子供のやうになつて、三日忍んでさうして弟子たることを得た、其の師弟間の情愛の深かつたのは、蓋し中江藤樹の德望が人を感化せしめたものと思ふ、又新井白石といふ人も剛情で、智畧といひ、才能といひ、また氣象といひ、實に稀有の人である、それが終身木下順庵には服從して居たといふことである、近世佐藤一齋といふ人も、能く弟子を感化せしめた、また廣瀨淡窓も同樣である、私の知つてるのは漢學の先生だけだけれども、子弟といふ關係が、昔風では一身を抽んでて親むといふのである、然るに今の子弟の間は、殆んど寄席を聽きに往つた有樣をなして居るといふことは、私は滿足の風習でないと恐れて居る、畢竟これ

は師匠たる人が惡いと云はなければならぬ、德望、才能、學問、人格がモウ一層進まなければ、其の子弟をして敬虔の念を起さしむることは出來ぬ、そこには師たる人に缺點があると謂はねばならぬ。

併し弟子の心得方も甚だ惡いと思ふ、一般の風習が、其の師に對して敬ふといふ念が少い、他の國々の有樣はよく分かりませぬが、彼の英吉利などは如何も私は子弟の間の關係が、日本の今日のやうでは無いと思ふ、但し日本でも優れた教育に從事した人が、猶ほ今私が述べた有樣とは言はぬ、或る方面には中江藤樹も、木下順庵もあらうけれども、甚だ鮮い、過渡時代のため、不幸にして俄出來の先生が澤山あるから、自ら斯る弊害を惹起したのだと辯解すれば、辯疏の言葉があるけれども、苟くも人に應接する以上は、其人自身が自ら省みて餘程注意して貰ひたいものであると同時に、また一方より之

を十分敬ふといふ心を以て、師弟の間に情愛を以てしたいと思ふ、若し諸君の從事なさる學校の教員諸氏にも、生徒をして常に之に接觸せしむるに、此く心掛けられたら、其の風儀を良くするといふことが、悉くは屆かないまでも、惡いのを防ぐといふだけ位のことは、必ず爲し得られるものであらうと、斯う思ふのである。

◎理論より實際

世間一體に、教育のやり方を見ると――私は殊に今の中等教育なるものが其弊が甚しいと思ふ――單に智識を授けるといふことにのみ重きを置き過ぎて居る、換言すれば、德育の方面が缺けて居る、確かに缺乏して居る、又一方に學生の氣風を見ると、昔の青年の氣風と違つて、今一と呼吸といふ勇氣と努力、それから自覺とが缺けて居る、此く

言へばとて、自分の如き昔者が決して自慢高慢をする譯ではないが、何しろ當時の教育は學課の科目が多い、あれもこれもといふ有樣であるので、その多い科目の修得にのみ逐はれて、維れ日も足らずといふ風であつて見れば、從つて他を顧みる遑もない勘定で人格、常識等の修養に心を注ぐことの出來ぬのも自然の數で、返す〴〵も遺憾千萬な譯である、現に處世の人となつてる人々は兎も角として、是から世間に出て大に奮勵努力、國家の爲に盡さうと思はれる方々は、此邊に能く〳〵心を用ゐて貰ひたい。

所で、自分に最も關係の深い實業方面の教育に就て見るに、その昔にありては、實業教育と名付くべき程のものはなかつたが、維新以後になつても、明治十四五年の頃までは、此の方面には些の進歩を見ることは出來なかつた、商業學校の如きも、其の發達は僅々この二十年程の間のことである。

一體文明の進歩といふことは政治、經濟、軍事、商工業、學藝等が悉く進んで、其所に始めて見ることが出來るので、其中の何れか一が缺如しても、完全なる發達、文明の進歩のあるものではない、然るに日本では、其の文明の一大要素である商工業が、久しい間閑却して顧みられずにあつた、翻つて歐洲の諸列強に見るに、他の方面の事も勿論進歩して居るが、其中でも取りわけ進んで居るのが實業である、即ち商工業である我國に於ても近來は實業教育に世人が注意するやうになつて、進歩發達はして來たが、さて惜いかな、其の教育の方法はと云ふと、前述の如く其他の教育の方法と同じく、せくが儘に、急ぐが儘に、理智の一方にのみ傾き、規律であるとか、人格であるとか、德義であるとか云ふことは、毫も顧みられない、機運の趨く所、餘儀ない次第と言はゞ言へ實に嘆ずべきことである、是を軍人社會に見ると、其の教育法の然らしむる所か、或は

軍事といふ其職が、既に其の性質を養ふものか、其邊の所は解らぬが、一般的統一、規律、服務、命令等のことが、整然と嚴格に行はれて居るやうであるのは、實に結構なことで、立派な人格な士を見受けるのも、非常に頼もしい次第である。

實業界に立つ者は、前述の諸性質を十分に備へた上に、尚ほ一つ尊ばなければならぬ一大事が殘つて居る、それは自由といふことで、實業の方では、軍事上の事務のやうに、一々上官の命令を俟つてるやうでは、兎角好機を逸し易いので、何事も命令を受けてやると云ふ具合では、一寸發達といふことは六ヶ敷いのである、その結果、唯智へ、智へと傾いて行つて唯もう己が利益々々とのみ逐うて孟子の謂ゆる『上下交ゝ利を征りて饜かず、國危し』と云ふやうな狀態に陷つてはと、是れのみ氣遣はれるので、どうがなして斯ういふ事に立ち至らぬやうと、竊かに手近い實業教育に於ても、智育と德育とを併

行せしめて行きたいものと、及ばずながらも、多年努めて居る次第である。

◎孝らしからぬ孝

德川幕府の中葉より行はれはじめ、神儒佛三道の精神を合せ平易なる言葉を用ゐ、極卑近にして而かも通俗な譬喩を擧げて、實踐道德の鼓吹に力めたものに『心學』といふものがある、八代將軍吉宗公の頃、石田梅巖初めて之を唱へ、かの有名な鳩翁道話なぞも、此の派の手に成つたものであるが、梅巖の門下よりは手島堵庵、中澤道二などの名士出で、この兩人の力により、心學は普及せらるゝやうになつたものである。

私は曾て此の兩人の中の中澤道二翁の筆になつた道二翁道話と題せらるゝ一書を讀んだことがある、その中に載つてる近江の孝子と信濃の孝子とに就ての話は、未だに忘れ

得ざる程意味のある面白いもので、確か孝子修行といふ題目であつたかの如くに記憶して居る。

その名は何と云つたか、今明確に覺えて居らぬが、近江の國に一人の有名な孝子があつた、『夫れ孝は天下の大本なり、百行の依て生ずる所』と心得て、日夜その及ばざるを唯惟れ恐れて居つたが、信濃の國に亦有名なる孝子あると聞き及び、親しく其の孝子に面會して、如何にせば最善の孝を親に盡すことの出來るものか、一つ問ひ訊して試みたいものだ、との志を懷き、遙々と野越え山越えて、夏なほ凉しき信濃の國まで、態態近江の國から孝行修行に出掛けたのである。

漸々にして孝子の家を尋ね當て、其家の敷居を跨いだのは、正午過であつたが、家の中には唯一人の老母が在るだけで、實に寂しいものである、『御子息は』と尋ねると、『山

へ仕事に行つてるから』とのことに、近江の孝子は委細來意を留守居の老母まで申し述べると『夕刻には必ず歸らうから、兎に角上つて御待ち下さるやうに』と勸められたので、遠慮なく座敷に上つて待つてると、果して夕暮方に至れば信濃の孝子だと評判の高い子息殿が、山で採つた薪を一杯背負つて歸つて來られた。そこで近江の孝子は、此所ぞ參考のために大に見て置くべき所だらうと心得て、奥の室から樣子を窺つて居ると、信濃の孝子は、薪を背負つたまゝで緣に睦乎と腰を掛け、荷物が重くて仕樣がないから、手傳つて卸して呉れろと、老母に手傳はして居る模樣である、近江の孝子は先づ意外の感に打たれて、猶ほ窺つてるとも知らず、今度は足が泥で汚れてるから淨水を持つて來て呉れの、やァ足を拭うて呉れのと、樣々な勝手な注文ばかりを老母にする。然るに老母は如何にも悅ばしさうに嘻々として、信濃の孝子が言ふまゝに能く悴の世話をして遣

るので、近江の孝子は誠に不思議のこともあればあるものと驚いてゐるうちに、信濃の孝子は足も綺麗になつて爐邊に坐つたが、今度は又あらうことかあるまいことか、足を伸して、大分疲れたから揉んで呉れと老母に頼むらしい模樣である、それでも老母は嫌な顏一つせず揉んで行つてゐるうちに、はる〴〵近江からの御客樣があつて、奧の一ト間に通してある由を信濃の孝子に語ると、そんならば御逢ひしやうとて座を起ち、近江の孝子が待つてる室にノコ〳〵やつて來た。

近江の孝子は一禮の後、信濃の孝子に委細來意を告げて、孝行修行の爲に來れる一部始終を物語り、彼是れ話し込むうち早や夕飯の時刻にもなつたので、信濃の孝子は晩餐の支度をして客人に出すやうにと老母に頼んだ樣子であつたが、愈よ膳が出るまで、信濃の孝子は別に母の手傳をしてやる模樣もなく、膳が出てからも平然として母に給仕さ

せるのみか、やれ御汁が鹹くて困るとか、御飯の加減が何うであるとか、と老母に小言ばかりを言ふ、そこで近江の孝子も遂に見かねて『私は貴公が天下に名高い孝子だと承つて、はる〴〵近江より孝行修行の爲め罷り出たものであるが、先刻よりの樣子を窺ふに、實に以て意外千萬の事ばかり、毫も御老母を勞はらるゝ模樣のなきのみか、剩へ老母を叱らせらるゝとは何事ぞ、貴公の如きは孝子どころか、不孝の甚しきものであらうぞ』と勵聲一番、開き直つて詰責に及んだのである、之に對する信濃の孝子の答辯が又至極面白い。

『孝行々々と、如何にも孝行は百行の基たるに相違ないが、孝行をしやうとしての孝行は眞實の孝行とは言はれぬ、孝行ならぬ孝行が眞實の孝行である、私が年老いたる母に種々と賴んで、足を揉ませたりするまでに致し、御汁や御飯の小言を曰つたりするのも、

母は子息が山仕事から歸つて來るのを見れば、定めし疲れてゐることだらうと思ひ、『さぞ疲れたらう』と親切に優しくして下さるので、その親切を無にせぬやうにと、足を伸して揉んで貰ひ、また客人を饗應すに就ては、定めし不行屆で息子が不滿足だらうと思うて下さるものと察するから、その親切を無にせぬ爲め、御飯や御汁の小言までも曰うたりするのである、何でも自然のまゝに任せて、母の思ひ通りにして貰ふところが、或は世間に、私を孝子々々と言ひ囃して下さる所以であらうか』といふのが、信州の孝子の答であつた、これを聞いて近江の孝子も飜然として大に悟り、孝の大本は何事にも強ひて無理をせず、自然のまゝに任せる所にある、孝行のために孝行を力めて來た我身には、まだ〱到らぬ點があつたのだと氣付くに至つた、と說いた所に道二翁道話の孝行修行の教訓があるのである。

◎人物過剩の一大原因

經濟界に需要供給の原則がある如く、實社會に投じて活動しつゝある人間にも、亦此の原則が應用されるやうである、言ふまでもなく、社會に於ける事業には一定の範圍があつて、使ふだけの人物を雇ひ入れると、それ以上は不必要になる。然るに一方人物は年々歳々澤山の學校で養成するから、未だ完全に發達せぬ我が實業界には、迚も夫等の人々を滿足させるやうに使ひ切ることは不可能である、殊に今日の時代は高等教育を受けた人物の供給が過多になつて居る傾が見える、學生は一般に高等の教育を受けて、高尚の事業に從事したいとの希望を持つてかゝるから、忽ち其所に供給過多を生じなければ止まぬことに爲つて仕舞ふ、學生が此の如き希望を懷くのは、個人としては勿論嘉す

べき心掛であるが、これを一般社會から觀、或は國家的に打算したら如何であらうか、余は必ずしも喜ぶべき現象として迎へることは出來ないやうに思はれる、要するに、社會は千篇一律のものでは無い、從つて之に要する人物にも色々の種類が必要で、高ければ一會社の社長たる人物、卑くければ使丁たり車夫たる人物も必要である、人を使役する側の人は少數なのに反し、人に使役される人は無限の需要がある、左れば學生が此の需要多き、人に使役さるゝ側の人物たらんと志しさへすれば、今日の社會と雖も未だ人物に過剩を生ずるやうな事はあるまいと考へる、然るに今日の學生の一般は、其の少數しか必要とされない、人を使役する側の人物たらんと志して居る、つまり學問して高尚な理窟を知つて來たから、馬鹿らしくて人の下なぞに使はれることは出來ないやうになつて仕舞つて居る、同時に教育の方針も亦若干その意義を取り違へ、無暗に詰込主義の

智識教育で能事足れりとするから、同一類型の人物ばかり出來上り、精神修養を閑却した悲しさには、人に屈するといふことを知らぬので、徒らに氣位ばかり高くなつて行くのだ、此の如くんば人物の供給過剩も寧ろ當然のことではあるまいか。

今更、寺小屋時代の教育を例に引いて論ずる譯ではないが、人物養成の點は不完全ながらも昔の方が巧くいつて居た、今日に比較すれば教育の方法などは極めて簡單なもので、教科書と言つた所で、高尙なのが四書五經に八大家文位が關の山であつたが、それに依つて養成された人物は、決して同一類型の人物ばかりでは無かつた、それは勿論教育の方針が全然異つて居たからではあらうけれども、學生は各〻其の長ずる所に向うて進み、十人十色の人物となつて現はれたのであつた、例へば、秀才はどん〱上達して高尙な仕事に向うたが、愚鈍の者は非望を懷かずに下賤の仕事に安んじて行くといふ風

であつたから、人物の應用に困るといふやうな心配は少かつた、然るに今日では教育の方法は極めて宜いが、其の精神を穿き違へて居る爲に、學生は自己の才不才、適不適をも辨へず、彼も人なり我も人なり、彼と同一の教育を受けた以上、彼のやる位のことは自分にもやれるとの自負心を起し、自ら卑しい仕事に甘んずる者が少いといふ傾向である、これ昔の教育が百人中一人の秀才を出したに反し、今日は九十九人の普通的人物を造るといふ教育法の長所ではあるが、遺憾ながら其の精神を誤つたので、遂に現在の如く中流以上の人物の供給過剰を見るの結果を齎らしたのである、併し同じ教育の方針を執りつゝある、歐米先進國の有樣を見るに、教育に因つて斯る弊害を生ずることは少いやうに思ふ、殊に英國の如きは我國に於ける現時の狀態とは大に違うて、十分なる常識の發達に意を用ゐ、人格ある人物を造るといふ點に注意して居るやうに見える、固より

教育のことに關して其の多くを知らぬ余の如き者の容易に容喙さるべき問題ではないが、大體から觀て今日のやうな結果を得る教育は、餘り完全なるものであるとは謂はれまいと思ふ。

日に其の亡き所を知り、月に其の能くする所を忘るゝことなきは、學を好むと謂ふべきなり。

論語

學ぶに暇あらずと謂ふ者は、暇ありと雖も亦學ぶこと能はず。

淮南子

成敗と運命

◎それ唯忠恕のみ

凡そ業は勤むるに精しく、嬉むに荒むといふが、萬事が即ちそれである、若し大なる趣味と大なる感興とを以て事業を迎へられたならば、假令如何に忙しく、又如何程煩はしくとも、倦怠若くは厭忌といふが如き、自己が苦痛を感ずる氣分の生ずべき理由はない、若し又これに反して、全然沒趣味を以てイヤ〳〵ながら事務に從ふといふ場合には、必ず先づ倦怠を生じ、次で厭忌を生じ、次で不平を生じ、最後には自分が其の職を拋たねばならぬやうになるは、蓋し數の自然である、前者は精神潑溂として愉快の中に趣味

なるものを發見し、この趣味よりして無限の感興を惹起し、感興は軈て事業の展開を來たすことに至るものである、而して事業の展開は卽ち社會に公益を與ふることになる、後者は精神が萎縮して、怏々鬱々、倦怠より困憊を釀し、困憊はやがて其身の滅亡を意味することになる、假りに前者と後者とを對照して、その孰れを執るかを諸氏に試問したならば、前者を執ることの最も賢しこく、後者を執ることの最も愚なるを明答せらるることであらう、又よく世人が口癖のやうに運の善惡といふことを說くが、抑も人生の運といふものは十中の一二、或は豫定があるかも知れぬ、併しながら假令これが豫定なりとして見た所が、自ら努力して運なるものを開拓せねば、決してこれを把持するといふことは不可能である、愉快に事務を執りつゝ一方に大なる災厄を招致すると、其はじめ啻に天淵のみであるまい、諸氏も亦必ず其の一方を捨てゝ他の一方を把持せられんこ

とを熱望せらるゝであらう、而して諸氏が銘々其の事業上に大なる趣味と大なる感興とを有たるゝと同時に、其の内容の充實を期さねばならぬ、況して救濟事業の如きは、其の性質上注意の上にも猶ほ一層の注意を拂ひ、努めて其の内容の豐富ならんことに於て遺憾なきを期すべきである、さればと云うて其の内容にのみ腐心して形式を疎外視することも宜しくない、凡そ各種の事業として、内外共に權衡を缺いてはならぬ、要するに、單に其の表面を衒はんが爲め、徒らに形式にのみ囚はるゝと云ふことは、最も注意してこれを避けねばならぬ。

更に言ふまでもなきことながら、本院（東京市養育院）には、現に（大正四年一月）二千五六百人の窮民が收容してある、其の中には除外例として、善因却つて惡果を結びて窮民たり、行旅病人たるものなきにあらざるも、其の多くは謂ゆる自業自得の輩であ

る、併しながら彼等を自業自得の者なりとして、同情を以て臨まぬは甚だよろしくない、夫れ吾人の須臾も離るべからざる人道なるものは、一に忠恕に存するものであるから、孰れも其の職務に忠實にして、而して且つ仁愛の念に富まねばならぬ、余は敢て彼等を飽くまで優遇せよとは言はぬが、これに臨むに常に憐愍の情を缺いてはならぬと云ふのである、諸氏は呉々もこの道を體得して、これを執務上に現實せねばならぬ、また醫務に從事せらるゝ諸氏に於ても、收容の患者を以て單に自己研究の資料となすにこれ努むるならば、其は甚だ遺憾の極みである、研究さるゝも程度問題であるから、絶對に惡いとは言はぬが、醫員諸氏に於ては患者を治療するといふことが當面の義務と信じて勉勵せらるゝことを望むのである、又看護婦の人々にあつても同樣であつて、患者へ對しては誠に親切に取扱はれたきものである、彼等には精神上缺陷する所が多い、社會の落伍

者敗殘者として之に同情するといふことが、前に述べた忠恕である、忠恕は即ち人の歩むべき道にして立身の基礎、つまりは其の人の幸運を把持することになるのである。

◎失敗らしき成功

支那で聖賢といへば、堯舜が先づ初まりで、それから禹湯文武周公孔子となるのであるが、堯舜とか禹湯とか文武周公とかいふ人達は、同じ聖賢の中でも、何れも皆今の言葉でいふ成功者で、生前に於て夙く既に見るに足るべき治績を擧げ、世人の尊崇を受けて死んだ人々である、之に反し、孔夫子は今の言葉の謂ゆる成功者ではない、生前は無辜の罪に遭つて陳蔡の野に苦められたり、隨分、艱難ばかりに苛められたもので、是といふ見るべき功績とても社會上にあつた譯ではない、併し千載の後、今日になつて見

ると、生前に治績を擧げた成功者の堯舜禹湯文武周公よりも、一見その全生涯が失敗不遇の如くに思はれた孔子を崇拜する者の方が却つて多く、同じく聖賢の內でも、孔夫子が最も多く尊崇せられて居る。

支那といふ國の民族氣質には一種妙な所があつて、英雄豪傑の墳墓などは粗末にして置いて、毫も怪まず平然たり得る傾向がある、併し友人にして支那の事情に通ぜらるゝ白岩君に面會して親しく聞いた所や、また白岩君が「心の花」に寄せられた紀行などを讀んでも明かに知られるやうに、曲阜にある孔夫子の廟ばかりは、流石の支那人も之を頗る鄭重に保存して、善美壯嚴を極め、夫子の後裔も今猶ほ現存して、一般より非常なる尊敬を受けて居るとのことである、然らば孔夫子が生前に於て堯舜禹湯文武周公の如き政治上に見るべき功績を擧げて、高き位に居るまでに至らず、其富も天下を有つといふ

までになれずに、今の言葉でいふ成功をしなかつた事は、決して失敗でないのである、之が却つて眞の成功と謂ふべきものである。

眼前に現はれた事柄のみを根據として、成功とか失敗とかを論ずれば、湊川に矢盡き刀折れて戰死した楠正成は失敗者で、征夷大將軍の位に登つて勢威四海を壓するに至つた足利尊氏は確に成功者である、併し今日に於て尊氏を崇拜する者はないが、正成を尊崇する者は天下に絶えぬのである、然らば生前の成功者たる尊氏は却つて永遠の失敗者で、生前の失敗者たりし正成は却つて永遠の成功者である、菅原道眞と藤原時平とに就て見ても、時平は當時の成功者で、太宰府に罪なくして配所の月を眺めねばならなかつた道眞公は、當時の失敗者であつたに相違ないが、今日では一人として時平を尊む者なく、道眞公は天滿大自在として全國津々浦々の端に於ても祀られて居る、道眞公の失

敗は決して失敗でない、是れ却つて眞の成功者である。

是等の事實より推して考へると、世の謂ゆる成功は必ずしも成功でなく、世の謂ゆる失敗は必ずしも失敗でないといふことが頗る明瞭になるが、會社事業其他一般營利事業の如き、物質上の效果を擧げるのを目的とするものにあつては、若し失敗すると、出資者其他の多くの人にも迷惑を及ぼし多大の損害を掛ける事があるから、何が何でも成功するやうに努めねばならぬものであるが、精神上の事業に於ては、成功を眼前に收めやうとする如き淺慮を以てすれば、世の糟を喫するが如き弊に陷つて、毫も世道人心の向上に貢獻するを得ず、永遠の失敗に終るものである、例へば新聞雜誌の如きものを發行して、一世を覺醒せんとしても、此目的を達するが爲に時流に逆つて反抗すれば、時に或は奇禍を買つて、世の謂ゆる失敗に陷り、苦い經驗を嘗めねばならぬ如き場合がな

いとも限らぬのである、併しそれは決して失敗ではない、假令一時は失敗の如くに見えても、長い時間のうちには努力の功空しからず、社會は之に依つて益せられ、結局其人は必ずしも千載の後を待たずとも、十年二十年或は數十年を經過すれば、必ずその功を認められることになる。

文筆言論、その他凡て精神的方面の事業に從事する者が、今の謂ゆる成功を生前に收めやうとして悶けば、却つて時流に阿り、效果を急ぐが爲に、社會に益を與へぬやうな事になる、さればとて如何に精神的事業でも、徒らに大言壯語して、人生の根本に觸ることの出來ぬ大きな目論見ばかり立てゝ、毫も努力する所がないやうでは、百載の後、假令黄河の澄む期節があつても、到底失敗に終り、最後の成功を收め得らるべきもので無い、渾身の努力をさへ盡して居れば、精神的事業に於ての失敗は決して失敗ではない、

宛かも孔夫子の遺業が、今日世界幾百千萬の人に安心立命の基礎を與へつゝある如く、後昆を裨益し、人心の向上發達に貢献し得ることになり得るものである。

◎人事を盡して天命を待て

天の果して如何なるものであらうかと云ふことに就ては、私の關係して居る歸一協會などの會合でも屢次議論の起るところであるが、或る一部の宗教家中には、天を一種の靈的動物であるかの如くに解釋し、之を人格ある靈體とし、恰かも人間が手足を動かして、或は人に幸福を授けたり不幸を下したりするのみならず、祈禱したり御縋り申したりすれば、天は之を左右せられて、命を二三にせらるゝかの如くに考へて居らるゝ方もある、併し天は是等の宗教家方の考へらるゝ如く、人格や人體を具へたり、祈願の有無

に依つて、幸不幸の別を人の運命の上につける如きものでは無い、天の命は人の之を知りもせず覺りもせぬ間に、自然に行はれてゆくものである、素より天は手品師の如き不可思議の奇蹟などを行ふものでは無い。

此れが天命であるか彼れが天命であるとか云ふのは、畢竟人間が自分でそれ〴〵勝手に極めることであつて、天の毫も關知する所ではないのである、故に人間が天命を畏れて、人力の如何ともする能はざる、或る大なる力の存在を認め、人力を盡しさへすれば、無理なことでも不自然なことでも、何でも必ず貫徹するものと思はず、恭、敬、信を以て天に對し、明治天皇の教育勅語のうちに、謂ゆる古今に通じて謬らず、中外に施して悖らぬ、坦々として長安に通ずる大道をのみ歩み、人力に勝ち誇つて無理をしたり、不自然の行爲をしたりするのを愼むといふことは、誠に結構の至りであるが、天或は神或

は佛を人格人體あり、感情に左右せらるゝものであるかの如くに解釋するのは、甚だ間違つた觀念であらうかと思ふのである。

天命は人間が之を意識しても將た意識しなくつても、四季が順當に行はれて行くやうに、百事百物の間に行はれてゆくものたるを覺り、之に對する恭、敬、信を以てせねばならぬものだ、と信じさへすれば、『人事を盡して天命を待つ』なる語のうちに含まるゝ眞正の意義も、初めて完全に解し得らるゝやうになるものかと思ふ、されば實際世に處して行く上に於て、如何に天を解してゆくべきものかといふ問題になれば、孔夫子の解せられて居つた程度に之を解して、人格ある靈的動物なりともせず、天地と社會との間に行はるゝ因果應報の理法を偶然の出來事なりともせず、之を天命なりとして恭、敬、信の念を以て對するのが、最も穩當なる考へ方であらうかと思ふのである。

◎湖畔の感慨

大正三年の春、支那旅行の途上、上海に着いたのは五月六日であつたが、其の翌日は鐵道で杭州に行つた、杭州には西湖といふ有名な景勝の湖水があり、其の邊りに岳飛の石碑がある、その碑から四五間程離れた處に、當時の權臣秦檜の鐵像があつて相對して居る、岳飛は宋末の名將で、當時宋と金との間には屢々戰があつて、金の爲に宋は燕京を略取せられ、南宋と稱して南方に偏在した、岳飛は朝命を奉じて出征し、金の大軍を破つて、將に燕京を恢復しやうとしたのであるが、奸臣秦檜は金の賄賂を納れて岳飛を召還した、岳飛は其の奸を知つて、臣が十年の功一日にして廢る、臣職に稱はざるにあらず、實に秦檜、君を誤るなりと言つたが、彼は遂に讒によりて殺された、斯の誠忠

なる岳飛と奸佞なる秦檜とは、今數歩を隔てゝ相對して居るのだ、如何にも皮肉ではあるが、對象また妙である、今日岳飛の碑を覽に行つた人々は、殆んど慣例のやうに岳飛の碑に對つて淚を濺ぐと共に、秦檜の像に放尿して歸るとのことである、死後に於て忠奸判然たるは實に痛快である。

今日支那人中にも岳飛のやうな人もあらう、又秦檜に似たる人がないとも言はれぬけれども、岳飛の碑を拜して秦檜の像に放尿するといふのは、是れ實に孟子の謂ゆる『人性善』なるに因るのではあるまいか、天に通ずる赤誠は、深く人心に沁み込んで、千載の下猶ほ其の德を慕はしむるのである、是を以ても人の成敗といふものは、蓋棺の後に非ればば得て知ることが出來ない、我國に於ける楠正成と足利尊氏も、菅原道眞と藤原時平も、皆然りと謂ふべきである、此の碑を覽るに及んで感慨殊に深きを覺えた。

◎順逆の二境は何れより來るか

茲に二人があるとして、其の一人は地位もなければ富もなく、素より之を援き立てる先輩もない、即ち世に立つて榮達すべき素因といふものが極めて薄弱であるが、纔に世の中に立つに足るだけ、一通りの學問はして世に出たとする、然るに其人に非凡の能力があつて、身體が健全で、如何にも勉強家で、行が皆節に中り、何事をやらせても先輩をして安心させるだけに仕上げるのみならず、却つて其の長上の意想外に出る程にやるから、必ず多數人は此人の行ふ所を賞讃するに相違ない、而して其人は官に在ると野に在るとを問はず、必ず言行はれ、業成り、終には富貴榮達を得らるゝやうになる、然るに此人の身分地位を側面から見て居る世人は、一も二もなく彼を順境の人と思ふであ

らうが、實は順境でも逆境でもなく、其人自らの力で左樣いふ境遇を造り出したに過ぎないのである。

更に他の一人は、性來懶惰で、學校時代には落第ばかりして居たのを、やつとお情で卒業したが、さて此上は今まで學んだ所の學問で世に立たねばならぬけれども、性質が愚鈍で且つ不勉强であるから、職を得ても上役から命ぜらるゝ所の事が何も彼も思ふやうに出來ない、心中には不平が起つて仕事に忠實を缺き、上役に受けが惡く、遂には免職される、家に歸れば父母兄弟には疎んぜられる、家庭に信用がない位なら郷里にも不信用となる、斯うなれば不平は益々嵩まり、自暴自棄に陷る、其所に附込んで惡友が誘惑すると、思はず邪路に蹈入り、勢ひ正道を以て世に立てぬことになるから、已むを得ず窮途に彷徨しなければならぬ、然るに世人はこれを見て逆境の人といひ、又それが如

何にも逆境であるらしく見えるのである、實は左樣でなくて皆自ら招いだ所の境遇であるのだ、韓退之が其子を勵ました『符讀書城南』の詩中に、『木之就規矩、在梓匠輪輿、人之能爲人、由腹有詩書、詩書勤乃有、不勤腹空虛、欲知學之力、賢愚同一初、由其不能學、所入遂異閭、兩家各生子、提孩巧相如、少長聚嬉戲、不殊同隊魚、年至十二三、頭角稍相疏、二十漸乖張、淸溝映汙渠、三十骨骼成、乃一龍一豬、飛黃騰踏去、不能顧蟾蜍、一爲馬前卒、鞭背生蟲蛆、一爲公與相、譚々府中君、問之何因爾、學與不學歟』云々といふ句があるが、こは主として學問を勉强するとに就て曰ふたものであるとは云へ、また以て順逆二境の由つて岐るゝを知るに足るであらう、要するに惡者は數ふるとも仕方なく、善者は數へずとも自ら仕方を知つて居て、自然と其の運命を造り出すものである、故に嚴正の意味より論ずれば、此の世の中には順境も逆境も

無いといふことになる。

若し其人に優れた智能があり、之に加ふるに缺くる所なき勉强をしてゆけば、決して逆境に居る筈はない、逆境がなければ順境といふ言葉も消滅する、自ら進んで逆境といふ結果を造る人があるから、それに對して順境ぞといふ言葉も起つて來るのである例へば、身體の尫弱の人が、氣候を罪して寒いから風を引いたとか、陽氣に中つて腹痛がするとかいうて、自分の體質の惡いことは更に口にしない、これも風邪や腹痛といふ結果の來る前に、身體さへ强壯にして置いたならば、何も夫等の氣候の爲に病魔に襲はるゝことは無いであらうに、平素の注意を怠るが爲に自ら病氣を招くのである、然るに病氣になつたからというて、それを自分の責とはせず、却つて氣候を怨むに至つては、自ら作つた逆境の罪を天に歸すると同一論法である、孟子が梁の惠王に『王歳を罪す

ること無くんば、斯に天下の民至らん』と曰ふたのも矢張同じ意味で、政治の悪いことを言はず、歳の悪いことに其の罪を歸せしめんとした誤りである、若し民の歸服せんことを欲するならば、歳の豐凶は敢て與る所にあらず、專ら治者の德の如何を主とせなければならぬ、然るに民が服せぬからというて、罪を凶歳に歸して自己の德の足らざるを忘れて居るのは、恰かも自ら逆境を造りながら、其罪を天に問はんとすると同一主義である、兎に角世人の多くは、我が智能や勤勉を外にして逆境が來たかの如くいふの弊がある、そは愚も亦甚だしいもので、余は相當なる智能に加ふるに勉强を以てすれば世人の謂ゆる逆境なぞは、決して來らぬものであると信ずるのである。

以上述べた所よりすれば、余は逆境はないものであると絶對に言ひ切りたいのであるが、左樣まで極端に言ひ切れない場合が一つある、それは智能才幹何一つの缺點もな

く、勤勉精勵、人の師表と仰ぐに足るだけの人物でも、政治界實業界に順當に志の行はれてゆく者と、其の反對に何事も意と反して蹉跌する者とがある、而して後者の如き者に對して、余は眞意義の逆境なる言葉を用ゐたいのである。

◎細心にして大膽なれ

社會の進歩と共に、秩序が整つて來るのは當然のことであるが、其れと共に新規の活動を始めるに多少不便ともなり、自然保守に傾くやうなことにもなる、固より輕佻浮薄な行動は、何れの場合に於ても愼むべきであるが、餘りに大事を考へて因循姑息となり謂ゆる固くもなり、惰弱に流るゝ如きことゝもなる結果、進歩發展を阻害する傾向を生じては個人の上に於ても、又國家の前途に關しても、甚だ憂ふべき事と謂はねばならぬ

世界の大勢は日に月に動いて競爭は激甚となり、文物は日進月歩の有樣であるが、我國は不幸にして久しい間鎖國の狀態にあつたので、世界の趨勢に後れた、開國以來たとひ列國を驚異せしむる程の急速の進步をなしたとは言へ、萬般の事物が彼に後れて居ることは爭はれぬ、即ち後進國の狀態を免れないのである、故に彼の先進國と競爭し角逐し、更に之を凌駕して行かうとするには、彼に倍する努力を以て進まねばならぬ、多少にても個人の向上を助け、國運を進轉せしむる事には、全力を傾倒して進取する勇猛心を必要とするのである、然れば從來の事業を後生大事に保守し、或は過失失敗を虞れて逡巡する如き弱い氣力では、到底國運の退嬰を來さずには居らぬのである、是非とも深く此點を考へて、大に計畫もし發達もして、眞實の價値ある一等國と成らねばならぬ、溌剌たる進取の氣力を養ふことは勿論、且つ發揮する必要を痛切に感ずることは、現時に於

て特更である。

潑溂たる進取の氣力を養ひ且つ發揮するには、眞に獨立獨歩の人とならねばならぬ、人に依頼するに過る時は、甚しく自分の實力を退嬰せしめ、最も大切な自信といふものが容易に生ぜず、遂には因循卑屈の性を成して了ふものなれば、深く自己を鞭撻して、弱い氣の生ずるを防がねばならぬ、また餘りに堅苦しく物事に拘泥し、細事に沒頭する時は、自然に潑溂たる氣力を銷磨し、進取の勇氣を挫くことになるのであるから、此點も深く注意せねばならぬ、元より細心周到なる努力は必要であるが、一方大膽なる氣力を發揮して、細心大膽兩者相竢ち、潑溂たる活動をなし、始めて大事業を完成し得るものであるから、近來の傾向に就ては、大に警戒せねばならぬ、近頃青年の間に新しい活氣が勃興し、大に其の本領を發揮せんとする傾向を生じたのは、即ち慶賀すべきことなる

が、壯年社會に不活潑の傾向が依然として彌蔓するやうでは、憂ふべき事と言はねばならぬ、獨立不羈の精神を發揮するには、今日の如く政府萬能の狀態で、民間の事業が政府の保護に戀々たる狀の見える如き風を一掃し、銳意民力を伸張して、政府を煩はさないで事業を發展せしむる覺悟が必要である、又細事に拘泥し部局の事にのみ沒頭する結果、法律規則の類を增發し、汲々として其の規定に觸れまいとし、或は其の規定內の事に滿足し、齷齪して居るやうでは、迚も新進の事業を經營し、潑剌たる生氣を生じ、世界の大勢に駕することは覺束ない。

◎成敗は身に殘る糟粕

世の中には惡運が強くて成功したかの如くに見える人がないでもない、併し人を見る

に、單に成功とか又は失敗とかを標準とするのが根本的誤りではあるまいか、人は人たるの務を標準として一身の行路を定めねばならぬので、謂ゆる失敗とか成功とかいふものは問題外で、假りに惡運に乘じて成功したものがあらうが、善人が運拙くして失敗した者があらうが、それを見て失望したり悲觀したりするには及ばないでは無いか、成功や失敗の如きは、唯丹精した人の身に殘る糟粕のやうなものである。

現代の人の多くは、唯成功とか失敗とかいふことのみを眼中に置いて、それよりもモット大切な天地間の道理を見て居ない、彼等は實質を生命とすることが出來ないで、糟粕に等しい金錢財寶を主として居るのである、人は唯人たるの務を完うすることを心掛け、自己の責務を果し行ひて、以て安んずることに心掛けねばならぬ。

廣い世界には、成功すべくして失敗した例は幾らもある、智者は自ら運命を作ると聞

いて居るが、運命のみが人生を支配するものでは無い、智惠が之に伴うて始めて運命を開拓することが出來るのである、如何に善良の君子でも、肝腎な智力が乏しくて、イザといふ場合に機會を蹈み外したら成功は覺束ない、家康と秀吉とは能く此の事實を證明して居る、假りに秀吉が八十歳の天壽を保ち、家康が六十で死去したら如何であつたらうか、天下は徳川の手に歸せずして、却つて豐臣の萬歳であつたかも知れぬ、然るに數奇なる運命は、徳川氏を助けて豐臣氏に禍した、單に秀吉の死期が早かつたのみならず、徳川氏には名將智臣が雲の如く集つたが、豐臣氏には淀君といふ嬖妾が權威を擅にして、六尺の孤を託すべき誠忠無二の且元は擯けられ、却つて大野父子が寵用されるといふ有樣、加之ならず、石田三成の關東征伐の一擧は、豐臣氏の自滅を急がしむるの好機會を造つた、抑も豐臣氏愚なるか、徳川氏賢なるか、余は徳川氏をして三百年の泰平

の覇業を成さしめたものは、寧ろ運命の然らしむる所であつたと判斷する、併しながら此の運命を捉へることが六ケ敷い、常人は往々にして際會せる運命に乘ずるだけの智力を缺いて居るが、家康の如きは其の智力に於て到來せる運命を捕捉したのである。

兎に角人は誠實に努力黽勉して、自ら運命を開拓するが宜い、若しそれで失敗したら、自己の智力が及ばぬ爲と諦め、また成功したら智惠が活用されたとして、成敗に關はらず天命に托するが可い、此くて敗れても飽くまで勉强するならば、何時かは再び好運に際會する時が來る、人生の行路は樣々で、時に善人が惡人に敗けた如く見えることもあるが、長い間の善惡の差別は確然とつくものである、故に成敗に關する是非善惡を論ずるよりも、先づ誠實に努力すれば、公平無私なる天は、必ず其人に福し運命を開拓するやうに仕向けて呉れるのである。

道理は天に於ける日月の如く、終始昭々乎として毫も昧まさゞるものであるから、道理に伴うて事をなす者は必ず榮え、道理に悖つて事を計る者は必ず亡ぶる事と想ふ、一時の成敗は長い人生、價値の多い生涯に於ける泡沫の如きものである、然るに此の泡沫の如きものに憧憬れて、目前の成敗のみを論ずる者が多いやうでは、國家の發達進歩も思ひやられる、宜く其様な浮薄な考は一掃し去りて、社會に處して實質のある生活をするが宜い、苟くも事の成敗以外に超然として立ち、道理に則つて一身を終始するならば、成功失敗の如きは愚か、それ以上に價値ある生涯を送ることが出來るのである、況んや成功は人たるの務を完うしたるより生ずる糟粕たるに於ては、尚更意に介するに足らぬでは無いか。

論語と算盤終

格言五則

天地鬼神之道、皆惡二滿盈一、謙虛沖損、可二以免レ害。　顏氏家訓

天道先レ春後レ秋、以成レ歲、爲レ政先レ令後レ誅、以爲レ治。　揚子

論レ農曰、霑レ體、塗レ足、暴二其髮膚一、盡二其四肢之力一、以從二事於田野一。　國語

農不レ如レ工、工不レ如レ商、刺二繡文一、不レ如レ倚二市門一。　史記貨殖傳

農事傷則饑之本也、女工害則寒之源也。　劉新[illegible]論

大正五年九月七日印刷
大正五年九月十三日發行
大正五年九月廿五日再版
大正七年十二月廿八日三版

通俗名著叢書
第三十七編

正價金壹圓廿錢

不許複製

著作者　村上信

發行者　伊東芳次郎
東京市牛込區神樂町一丁目一番地

印刷者　川瀬精一郎
東京市神田區鍛冶町三番地

印刷所　株式會社共榮舍
東京市神田區鍛冶町三番地

發行所　東京市牛込區神樂町一ノ一
電話番町五三七、三〇一七
振替東京一七一一番
東亞堂書房

□東亞堂出版圖書特約賣捌店

東京神田　東京堂書店
同神田　上田屋
同神田　誠文堂
同神田　魁強堂
同神田　二松堂
同神田　內藤進運堂
同神田　中西屋書店
同神田　有斐閣雜誌店
同日本橋　至誠堂
同日本橋　林平次郎
同日本橋　文林堂
同日本橋　積原書店
同京橋　目黑書店
同京橋　前川書店
同京橋　北陸館
同京橋　東海堂
同京橋　春陽堂
同京橋　新橋堂
同麻布　森江書店
同本郷　森江分店
同本郷　日本堂
同小石川　鶴聲堂

東京牛込　同文館
同牛込　文影堂
同芝　岸田書店
同芝　福島屋書店
横濱市　第一有隣堂
同　第四有隣堂
同　魁強堂
同　弘文堂
同　金養堂
神奈川町　第三有隣堂
大阪市　福音社
同　盛文館
京都市　松田庄助
同　寶文館支店
神戸市　寶文館支店
名古屋市　川瀨書店
同　小澤百架堂
同　星野文星堂
廣島市　友田書店
同　積善館支店
山口町　白銀日新堂
久留米市　菊竹金文堂

熊本市　長崎書店
福岡市　積善館支店
同　博文社
佐賀市　大坪博信堂
長野市　西澤書店
前橋市　煥乎堂本店
宇都宮市　煥乎堂支店
長岡市　目黑書店
同　覺張書店
新潟市　萬松堂書店
金澤市　宇都宮書店
富山市　中田書店
札幌區　富貴堂書店
小樽區　左文字書店
秋田市　石川書店
弘前市　今泉本店
青森市　今泉支店
仙臺市　鈴木英華堂
富岡町　吉田書店
台南　小出書店
京城　日韓書房
大連　大阪屋號

□東亞堂發賣圖書目錄（郵券貳錢御送附あれば）即時贈呈す

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03172 3430